

---

# 背後霊との付き合い方

日暮ひのめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

背後霊との付き合い方

### 【Nコード】

N6728A

### 【作者名】

日暮ひのめ

### 【あらすじ】

幼馴染みの雪乃を、交通事故で亡くした葵。しかし、元々靈感のあつた葵に雪乃が取り憑いてしまい・・・

## 第一話（前書き）

この小説は、私が以前別名を使いこちらで掲載させていただいた小説のリメイク版です。

続きを楽しみにしていて下さった皆様、申し訳ありませんでした。どうぞこちらでお楽しみ下さい。

## 第一話

うららかな春の昼下がり。ゆるやかな坂道を、制服姿の男女二人が並んで歩いている。

歩道の両側に植えられた桜は満開で、制服姿の二人によく映えている。

それぞれ、手には通学カバンを持っており、どうやら学校帰りのようだ。

「あたし達、今日から高3だね、葵ちゃん」

「なんか変な感じだな」

楽しそうに話す少女は松下<sup>マツシタ</sup> 雪乃<sup>ユキノ</sup>。茶色の髪を背まで伸ばした、色

白の小柄な少女だ。

パツとした華やかさはなかったが、大きな目を持つ可愛い顔立ちをしており、同じクラスの男子生徒からは密かに人気がある。

対して、眠そうな表情で雪乃と並んで歩く少年の名は水城<sup>ミズシロ</sup> 葵<sup>アオイ</sup>。彼を一言で表すと、『地味』であった。

身長・体重共に平均的。成績も中の下。交友関係も狭く、目立つ事が嫌い。

顔は悪くないのに、何故かモテない男子。その見本のような存在であった。

まあ、そんな彼には他の人にはあまり見られない特別な『力』があったのだが……。

「あーあ、そろそろ進路決めなきゃなあ」

「葵ちゃんはどこの大学行くかまだ決めてないんだ？」

傾斜のついた道は平坦にかわり、二人の歩みも自然と遅くなる。

よく、友人達から『あんたら、付き合ってるの?』と言われる。しかし、それを聞かれる度、二人は首を振った。そう、別に付き合っているワケではない。幼稚園からの幼馴染み、というだけだ。そう、ただの幼馴染み。

「・・・」

ふと葵が歩みを止めた。少し遅れて雪乃も立ち止まる。

「ん、どうしたの葵ちゃん?・・・もしかして、『いる』の?」

電信柱を凝視する葵に、雪乃は恐る恐る訪ねた。

「・・・ああ」

雪乃も目を凝らす、特に何もない。ただあるのは、電信柱の下に供えられた花束と、多数の菓子やおもちや。

「駄目だあ、やっぱりあたしには見えないや、オバケ」

そう。大抵の人にはない、葵の持つ特別な力。それは『靈感』であった。

葵には、物心ついた時からこの力があつた。小さい時は生きてるモノと死んでるモノの区別がつかなかったくらいだ。

ちなみに葵の目には、花束とお供え物をじっと見つめる小さい子供の姿が映っていた。

「・・・行こう」

「う、うん」

靈感の事は、雪乃しか知らない。

その雪乃だって、靈感の事を話した・・・というか、知られてしまったのは中学に入ってからだ。

家族に何回言っても信じては貰えず、友人に言っても気味悪がられ、下手をしたらいじめられる。

最初は分かってもらおうとした葵だったが、その様な事が続き、やがて力の事は誰にも言わなくなった。

でも、たった一人。雪乃だけは信じてくれた。

靈感がある、という事を打ち明けた時、笑って『すごいじゃん！羨ましいよ』と言ってくれた事を、葵は今でも覚えている。

「あ」

ふと、何かを思い出したかのように葵は立ち止まった。

「え、今度は何？・・・もしかして、またいるの？」

おそろおそろたずねる雪乃。しかし、その返答は彼女の予期したものではなかった。

「・・・今日配られたプリント、全部机の中に忘れてきた」

「な、なんだ。びっくりした・・・。あのプリントって、明日までに提出だよ。今から取りに行く？」

葵は少し考えると、

「ごめん雪乃、先帰ってて！」

言うが早いか今来た道を走り出す。

「あ、ちよつと葵ちゃん！」

雪乃が慌てて振り返った時には、既に葵の背中では小さくなっていた。ぽつんと取り残された雪乃は、ふう、とため息をついた。

（せつかく久しぶりに葵ちゃんと帰れると思つたのに・・・）

葵と雪乃の家は、近所だった。なので中学くらいまでは登下校を共にしていたのだが、高校に入ってからそれはそれが次第に減っていった。友人に何回も付き合っているのだと勘違いされ、お互いに照れくさくなつてしまつたのだ。

今日一緒に帰る事になつたのは、たまたま二人ともクラスの用事をまかされてしまい、帰る時間が遅くなつてしまつたからだ。

（別に付き合つてゐるわけじゃないのにね）

くすくすと笑いながら、雪乃はゆつくりと歩く。

そうすれば、葵が自分に追いついてくれるかもしれないと思つたからだ。

そのまま彼女は交差点に差し掛かる。住宅街で、更にお昼時な為、人も車も全く通っていない。

この時点では、雪乃はまだ自分がどうなるか、なんて思つてもいなかった。

（それにしても、今日はいい天気だな。雲が一つもないや）

何だか今日は、全ての物事がゆつくり流れている気がする。全てが平穏で、静かだ。自然と心が穏やかになる。

その時だった。

轟音と共に、一台のトラックが暴走してきた。

雪乃は、それを見た途端、足がすくんで動けなくなる。

あ、あれ。全然停まってくれないや。運転手さん、寝てるのかな。

つい、そんな場違いな事を考えてしまう。

視界がトラックでいっぱいになり、次の瞬間、雪乃の意識は闇へと引きずり込まれた。



## 第二話

（良かった、昇降口が閉まってなくて）

忘れ物を取りに行く、と言い雪乃と別れてから早5分。

校門を抜け、昇降口で上履きに履き替えた俺はひたすら階段を上っていた。

（と、遠い・・・）

2年の時は教室は2階にあったのだが、新学年になったら4階に移ってしまったのだ。

おまけに、葵たちの新クラス・3年5組は階段から一番遠い場所にある。

倍以上になった道のりを早足で歩き、ようやく教室にたどり着いた。

「お、あつたあつた」

机の中を覗き込み、葵はほう、と軽く息をついた。

そこには『進路希望調査書』と書かれたプリントが無造作につっこんであつた。

葵はそれを急いでカバンに押し込み、教室を後にする。

（それにしても・・・進路、ねえ）

今日から高校3年生。

自分の進路について考えはじめるには遅すぎる気がするが、葵は将来については全く考えていなかった。

まあ、大学に進学することになるんだろうな、というのは予想がつ

いた。

しかし、それは親の考えに『就職』なんて文字はなかったからだし、友達が次々と志望の大学を決めていくのを横目で見ていたからかもしれない。

葵自体は志望する大学も学科もなかったし、そもそも自分は将来何がやりたいか、なんてわからなかったし、考えたこともなかった。

（なんか俺・・・将来絶対後悔しそうだよな）

あまりにも将来性・計画性のない自分が情けなくなるが、慌てて気を取りなおす。

（いけね、こんな事考えてないで、さっさと雪乃に追いつかなきゃ）

葵はしんとした教室を出て、階段を駆け下り昇降口を後にする。

まだ雪乃と別れてから10分くらいしか立っていないから、全力疾走すれば間に合うだろう。

中途半端にかかとを踏んでいたスニーカーを履きなおし、トントんとつま先で地面を叩く。

一息つくくと、葵は走り出した。

（今日は折角一緒に帰るハズだったのに、何か悪いことしちゃったしな）

高校に入ってから雪乃と一緒に帰るのは、久しぶりだった。

入学したての頃はまだ友達もいなくてよく登下校を共にしたものが、

季節が変わるにつれ、段々その回数も減っていった。

（あの頃はクラスの男子に変な事聞かれたりしたしな・・・）

葵と雪乃が一緒に登下校する様子を見ていたクラスの連中は、当然2人が付き合っていると思い込み、変な質問をしたり、ひやかしたりしたものだ。

（やっぱ雪乃も嫌だったんだろーな、そういうの。その頃から学校じゃあんまり口利いてくれなくなっただし・・・）

4月とは思えぬ気温の高さに、葵は一旦学ランを脱ぎ、また走り出す。

（そ、そろそろ息が切れてきたっ・・・）

5分も走っただろうか、そろそろ先ほど雪乃と別れた場所だ。もしかしたら何処かで俺を待っているかもしれない。

端から見たら自惚れだと思われるだろうが、雪乃の性格は十数年の付き合いでわかってい（つもり）だ。

葵はスピードを落とし、キョロキョロと辺りを見渡す。

すると、この先の交差点のあたりで、人だかりが出来ているのを見した。

どくん。

葵の心臓が高鳴る。

運動した後の動悸とはまた別の高鳴り。何か言い知れぬ不安。

（・・・何かあったのかな）

葵は、恐る恐るざわめく人だかりへと近づく。

それは心臓の鼓動を落ち着かせるためか、  
無意識のうちにこの先の人ばかりを『見てはいけない』という本能  
に駆られてのことか。

次第に野次馬のおばちゃん達の会話が聞こえてきた。

「・・・事故ですって」

どくん。

「・・・なんでも、運転手が居眠りしてたらしいわよ」

「可哀想に、女の子が・・・」

どくん。

全身から、冷や汗とも脂汗ともわからないものが噴き出す。

まさか。考えすぎだ。

葵は近所に住む顔見知りのおばさんを見かけたので、ためらいがち  
に声をかけてみる。

「あ、あのっ・・・何があっただんですか？」

「あら、葵くん。いやね、アタシも今さっき来たばかりでよくわか  
らないんだけどね、

ここで事故があつたらしいのよ。何でも制服着た女の子がトラック  
にはねられて、  
病院に運ばれたらしいのよ」

「そ、それってまさか・・・」

その時、葵はポケットで振動する携帯に気づいた。  
学校にいる間はずっとマナーモードにしているのだが、外にいた為気づかなかつたらしい。

発信者を見ると、『水城 恵子』 葵の母だ。

急いで通話ボタンを押し、電話を耳にあてると、悲鳴に近い母の声が飛び込んできた。

「葵！何やってたのよ、何回かけても繋がらないし・・・そんな事より、大変なの！」

雪乃ちゃんが・・・さっき事故に遭って病院に運ばれたって、雪乃ちゃんのお母さんから連絡があって、重態なんだって！」

「重態！？」

「筑摩総合病院、あんたもよく行くからわかるわよね？母さん先に行ってるから、葵も急いで来なさい、いいわね！？」

葵の返事を待たず、恵子は電話を切った。

後には、ツー、ツーという無機質な機械音だけが残る。

「・・・くそっ！」

誰に向けるわけでもない悪態をつき、葵は筑摩総合病院に向かい走り出した。

\*\*\*

ノンストップで走り続け、息も絶え絶えになった葵は筑摩総合病院へと辿り着いた。

病院の入り口で恵子を見つけ、ナースステーションで雪乃の事を聞く。

そして看護師に案内されたのは、患者が入院している病棟の一室だった。

どうぞ、と促され、葵は恐る恐る病室に足を踏み入れた。

病室には、葵もよく知っている雪乃のお母さんとお父さんがいた。

二人とも、部屋の中央に設置してあるベッドの側におり、すすり泣いている。

「ゆき、の……？」

清潔感漂う真っ白なベッドに、雪乃は寝かされていた。

周りには、よく病院のドラマで見るような『生命維持装置』みたいなものとか、

何やらよくわからない機械が多数あるが、それらから伸びたコードはいかにも『今さっき取り外された』といった感じで、簡単にまとめられていた。

「………」

葵は雪乃の顔を覗き込む。

彼女の顔は、多少の擦り傷はあるものの、それ以外は全く普段と変わりがない。

まるで、眠っているかのようなだった。

「……雪乃は、10分程前に……」

雪乃のお母さんが、すすり泣きを押さえながら伝えようとするが、後は声にならない。

それを聞いた恵子は泣き崩れたが、葵は涙一つ流さなかった。

目頭は火事が起きたのかと思うほど熱く、鼻の奥は辛いものを食べたみたいに

ツーンとしていたが、ここで泣いたらきつと止まらなくなる。  
いつもは頼れる母の恵子がこの有り様なんだから、自分がしつかり  
しなくてはならない。

葵は唇をキツく噛み締め、両の手は僅かに血が滲むほど強く握り締  
めていた。

\*\*\*

「・・・ふうっ」

自室に入るなり、明かりも点けずに葵はドサリとベッドに倒れこん  
だ。

その後の事はよく覚えていないが、しばらく呆然とした後、  
葵の父・健司と妹・麻耶に連絡し、泣き崩れた恵子をなだめるため  
に受付のソファにいて、

家族が全員揃ってもう一度雪乃のいる病室に顔を出した後、  
タクシーを呼び家族揃って帰宅した、といった感じである。

「雪乃・・・」

ほんの3時間前まで一緒に下校していた幼馴染みの名を呼んでみる  
が、

それは、いとも簡単に夜に満ちた暗い室内に吸い込まれて消えた。

あたし達、今日から高3だね、葵ちゃん。

葵ちゃんはどこの大学行くかまだ決めてないんだ？

雪乃の笑顔と共に、彼女の最後ともいえる言葉の一つ一つがゆっくりと脳裏によぎる。

あのプリントって、明日までに提出だよ。今から取りに行く？

「・・・くそっ」

葵は枕に顔を埋め、きつく握り締める。

（どうしてあの時、俺だけ学校に戻ったりしたんだ！雪乃と一緒に学校に行っても良かったし、プリントなんて放つといて一緒に帰れば良かった・・・そうすれば）

そうすれば、雪乃は死なずにすんだかもしれないのに。

思わず、病室ではずっと堪えていたものが溢れそうになる。

葵ちゃん。

ふと、笑顔で自分の名を呼ぶ雪乃の声が聞こえた気がした。

（雪乃・・・）

葵ちゃん。

（雪乃の声が聞こえるなんて・・・おかしくなっちゃったのかな）

葵ちゃんってば！

電気ショックを受けたみたいに、全身が強張った。ハッキリと聞こえた。幻聴なんかじゃない。

あれは、雪乃の声だ。



ハッとして顔を上げると、そこには、窓の外からじっとこっちを覗き込む雪乃がいた。

葵の部屋は二階。もちろん、人が外に立てるハズがない。

「うつ・・・」

沈んだ雰囲気の水城家に、葵の絶叫がこだました。

### 第三話

「あ、あ・・・ゆ、雪、雪・・・」

葵は陸に打ち上げられた魚の如く、口をパクパクと上下させながら  
うわ言のように呟いた。

それもそうだろう。

いくら幽霊に見慣れているからといって、幼馴染み　しかも今日  
亡くなった

が幽霊となり、自分の目の前にここに笑っているのだから。

「どうしたの!？」

そこに、血相を変えた一人の少女が飛び込んできた。葵の妹、麻耶<sup>マヤ</sup>  
である。

葵の大声が聞こえたので、駆けつけたのだ。

「あー、えつと・・・」

何やら気まずい沈黙。それもそのはずだ。

葵とは反対に麻耶は全く霊感がなく、霊も全く見えない。

したがって目の前にいる雪乃も見えず、葵には何て説明したらいい  
のかわからなかった。

ちなみに麻耶と同じく、葵の両親も霊が見えないため、

幼い葵が何を言っても馬鹿にされるだけで、霊が見えることを信じ  
てもらえなかった。

「えーっと。ホラ、あれだよ。蜘蛛。でっかい蜘蛛がいてさー。ハ  
ハハ・・・」

苦し紛れの言い訳。しかも大根役者である。

しかしそんな兄に何か言葉を投げかけるわけでもなく、妹は盛大なため息をついて部屋を出て行った。階段を下る音が聞こえ、

続いて『あんのバカ、たかが蜘蛛に腰抜かしてんの』と両親に報告する声が聞こえた。

（完璧にナメられてるよな、俺って・・・）

今年から中学三年生の妹は、どうやら少々反抗期のようなようである。

「・・・で？雪乃はどうして俺のどこにいるんだ？」

妹の登場によりすっかり落ちついてしまった（というかテンションが急降下した）葵は、

開きっぱなしのドアを閉めると、部屋の電気をつけ、ベッドに腰をおろした。

それが、自分でもどうして葵ちゃんのどこに来ちゃったかわからないの。

気付いたら窓の外から葵ちゃんのコト見てた

「わかんないってお前・・・」

生前と全く同じ調子で話す雪乃に、葵は呆れ顔で彼女を眺める。

肩までの栗色の髪、小柄な身体、顔つき……。特に変わったところはない。

強いて言えば、病院のベッドで横たわる雪乃の顔にあった擦り傷が消えているということくらいか。

だがしかし。

（身体が青白く透けてるって事は・・・やっぱり幽霊、なんだよな）

幼少の頃から幽霊を見続けた葵は、最初こそ生きている人間と死んでいる人間の区別が

つかなかったが、次第に、幽霊にしかない決まった共通点を発見した。

つまり、今の雪乃のように『幽霊の身体は透き通っていて、向こう側が見える』ということだ。

（それに浮いてるし）

雪乃は、ベッドに座る葵の周りをふよふよと漂ったりしていた。確かに、これは生身の人間に出来ることではない。

なあに？葵ちゃん。人の顔じろじろと・・・

「あ、いや。何でもない・・・」

心なしか顔の赤い雪乃につられ、葵も赤くなるのを感じ、それを軽い咳払いでごまかす。

「・・・えっと、気を悪くしたら謝るけど」

うん、なあに？

「その、お前・・・病院で亡くなったんだよな？」

ん、そうだよ

明るかった雪乃の表情に、僅かながら影が落ちる。

「あ、別に言いたくなかったらいいんだけど・・・どうしてこんな事になったのかな、と思って」

うつん、気にしないで。死んだ時のことはあたしもよく覚えてないんだけど・・・

雪乃の話によると、こういうことらしい。

ぼんやりとしながら歩いていた雪乃は、交差点に差し掛かった瞬間暴走トラックに

ぶつかり、意識を失った。不思議と恐怖も痛みはなかったという。

その後、気がついたら自分がトラックにはねられた場所におり、自分の身体が透けていた。その時、『自分は死んだ』という実感が湧いたが、

この時も不思議と悲しいだとか辛いだとかの感情はなかった。

そしてそのまま葵の家に直行、窓からベッドにいる葵を見ていたという。

「そつか・・・ごめんな、辛いこと思い出させちまって」

平気・・・ってそれより葵ちゃん、走馬灯って本当にあるんだね

！

「走馬灯ってアレか、死ぬ瞬間に今までの思い出が見えるっていう」

そーそー！すごかったよ、映画のワンシーン見てるみたいに、パパッて！しかも・・・

そこで雪乃はハッとしたように口をつぐんでしまった。

「しかも、なんだよ」

あ、いや。何でもないよ、うん。それでね葵ちゃん、お願いがあるんだけど・・・

「・・・まあいいか。お願いってなんだ？」

うん・・・あのね、あたしを・・・しばらくここに置いてくれない？

・・・。

家出少女さながらの発言に、葵はしばらく意味が理解できなかった。

「えーっと。それはつまり、取り憑くってことか？俺に？雪乃が？」  
うん・・・ダメ、かな

「あ、いや。ダメじゃないけど・・・」

よくよく考えれば可哀想なのは雪乃である。

今日から新しい学年が始まり、これからのことを楽しみにしていたのに、

突如予期せぬ形で命を奪われてしまったのだ。

ここで雪乃を突き放すなんて、自他共に認めるお人よしの葵ができるはずもなかった。

「・・・わかったよ。取り憑かれるのは始めてだけど、多少は霊に免疫もあるし」

ほんと！？ありがと、葵ちゃん！

雪乃の笑顔を見て、葵はフツと笑った。

いつからだろう。この満面の笑顔を見ると安心できるようになったのは。

「ただし、条件が一つ」

なあに？

「なるべく早く成仏しろよ」  
わかってるよ、葵ちゃんっ

こうして、葵と幼馴染み兼幽霊である雪乃との、奇妙な共同生活が始まった。

### 第三話（後書き）

さて、リメイクされた『はいつき』ですが、  
リメイク前と多少内容が変わってくると思います。  
批評など頂けたら勉強になるので、どうぞよろしくお願いいたします。

長くなると思いますが、お付き合い下さいませ。

## 第四話

翌日の昼過ぎ、葵は制服姿でワゴン車に揺られ、まどろんでいた。

「ホラ、もうすぐ着くわよ」

「……ん」

葵は運転席にいる母親に声をかけられ、うつすらと目を開ける。

今日は平日なのに、何故葵は学校に行かないのか。

理由は至って簡単だ、今日は雪乃の告別式があるからである。

雪乃の事故の事は、学校が連絡網を回して3学年の生徒全員に伝わったらしい。

なので来れる人は今日の学校帰りに告別式に来るらしいが、水城家は松下家とは10年以上の付き合いという事もあり、葵は学校を休み雪乃の告別式に出向く事となったのだ。

（それにしても、やっぱマズい……よな）

運転席には恵子、助手席には麻耶、そして後部座席には葵、といったところだが、もう一人。

葵の隣にちよこんと腰掛けている、雪乃である。

勿論、家を出る際に葵は雪乃を気遣って家で待っているように言ったのだが、雪乃は『大丈夫』と言って笑った。

無理をしているのは明らかだったが、長年の付き合いで雪乃が一度言い出したことは曲げないと知っていた葵は、『絶対に無理はするなよ』とだけ念を押しておいた。

葵はチラリと雪乃を盗み見るが、嘆きだとか悲しみなんて微塵もない。



むしろ、バックミラーに姿の写らない自分を面白がっている様子である。

（・・・ま、大丈夫かな。やばかったら俺が具合悪いフリして出ればいいし）

駐車場独特の砂利を踏みしめる音と共に、葵の乗った車は今回雪乃の葬儀が行われる『荒井セレモニー』の駐車場に停止した。

うわぁー、綺麗な建物だね

小さく頷く葵。家族の前、というより他人の前で霊との会話はしないことにしている。

力を理解しない人の前でそんな事をしたら気味悪がられるだけだからだ。

それは、葵が幼い頃の経験でちゃんとわかっていた。

勿論その事をちゃんと理解している雪乃は、反応の薄い葵を咎めもしない。

彼女の生前もそうだったが、こういう時、葵は雪乃という理解者がいてくれた事を感謝する。

「何してるの葵、早く中に入るわよ」

「あ、うん」

大きな扉の左右に『松下家』と書かれているちようちんがぶら下がっているのを見て、どこか違和感を感じる葵。

しかし、雪乃のお母さんを見るなり、そんな小さな疑問は吹っ飛んでしまった。

「恵子さん、葵くん、麻耶ちゃん・・・今日は来てくれて本当にあ

りがとう」

「おばさん・・・」

黒衣をまとったおばさんは、一昨日までの綺麗なおばさんとは別人のようだった。

目は真っ赤に充血し、その下には化粧の上からでもハッキリとわかる程のクマができている。

後頭部でまとめられた髪はほつれ、一睡もせずに泣きはらしたことが手に取るようにわかった。

思わず黙り込んでしまう葵と麻耶。

そんな二人に、恵子は慌てて声をかけた。

「2人とも、お母さん受付の手伝いがあるから、時間まで休憩室で待つてなさい」

それに小さく頷き、兄妹と雪乃はその場を後にする。

少し離れたところで葵が振り返ると、恵子はやつれたおばさんを抱きしめ、背中をさすっているのが見えた。

隣を見ると、雪乃はさすがに辛そうに目を伏せている。

何ともいたたまれない気持ちになる葵。

ふと、『非常口』と書かれたプレートと、その下の扉が視界に入っていた。

「麻耶」

「何よ」

「俺、ちよつとトイレ行ってくるから先行つてて」

「はいはい」

そのまま、麻耶はエレベーターへと乗り込んで行った。

どうやら、休憩室等は2階にあるようだ。

葵は知らなかったが、きつと麻耶は車内であらかじめ恵子に聞いていたのだろう。

非常口の扉を開けると、2階へと繋がる非常階段があったので、そこに腰掛ける。

幸いというかやっぱりというか、周りには誰もいない。

これで、何の気兼ねもなく雪乃と会話ができるだろう。

「雪乃・・・」

・・・お母さん、ひどかった

悲痛な面持ちで口を開く雪乃。葵は言葉を返すことができない。こんなとき、気の利いたことの言えない自分に腹が立つ。

あたしの、せい・・・かな

「・・・え？」

あたしがこんな事にならなかったら・・・お母さんもあんなボロボロにならなかったし・・・

あ、葵ちゃんだって

うつむきながら声を震わせて語る雪乃。

最後の方はか細くてよく聞こえなかったが、葵は何となく言わんとしていることがわかった。

「・・・雪乃」

正面に立つ雪乃の背をさすろうと手を伸ばす。

！

しかし、触れるか触れないか、というところでその手に気付いた雪

乃が、一瞬身を引いた。  
葵の指先が空をかする。

あ……

「……ごめん。でも雪乃、俺は……雪乃のこと迷惑だなんて思  
ってないから」

あ、葵ちゃん……

ふいに雪乃の頬を一筋の銀色のものが伝った。  
慌てて目をこする雪乃。

それが涙だと気付くのに、数秒かった。

……葵ちゃんにはあたしの考えてることなんてわかつちゃう  
だね

「長い付き合いだからな」

幼稚園の時、あたしが引越してきて以来……だよ

えへへ、と泣きながら笑う雪乃。少し元気になったようで、葵はほ  
つとする。

「だから……自分のせいだなんて言うなよ」

……うん、わかった

雪乃は少し目をこすって涙を拭くと、にっこりと幼馴染みに眩しい  
笑顔に向けた。

クラスで数多くの男子の心を射止めたその笑顔に、葵は思わずドキ  
リとする。

(か……かわいい)

自分でも顔が赤くなるのがわかって、思わず雪乃と反対の方向に視線を逸らす葵。

そんな彼に雪乃も気付き、彼女の頬もほんのりと赤く色づいた。お互いにこんなことで顔を赤くするなんて、これではまるで・・・

(・・・つ、付き合ってるみたいじゃないか)

いやいや雪乃はただの幼稚園からの幼馴染みで、ほんのちょっとだけ可愛かったからつい赤くなってしまっただけで、別に俺が雪乃のことを好きとかは・・・

(ダメだ。これじゃ逆効果だ)

自分を落ち着かせるための否定の言葉が頭の中でぐるぐると回るが、その考えにすらアツサリと敗北してしまう。

えっと、あの。それじゃ行こうか、葵ちゃん

「へ？あ、どこに？」

どこって・・・会場

「あ、そうか。・・・って雪乃、本当に平気なのか？」

・・・ん、大丈夫だとおもう

「別に無理しなくてもいいんだぞ」

「だーいじょうぶだって。危なかったら言っし

「・・・そっか、じゃあ無理だけはするなよ」

うん。じゃ、行こっか

葵が非常口のドアノブに手をかけたとき、後ろから呼び止められた。

・・・本当に、ありがとね

「ん、どういたしまして」

2人は、再び微笑みあうと建物の中に消えた。

だが後に、葵は自分自身の葬儀に雪乃を参加させたことを後悔する事になる。

## 第五話

公園にある砂場のような場所で、小さな子ども二人が何やら話しているのを、

葵は遠くからぼんやりと眺めていた。

その子ども達と葵の距離は決して近くはないが、一人の子どもの声だけがよく耳に届く。

その声からして、どうやら片方は女の子らしい。

なら、約束してくれる？

絶対？ホントに？

わかった、じゃあ・・・

・・・。。。

「！」

葵ちゃん、よく寝てたね

慌てて辺りを見渡すと、そこは荒井セレモニーの休憩室だった。

「夢か・・・」

壁掛け時計を見ると5時になっていた。まだ告別式の開始時間まで1時間くらいある。

二度寝するのも微妙な時間だし、かといって起きていても麻耶がいるため

雪乃とは会話できないし、反抗期中の妹とは話の内容が見つからないので、

葵は少し外に出ることにした。

それにしても・・・さっきの夢は一体なんだったんだろう。

なんかあの夢を見たのは初めてじゃない気がしたんだけど・・・。

「うわ、結構暗いな。それに肌寒い」

まだ4月の初めだからね

葵たちは、セレモニーの道路をはさんで向かいにある駐車場に向かった。

ここならあまり人気がないから、雪乃とも普通に会話できる。

「ん？ あれってうちの学校の生徒だよな」

あれ、ほんとだ

前の道路を通り、セレモニーの中に入っていく男女数人がふと目に留まった。

彼らは全員、葵たちの通う私立清泉高校の制服を着用している。

しかも、これまた全員通学力バンを所持しており、いかにも学校帰りといった感じである。

「そっぴや、3年生には連絡網でまわったらしいな」

あたしの事故のことが？

「ああ。それで来れる人は今日の葬儀に全員出席するように、ってコトらしい」



・・・そつか

先ほどの男女を筆頭にして、次々と生徒が2人の前を横切っては建物の中に消えていった。

あ・・・光と由美子、それに琴美だ

ふと、雪乃が小さな声で呟いた。

視線の先には、お互いにハンカチを握り締め、慰めあうように言葉を掛け合って歩いている3人の少女の姿があった。

「友達？」

うん。・・・あたしの為に泣いてくれてるって思うと、ちょっと嬉しい

「そりやそうだろ、友達だからな・・・あ  
誰かいた？」

「ん、今度は俺の友達」

葵の視線の先には、遠くからでも一目でわかるほど目立つ少年がいた。

明るい金髪に、だらしなく着くずした制服。

胸元からは大量の装飾品が覗き、革靴のかかとを踏んで歩く彼からは、

独特のオーラが漂っていた。

そんな少年を見てあからさまに訝しげな顔をする雪乃。

『なんで葵ちゃんがあんなの？』というのがモロに顔に出ている。

・・・誰、あの不良

「見た目だけな。ちよっと行っていい？」  
いいけど・・・

返事を聞く間もなく、葵は金髪少年の元に駆けて行った。

「和輝」

「葵！お前、大丈夫なのか？お前の彼女が亡くなったそうだけど」

「彼女じゃない、幼馴染みだよ。まあ俺は何とか平気だけど・・・」

慌てて否定する葵。

やっぱり、雪乃の姿が他の人に見えないってのは色々と不便だ。

「平気じゃねーだろ、お前の顔見りゃわかるよ」

「え？俺、そんなに変な顔してるか？」

「ああ、変なのは元からだけど顔色が悪いぞ」

「・・・相変わらずのナイスツツコミで。きつとあんまり寝てないからだと思うよ」

「ま、無理すんなよ。何かあったら俺に言え」

少し話をして、和輝は建物の中へと向かった。2人ももう一度駐車場へと戻る。

・・・人って見かけによらないんだね

「だろ？和輝は中学の頃からの親友なんだよ」

中学の時から？あたし、あの人見たことないよ

「見たことないっていうか、今と別人だったからきつとわからないと思う」

そうなんだ

そう、和輝

カタギリ

カズキ

片桐 和輝は、葵の言うとおり中学校1年生からの付き合いで、葵の皆無に等しい友人の中の1人である。

「昔は髪も黒かったし、あんなにピアスもネックレスもしてなかった」

何があつたの？彼に

「あいつのお父さんがアメリカに単身赴任する事になって、和輝も中3の夏休みの間だけついていったんだよ」

で、帰ってきたらあんなっていたと

「その頃はまだ茶髪だったな。金になったのは高校に入ってから」  
・・・アメリカで何があつたんだろ  
「今度聞いてみるかな」

葵が携帯で時間を確認すると、そろそろ式が始まる時間だった。

もどろつか、葵ちゃん

「ホント、無理するなよ」  
わかってるって

駐車場を離れ、道路を横切り建物に向かおうとしたその時。

「・・・あ」

「え？」  
何？

葵の後ろから声がしたので、思わず振り向く2人。

そこには、ぱかんとした表情を浮かべる清泉高校の制服を着た少女がいた。

一瞬、小学生と間違えるほど背が低く、赤いフチの眼鏡をかけている。

腰ぐらいまである、長く艶やかな黒髪が印象的だった。

「す、すみません」

女子の部類では低音に入るが、凜とした声で慌ててそれだけ言うと、黒髪の少女は建物の中に駆けて行った。

何だったのかな？

「さあ・・・？」

\*\*\*

午後6時、お坊さんの入場と共に雪乃の告別式が開始された。

正面には雪乃の遺影とお供え物があり、その周りを色とりどりの花が囲んでいる。

そしてその下には、雪乃の身体が納められている棺桶がある。

（・・・俺、棺の中の雪乃の顔、見れるかな）

雪乃の遺体を見たら、今まで我慢していたものがいとも簡単に崩壊してしまう気がする。

それに、雪乃だって自分自身の変わり果てた姿を見る事になってしまふ。

それはどんなに辛い事だろうか。

「葵」

「えっ」

唐突に、隣に座る恵子に声をかけられたので思わずビクついてしまふ葵。

「あんたもうすぐご焼香でしょ。あたしのをよく見ておきなさいよ」

「あ、ああ・・・」

考え事をしていて気付かなかったが、いつのまにかお坊さんによる読経が始まっており、

しかも数人が前にでてご焼香をしていた。

ご焼香とは、抹香という木屑のようなものをつまんで額の高さにまで持っていていき、

香炉に入れる、というアレである。

葵は最後にお葬式に出たのが小学校前だったので、葬儀の作法についてはあまり詳しくない。

(ん?)

ふと、隣の空いている椅子に座っている雪乃を見て、葵はぎょっとした。

具合が悪そうに背中を丸めている雪乃は、半透明でもハッキリとわかるほど、顔が青白い。

「お、おい。大丈夫か?」

周りに聞こえないように小声で囁く。

しかし雪乃は声を出すのも辛いのか、小さく頷くだけだ。

(どしよ・・・やっぱり出た方がいい、よな?)

そつと辺りを見回すが、皆沈んだ表情をしていたり、ハンカチで目を押さえていたりして

沈んだオーラが漂っている。

この場から抜け出すには、葵にとってかなりの勇気が必要だ。でも雪乃が体調悪いみたいだし・・・。

「葵！」

「わっ」

またもやいきなり声をかけられ、意味もなくビクビクしてしまう。

「キヨロキヨロしないでよ、みっともない。ホラ、ご焼香行くわよ」  
「え、ああ・・・」

いつの間にか葵たちの席にまで順番が回ってきていたらしい。

席を離れる恵子にならい、葵も数珠を持って立ち上がる。

雪乃が気になって振り返るも、彼女は動くことすら出来ないよう  
で下を向いたままだ。

後ろ髪ひかれるような思いで母親の後についていく。

椅子の列を抜けると、出入り口で待機している大量の学生が目に入  
った。

どうやら、彼らのご焼香の順番は一番最後らしいので、廊下でずつ  
と待たされていたらしい。

（順番的に俺が終わったらいづらご焼香するのか）

自分の番で間違えないように、母親がご焼香するのを、じっと見つ  
める葵。

その時だった。

いやああああっつー！！

雪乃の悲鳴にバツと振り向く葵。そこには、決して気のせいではな

いはつきりと向こう側が見えるくらいに身体の透き通り、  
床にしゃがみこんでいる雪乃がいた。

「雪乃!？」

読経が止まった。葵の台詞にざわつく会場内。みんなぼかんとした表情をしている。

しかし、そんなことにかまっている余裕はなかった。

しゃがみこむ雪乃の元まで大急ぎで駆けつけ、彼女の手首を掴んで急いで会場を出た。

廊下で待機していた学生達も、突然飛び出してきた葵にざわめくが、彼の必死の形相に圧倒されて、すぐにしんと静まり返る。

葵はそのまま階段を駆け上がり、休憩室に入った。

幸いにも、まだ誰も追いかけてくる様子もなければ係員もいない。

「おい雪乃、大丈夫か!？」

・・・葵ちゃん、ごめん。あたし

「喋らなくていいから・・・」

近くにあった座布団を寄せ集めてその上に雪乃を寝かせるが、正直なところ葵にはどうしていいのかわからなかった。

具合が悪いのは明らかだが、肉体的な不調ではないので休んで回復するとは思えない。

その上身体もほとんど消えかかっていて、座布団の刺繍が明瞭に見えるくらいになっている。

しかし、具体的な改善方法は分からない。

葵は、霊を見ることが出来る、というだけで霊をどうにかする力はないのだ。

「くそっ・・・何でさっき、連れ出してやる事ができなかったんだ！」

そつだ、恵子と一緒にご焼香をしに行く前、具合の悪そうな雪乃を見たじゃないか。

あの時に式場を出ていれば、雪乃はここまで悪化しなかったかもしれない。

「くそっ・・・」

後悔の念ばかりがぐるぐると頭をめぐる。

しかし葵には、消えかけの雪乃を目の前にして何もなす術がないのだ。

祈るような思いで雪乃の顔を覗き込むが、気のせいかさっきよりも透き通っている気がする。

このまま雪乃は消えてしまうのだろうか。

せっかく、死んでからも葵のもとに来てくれたというのに、その葵自身の不注意で。

そつだ。やはり雪乃が何と言おうと、ここに連れてくるべきではなかったのだ。

「ゴメン雪乃、俺のせいだ・・・！」

何も出来ない自分にどうしようもなく腹が立って、ぎゅっと学生服のすそを握り締める。

目頭が熱くなるのがわかった。

「その通りですよ」

室内に響く、低音で凜とした声。



はっとして顔をあげると、扉の前に息を切らした一人の少女が立っていた。

「き、君はさっきの・・・」

そう、そこにいたのはさっきすれ違った、赤い眼鏡の少女だった。

## 第五話（後書き）

これで主要登場人物が全員登場したことになります。

## 第六話

啞然としている葵を尻目に、眼鏡の少女は乱暴に革靴を脱ぎ休憩室に上がりこんだ。

「この方が成仏したら困るんでしょう？」

「え？じょう・・・ああ、うん」

いまいち事態が飲み込めない葵。

しかし少女はそんな葵を気にする事もなく、葵の隣に座ると、制服のポケットから長い数珠を取り出し、それを手にかける。そして目を瞑り、何やら唱え始めた。

（こ、これは・・・）

葵には何を唱えているのかは聞こえないが、少女がそれを始めた途端に部屋全体がぴんと張り詰めた雰囲気になったのが分かった。

やがて建物の外の雑踏が聞こえなくなり、部屋を静寂が支配する。葵は何か言おうとしたが、口が動かなかった。

いや、口だけではない。座った体勢のまま、指1本たりとも動かすことができない。

これは幼い頃によく体験した金縛りさなげだ。

しかし、少女が口の動きを止めると、葵は唐突に身体の内を取り戻した。

そして窓の外からは車が砂利を踏む音が、扉の外からは人々のざわめきが聞こえる。

『元に戻った』のだと、葵は感じた。

あおい、ちゃん・・・

はっとして雪乃の顔を覗き込む。

そこには、元の半透明に戻った雪乃がいた。もう顔色も悪くないし、消えかけてもいない。

元氣とまではいかないが、大丈夫そうだ。

「雪乃・・・良かった」

「全く、という理由かは知りませんが、葬儀場に霊を連れてくるなんて言語道断ですよ」

「ご、ごめん・・・なさい」

見ず知らずの少女に説教されて謝ってしまう。それが葵である。

「えっと・・・色々聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「・・・！ それは明日にしましょう」

何かに気付いた少女はさっと立ち上がり、急いで革靴を履くと扉に手をかけた。

「あ、ちよつと！」

「それではまた明日　水城　葵さん」

そのままノブをひねり、姿を消した。

次の瞬間、再び扉が開かれる。先ほどの少女が戻ってきたのかと思いきや、

そこに立っていたのは鬼神の形相をした母・恵子だった。

「・・・えーっと、その・・・急に眩暈がして」

必死に弁解をするも、麻耶とは違いそんな生半可な嘘が通用する相

手ではなかった。

恵子のこめかみに青筋が浮かぶ。

その後母親と、後からやってきた父親に雷を落とされたのは言うまでもない。

\*\*\*

「あー・・・疲れた」

家に着くやいなや、葵は自室のベッドに倒れこんだ。雪乃もその隣に腰掛ける。

あれから散々だった。父親からはゲンコツを食らうし、帰りの車の中でも延々とお説教。

ホールを飛び出す際に、雪乃の名を叫んだことも問い詰められたが、それに関して葵は本当の事を言わず、黙秘を続けた。

真実を言おうにも、家族は葵の霊感から否定しているのだし、言い訳をしようにも適当なのが思いつかなかったのだ。

・・・ごめんね葵ちゃん、あたしがついていったばかりに

「俺は大丈夫だけど、どうしてあんなに葬儀場についていくってうるさかったんだ？」

それは・・・

「それは？」

・・・約束が・・・

聞こえるか聞こえないのかすかな声だったが、葵は聞き逃さなかった。

「俺、何か雪乃としてた約束あるか？」

え、あ・・・ううん、なんでもない

急にしゅんとなる雪乃。

滅多にないが、そんな彼女を見ると何かとてつもない罪悪感を感じてしまう。

自分が悪いと悪くないとにかかわらず、だ。

「ご、ごめん雪乃。俺なんか悪いこと言ったかな」  
・・・ううん、大丈夫

そういつつもまだ雪乃の表情は曇っている。  
困った葵は無理やり話題を変えることにした。

「えっと・・・どうして突然具合悪くなったの？」

あれは、お経かな

「お経？」

葵だってお坊さんの唱えるお経を聞いていたが、なんともなかった。

あれが始まった途端に苦しくなって、身体がバラバラになりそうな気がしたの

「そっか・・・お経って、やっぱり霊を成仏させたりする効果があるのかな」

多分・・・。あの女の子がいなかったら、あたしきつと今頃ここにいなかったよ

「そうなんだよな・・・」

それにしても、思い返すと不思議な少女だった。

どうして休憩室にいるのがわかったか、とか雪乃に何をしたんだ、とか聞きたいことは色々あった。

しかしそれよりも、

「何で俺の名前を知ってたんだろ」

え・・・知り合いじゃないの？

改めて少女の姿を思い出してみるも、今までに喋ったこともなければ会った記憶もなかった。

今日、駐車場前の道路が初対面だったはずである。

だが、その時に向こうが名前を知る機会はなかったように思う。

でも、学校の制服着てたってことは同じ学校だよね？　なら捜せばすぐ見つかるんじゃない？

「それもそうだな・・・今日来てたのは3年生だけだし、明日から捜してみるか・・・」

思いつきり伸びをすると、大きなあくびが出た。

もう今日は疲れたし、夕飯も風呂もまだだがこのまま寝てしまおう。わざわざ1階に行って気まずい雰囲気になるのも、親にまた小言を言われるのもまっぴらだ。

雪乃が机の横に貼られた時間割を見ているうちにそそくさと寝巻きに着替える。

そして目覚ましをセットすると、ベッド脇の棚に置いた。

もう寝るの？まだ9時だよ

「ん、疲れたんだ」

お父さんにグーでぶたれちゃったしね

「頭だけどな」

苦笑いしながら扉の側にあるスイッチを押すと、部屋は一瞬で闇に変わった。

そのままベッドに入り、布団をかぶる。

どうやら雪乃は椅子に腰掛けたようで、机の前にぼんやりとした白い影が見えた。

おやすみ葵ちゃん

「・・・おやすみ」

言ってから、幽霊って寝るのかな？とか思ったが本人に聞くのめ気が引けるので黙っていた。

4月とはいえ、まだ夜は肌寒い。暖かい布団にくるまっていると、今日の疲れも加わって思ったより早く睡魔はやってきた。ふと、漠然とする意識の中にある疑問が浮かんた。

(・・・そういえば俺が休憩室で見た夢にも『約束』っていう単語が出てきたな。

ただの夢だと思うけど、雪乃が幽霊になってから俺のところに来た理由と何か関係があるのか？)

雪乃に詳しく聞いてみようかとも思ったが、眠気には抵抗できないし、する気もなかった。

明日でいいか、なんて軽い気持ちで葵は眠りについたのであった。

\*\*\*

翌朝、いつもより早い時間に目を覚ました葵は、さっとシャワーを浴びると、そのまま1階のリビングにまで降りて行った。

台所に立つ母に「おはよう」と挨拶をするが、母は背中を向けたまま無言だ。

おばさん、まだ怒ってるのかなあ



無言で頷く葵。

恵子は、怒るといつもこうやって相手と口を聞かなくなる。

それは相手にとって決して気分の良いものではないが、今回の場合は（葵と雪乃から見れば）少なくとも葵だけに非があるわけではないので、いつもに比べてかなりイライラする。

しかも靈感のことすら信じていないので、弁解も何もあつたもんじやない。

これ以上リビングに居たくなかったので、葵は一旦部屋に戻ってカバンを掴むと、早々に家を出た。

朝ごはん、食べなくて良かったの？

「コンビニで何か買うからいいよ、あの空間にいたくなかったし」

通勤時間より微妙に早い時間だったらしく、辺りには人がいないので雪乃の質問にも答えることができた。勿論小声で、だが。

葵ちゃんの家族の人は、靈感のこと知らないの？

「いや、何回も言ったけど信用されなかったよ」

そんな・・・

遠くを見つめる葵。すると思ひ出したくもない過去が脳裏によぎった。

幼い頃の自分。

靈感のことを言っても頭から否定する両親。

小学校の頃の、とても子どもとは思えない陰湿な行為。

それらの断片的な記憶がフラッシュバックし、葵はそれらを再び忘れ去ろうと頭を振った。

・・・葵ちゃん

「行こう、雪乃」

あ、ちょっと！

雪乃の呼びかけには答えず、葵は歩を速めた。  
まるで、自分の過去そのものを振り切るように。

\*\*\*

葵が学校に到着した時、まだ始業時間まで30分ほど時間があつた。  
普段の葵なら始業時間ギリギリに、それもチャイムが鳴っている最中に教室に滑り込むのが常であつたので、ゆつくりと階段を上るのは何だか変な感じだつた。

階段辛そうだね、あたしは楽だけど

「・・・俺ももう年かな」

浮遊して移動する雪乃は階段も楽々だが、葵はというと上に行くにつれて段々とペースが落ちていた。

こりゃこれから遅刻ギリギリには来れないな、と改めて実感した頃、  
ようやく教室がある4階にたどり着いた。

100m走をした後のように動悸が激しい。

春休み中に墮落した生活を送り続けた自分を呪いながら、突き当たりにある3年5組の教室に向かつた。

こんなに早く来てる奴いるのかな、とも思ったが、教室の中からは物音がした。

どうやらすでに誰かいるようだ。

教室に入ろうと引き戸に手をかけようとした瞬間、いきなり扉が開いた。

びつくりして思わずのけぞる葵。

しかし、教室の中から出てきた人物に、葵はさらに驚愕した。

その人物は葵に・・・いや、葵と雪乃に気付いたようだったが、特

に何のリアクションもしない。

「き、君は昨日の・・・!」

え? あーっ!

「・・・おはようございます」

思わず雪乃が指さした先には、腰までの黒髪を伸ばした、赤い眼鏡の少女が立っていた。

それは紛れもなく、昨日雪乃のことを助けた少女だった。

## 第六話（後書き）

前回と似たような終わり方ですが、キリのいいところで区切ってますんで気にしないで下さい。

## 第七話

「・・・」

・・・

第一声から言葉が続かない葵と雪乃。

少女があまりにもあっけなく見つかったことに驚きを隠せない様子だ。

2人が何も言わないでいると、眼鏡の少女が口を開いた。

「・・・そこ、どいていただけますか。これから花瓶の水換えをしなくてはならないので」

抑揚をつけずに告げる少女。よく見ると彼女の手には花が活けてある花瓶がある。

これは葵たちの担任のおばあちゃん教師、野川が始業式の日に持ってきたものだ。

何でも、『花による癒し効果で勉強がはかどるように』らしい。その効果のほどは定かではないが。

「じ、ごめん」

慌てて葵が扉の脇によけると、少女は軽く頭を下げその横を通り過ぎた。

しばらく呆然とその場に突っ立っていた葵だが、はっと我に帰ると少女の後を追いかけた。

「・・・なんですか？」

少女は、廊下に備え付けられた流しで花瓶を洗っていた。  
葵たちが来たのに気付いたようだったが、視線は手元の花瓶に向けられたままだ。

昨日とは雰囲気が変わった少女に、うつとたじろぐ葵。

この少女を見ていると、今朝のような怒っている時の母を思い出すのだ。

「えーっと、その・・・なんで花瓶洗ってるの？」

葵ちゃん何聞いてんの！？

聞きたいことが多すぎて何から聞いていいかわからなかった葵は、半ば混乱状態だった。

「日直ですから」

「あ・・・、そうなんだ」

沈黙。

「えっと・・・もしかして君、3年5組？」

「ええ」

沈黙。

（か、会話が続かない・・・）

葵ちゃん、ガンバレ！

にべもない少女にがつくりと脱力する葵。

すると、そんな葵を見た少女が始めて自分から口を開いた。

「それと」

「え？」

「私の名前は犬神・・・犬神　可奈子です」

可奈子は水道の蛇口を捻り水を止めると、花瓶に花を挿して立ち去ろうとしたので、葵も慌てて後に続いた。きつとこの光景を周りから見たら、この少女に目をつけたしつこい奴が必死に追いかけてると思うのだろう。

「犬神さん、えつとその・・・昨日はありがとう」

「いえ、それよりもそちらの方が無事で何よりです」

「やっぱり、あたしのこと見えるんだね」

「・・・ええ。昨日、道路で会った時は開いた口が塞がりませんでした。同級生をあんな形で見たのは初めてですよ」

そう言われて、葵と雪乃は苦笑いする。

自分達だってこんな事になるとは思ってもみなかったのだ。

「さて、日直の仕事も終わった事ですし・・・屋上にでも移動しましょうか」

「え？」

「私に聞きたい事があるからしつこく付いて来たんでしょう？」

「う・・・」

図星の葵に可奈子はフツと笑った。

可奈子の後を追うので夢中だったが、ふと辺りを見回せば既に沢山の生徒が廊下を行き来していた。

屋上は常に生徒が立ち入れるようになっていて、昼休みに昼食をとる生徒をちらほら見かけるだけで、普段はほとんど人気がない。

なので人に聞かれたくない話をする場所としてはうってつけだった。葵が屋上へ通じる鉄製の扉を引くと、途端にむわつとした熱気を感じ

じる。

所々ひび割れたコンクリートが太陽の熱を反射して、まるでサウナのように蒸し暑い。

それでも日陰に入ればいくらかマシだったので、3人は壁際の安っぽいプラスチックのベンチに腰掛けた。

昨日はホントにありがとね、可奈子ちゃん

「いえ、お礼を言われるような事はしてませんよ」

「やっぱりお経が原因なのか？雪乃は『身体がバラバラになりそうだった』って言うてたけど」

「そうですね。般若心経には霊を鎮め、供養し、その魂を成仏させる効果があります。恐らくこの世に留まりたいという意味を持った・  
・・えーと」

あ、あたしは松下 雪乃っていうの。雪乃でいいよ

「・・・雪乃さんが般若心経の効果に反し成仏を拒んだので、そのような事が起きたんでしょう」

紙に書いてある文章を読み上げるかのようにすらと答える可奈子に2人は感嘆するが、可奈子自信はさも当たり前事を言っているにすぎない、という表情をしていた。

「なら、どうして俺たちが休憩室に行くってわかったの？」

「わかったも何も、会場から飛び出したのを見てましたよ。それを追いかけただけです」

廊下でご焼香の順番を待っていた大勢の生徒達の中に、可奈子もいたんだろう。

この事についても新鮮な答えを期待していただけに、葵は拍子抜けした。



じゃあ、葵ちゃんの名前を知ってたのは？

「水城さんがよく浮遊霊たちを目で追ってるのを見て、私の他にも霊の見える人がいるのかと思っていたので印象に残ってたんですよ」

単純明快な回答をする可奈子に、葵は好感を持った。

何より、こんな身近に靈感を持った人がいるのが意外でもあり、嬉しかったのだ。

「・・・と、聞きたいことはこれぐらいですか？」

「そうだな。わざわざありがとう」

「いいえ。そろそろ戻りましょうか」

丁度いいタイミングで予鈴が聞こえてきたので、3人は屋上を後にした。

\*\*\*

「あ、来た来た。遅いぞあおいっ」

3年5組の教室に戻った葵の耳に、聞きなれた声が飛び込んできた。声のした方向を見ると、親友・片桐 和輝が葵の席に座って、ひらひらと手を振っていた。

「和輝、何でお前が俺のクラスにいるんだ？っていうかそこは俺の席なんだけど」

「やだなあ、堅いコト言うなって。俺5組よ？葵と一緒に」

「・・・だつてお前、始業式の日はいなかったじゃんか」

「葵ちゃん、俺がそんなダルイイベントに出ると思ってるわけじゃないでしょー？」

「・・・またお前はサボったのか」

悪びれた様子もなく、爽やかに親指を立てた和輝に対し、軽くため息をつく葵。

すっかり忘れていたが、和輝は先生たちの中でも有名な『サボリ魔』だった。

始業式を始め、文化祭や体育祭などのイベントは絶対に休むうえ、平日でも遅刻・早退・欠席が多い、皆勤賞などという言葉とは無縁の生徒なのだ。

「ま、元気そうで良かったよ。昨日は急に会場を飛び出して行ったから何があったのかと思ったけどな」

「あ、ああ。ちょっと体調悪くなっちゃってさ」  
ん？

葵は苦笑いしながら、両親についたのと同じ嘘を親友についた。わずかに、心にちくりとトゲの刺さったような痛みが走る。

「ま、あんま一人で抱え込むなよ」

担任の野川が入って来たので、和輝はそれだけ言い残して自分の席に戻ってしまった。

・・・ねえ、葵ちゃん

カバンの中の教科書やノートを机に移していると、雪乃が話しかけてきた。

しかしクラスメートがいるので、口頭で返事することは出来ない。どうにかして意思を伝える方法はないか、と辺りを見回すと、教科書やノートが目に入った。

葵はふと閃いて、英語と書かれたノートを広げ、そこに『どうした

？』と書いた。

これなら声に出さなくて雪乃と会話ができるし、携帯に打つとは違って授業中もカモフラージュになる。我ながらいい考えたと思った。

雪乃もノートを見て理解したらしく、そのまま話を続けた。

あのキンパツ君には、靈感のこと話してないの？

(うつ)

思いがけない質問に一瞬ひるんだものの、葵はシャーペンを握り直して返事を書いた。

『そうだよ』

なんで？

即座に帰ってきたストレートな質問の答えを、少しためらった後ノートに記した。

『・・・小学生の時みたいになんたたくないし』

葵が小学校5年の時、クラス替えがあつて新しい友達できた。

勿論靈感の事は秘密にしていたが、当時最も仲が良かった友達を信用し話した事があつた。

この友達なら、自分の事をわかってくれるかもしれない。

しかし、そんな葵の期待は儚い幻に終わった。

秘密だよ、と誓った話は翌日にはクラス全体に広まり、その日を境に葵には『嘘つき』、『気味が悪い』と言った目で見られ、根拠のない悪質な噂を流されたりもした。

当然、雪乃も同じ小学校であつたのでその事は知っている。それどころか、雪乃は葵の一番身近にいた人物でもあつた。

これで納得するかな、とも思ったが、返ってきた答えは葵の想像とは違うものだった。

うーん・・・、キンパツ君はそんなことしないと思うけどなあ

葵のシャーペンを持つ手がたと止まった。

正直な話、葵の靈感を知ったからといって、和輝がそれだけで葵を避けたりしないだろう、というのは何となくわかっていた。

5年に渡る付き合いで和輝の性格は大分把握していたし、信用もしていた。

(でも・・・)

やはり、怖かった。

もし、今までの関係が崩れてしまったら。

もし、小学校の時のように自分の居場所が失われたら。

何度か打ち明けようかとも思ったが、その度にそんな不安が脈絡なく頭の中に流れ込んでくるのだ。

何かキツカケがあればいいのにね

葵の気持ちを察したのか、雪乃がぽつりと呟く。

返事をノートに書くこともなく、葵も小さく頷いた。

\*\*\*

昼休みを告げるチャイムが教室に鳴り響くと、数学の教師は挨拶もせずにさっさと教室を出て行った。

それまではつまらなさそうに数式や計算をノートに書き写していた生徒達が急に活気付き、新しく出来た友達と一緒に弁当やらパンや

らを机に広げ始める。

学校に来る目的は、勉強ではなく友人と過ごす時間というのは一種の摂理になっているのかもしれない。

「葵、飯行こーぜー・・・って、大丈夫か？」

「・・・」

葵ちゃん、大丈夫？

一方、クラスメートの明るい雰囲気とは裏腹に、一人力なく机に突っ伏す生徒がいた。葵である。

（う、腕が動かない・・・）

1時間目からずっと雪乃との筆談をしながらノートをとっていた葵の腕には相当な負荷がかかり、4時間目が終わった今ではほとんど感覚を失い、動かなくなっていた。

別に何もそこまでして筆談しなくても、という話なのだが、お人好しの葵にはそれが出来ないのだった。

「・・・大丈夫、裏庭行こう」

痛む右手をかばいつつ、カバンからコンビニの袋を取り出すと、葵たちは『裏庭』に向かった。

この裏庭というのはその名の通り校舎裏にあるちょっとしたスペースのことで、葵と和輝はいつもここで昼食をとっている。

校舎の外に出ると4月とは思えないような暑さだったが、裏庭に入ると途端に涼しくなる。

ここは風通しも良く、木陰も多いので暑い日には最適なのだ。

木製のベンチに適当に腰かけ、昼食をとっていると、ふと和輝が思い出したように言った。

「そついやさー、最近ずつと寒気がするんだよな。風邪かなあ」  
「最近暑かったり寒かったりだからな」

言葉ではそういつつも、少し気になった葵は、目を凝らした。  
すると和輝の肩にぼんやりとしたものが浮かび上がる。

葵ちゃん、この人・・・！

無言で頷き、そのまま見据える。すると、そのぼんやりしたものが  
段々形を成していった。

（子ども、か）

和輝の肩にしがみつくようにして立っていたのは、5、6才くらいの  
幼い男の子だった。勿論、生きている子ではないが。  
男の子は怯えた様子で葵のことをじっと見ている。

葵ちゃん、このキンパツ君、とり憑かれてるみたいだけど大丈夫  
かな？

葵は和輝に聞こえないように、小声でぼそぼそと答えた。

「悪いものは感じないし、きつとよくいる浮幽霊だと思う。しばらく  
くすれば離れてくよ」

そっか、良かった

霊感体質の経験上、こういう事は大体霊を見ただけで判別がつくよ  
うになってしまった。

良いような悪いような、なんとも複雑な気分である。

雪乃は微笑んで、女の子に手を振った。するとその少年の表情も明るくなり、照れたように手を振り替えした。

（すげえ、幽霊同士のコミュニケーションなんて始めてみた）

「葵、目の焦点があってないぞ」

「あ」

和輝に指摘され、葵は我に帰ったかのように慌てて瞬きをした。

どうやら和輝にはぼんやりしているように見えたらしい。葵は誤魔化すかのように、慌てて食べかけのパンをかじった。

その瞬間、葵の背筋にぞくりと寒気が走った。何者かの、射るような鋭い視線を感じたのだ。

反射的に後ろを振り向くと、いた。

「・・・！」

数本先の木の陰から、紺色のセーラー服を身に着けた少女がじっとこちらを見ている。

後ろにある鉄製の柵が透けて見えることから、霊だっていうのがわかった。

人が沢山集まる場所に惹かれるのか、学校で霊を見るのはそれほど珍しくはなかったが、霊の方がこちらの存在に気付いている、というのは初めてだった。

今まで葵の見た霊は、どれも自分の世界に入りきっていたり、当ても無く彷徨っているような人だけだったからだ。

「んー？何か後ろにいるのか？」

振り向いた体勢のまま微動だにしない葵が気になったのか、和輝も後ろを向いた。その瞬間

（消えた！？）

まるで空気に溶け込んでしまったかのように、少女の身体は一瞬にして掻き消えてしまったのだ。

「何もいないじゃん、ホント大丈夫か？」

「え・・・あ、うん」

曖昧に頷きながらも、葵は少女のいた場所から目を離す事ができなかった。

風が吹き、ざわざわと木の葉が揺れる。

葵の心には、漠然とした不安だけが残っていたが、勿論今の段階ではその正体を知る由もなかった。



## 第八話

「これは・・・」

葵は、気がつくと一人白い霧の中に立っていた。とても濃く、周りがほとんど見えない。

何となくだが、これは夢なんだと理解する。

理由はわからないが、自分は夢を見ているのだ、とわかる夢を、以前に葵は何度か見たことがあった。今回も似たような感じなのだ。きよろきよろと辺りを見回していると、風が吹いたわけでもないのに急に霧が引き始めた。

「やつは夢って都合のいいようにできてんのかな」

濃霧の中から姿を現したのは、錆びたブランコや小型のジャングルジムなど、公園にある玩具だった。

それらを囲うようにポプラの木がずらりと植えてある。まるで柵のようだ。

それらを目にした時、葵は一度ここに來た事があるかのような錯覚に陥った。デジャ・ヴュというやつだろうか。

「・・・らね」

「人の声？」

はっとして辺りを見渡す。すると、砂場にしゃがみこむ2人の子どもの姿があった。

1人は男の子、もう1人は女の子であることは、横顔や髪型から何となくわかる。

「これって・・・」

その光景には見覚えがあった。

雪乃のお通夜に出席した日の、休憩室で見た夢と全く同じ光景だった。

ただ1つ違うのは、女の子が泣いているらしく、目をしきりにこすっており、男の子がそれをなだめている動作が加わったことだった。大して近くもないはずなのに、女の子の声が聞こえてくる。というより、それは直接頭に響く感じだった。

なら、約束してくれる？

絶対？ホントに？

わかった、じゃあ・・・

泣きじゃくりながら話す女の子のセリフは、休憩室の時と全く一緒だった。

一方、男の子の方と言えば口は動いているのだが、声は全く聞こえてこない。そこだけすっぽりと抜け落ちた感じがした。

ふとこの夢の続きが気になった。

前に見た時はここで目が覚めてしまったが、この夢に続きは存在するのであるのか？

自分が目覚めない事を祈りつつ、そのまま子ども達を見守る。

すると葵の思惑通り、少女が口を開いた。

からね

語尾はかるうじて聞き取れたものの、先ほどまでとは違いとても聞き取りにくい。

もつと近くによれば聞こえるかな、と近寄ろうとした瞬間、ぐらりと世界が揺れた。

「わわっ！」

驚く暇もなく、みるみるうちに男の子や女の子、そしてすべり台などの景色が遠ざかる。

やがては小さくなり、それも消えた。そして

「……ん」

葵は覚醒した。同時に、チャイムの鐘の音が聞こえてくる。

見渡すと、そこは葵の部屋ではなく3年5組の教室だった。みんな立ち歩いたり各々楽しそうに会話に花を咲かせている。

黒板の上にかけられた時計を見ると、10時半。2時間目が終わったところだ。

その下の黒板に目を向けると、見慣れない化学式でぎっしりと埋めつくされていた。

おはよう葵ちゃん。よく寝てたね

葵は、開きっぱなしで放置してあった真っ白なノートに『どれくらい寝てた?』と記した。

この筆談も、1週間たった今ではすっかり定着してしまっていた。

授業のノートを取りながらの会話というのも、慣れてしまえばそれほど苦痛でもなかった。

ただ、授業が終わっても内容が全く頭に入っていない、という最大

の欠点があつたが。

授業が始まって5分したら寝てたよ  
(つまり、ほとんど寝てたってことか)

葵は力なく笑った。

ここのところ、葵はずっと寝不足なのでつい授業中に居眠りしてしまふのだ。

何故寝不足なのかと言えば、その理由は至って簡単である。

葵と雪乃と可奈子、3人で会話する時間を作るために毎朝早起きをして、ホームルームの始まる20分前には学校に着くようにしているからだ。

葵としか会話できないのは雪乃が可哀想、という配慮もあったが、何よりも葵自身、今までは誰とも出来なかった霊についての会話が出来るのが楽しかったのだ。

あ・・・、葵ちゃん

雪乃が、ちょいちょいと葵の席の真後ろにある掃除用具入れを指差した。

窓と掃除用具入れの僅かな隙間から、セーラー服の少女がじっと一点を凝視している。

以前裏庭で目撃した少女の霊だ。

(またこの子か・・・)

最近、よく見るねえ

感心したように呟く雪乃。

彼女の言う通り、裏庭で最初に目撃したその日から、ちよくちよくこの少女を目にするようになった。

裏庭、教室、時には特別教室だったりと出没する場所は特定していないし、雪乃の呼びかけにも反応しない。

この前なんか、和輝と一緒に帰っている時に気配がしたので、振り向いたら葵たちの真後ろに立っていて危うく叫びそうになった。可奈子に聞いてみても分からない、といった回答だった。

その見た目からは、この学校の生徒でない事はわかる。清泉高校の女子の制服はブレザーだからだ。

しかし、学校には生徒以外の霊も沢山いるのであまり参考にはならない。

まさに放っておくしかない、お手上げ状態だ。

葵ちゃん、気に入られたんじゃないの？

そんな雪乃の冷やかに、葵は一言『勘弁してくれ』と呟いた。

\*\*\*

昼休み、葵と和輝はいつもの様に裏庭で昼食をとるために、昇降口で靴を履き替えた。

この学校には多少の用でも校舎の外に出る場合は靴を履き替えなければいけない、という面倒くさい校則がある。

裏庭のように居心地の良い場所は、普通昼休みは生徒でいっぱいになるものだが、そうならないのはこの校則に加え、H型の校舎をぐるりと旋回しないと裏庭に行けないという不便さにあるのだろう。わざわざそんな所まで行くんだったら、校内にいた方がマシというわけだ。

その分、人ごみが苦手な葵はいくらか楽だったが。

「うあー、いい天気。こんな日は外で昼寝するに限るよなあ」

「・・・5時間目、サボるなよ？」

葵の言葉に、「えー」と口を尖らせる和輝。冗談で言ったつもりなのに、どうやらその気だったらしい。

校舎を出ると、目の前のグラウンドは大地の黄土色ではなく、華やかなピンク色の染まっていた。まるでピンク色の絨毯のようだ。

グラウンドの左右にずらりと植えられた桜の木も、始業式の日は満開の桜の花を咲かせていたが、それも4月後半になるとほとんど散ってしまい、哀れな姿を晒している。

ある桜の木の陰からこちらを見つめている、学ランを着た男子学生の霊も哀れさに一層拍車をかけていた。

校舎の横を通って裏庭に向かっていると、そういえばさあ、と和輝が口を開いた。

「葵と犬神って付き合ってたんだろ？」

その唐突な質問に、葵は特に障害物があるわけでもないのに、思いつきりつんのめった。

葵ちゃん、大丈夫！？

「は？い、いや。それはないけど」

このキンパツ男は雪乃の前で何をぬかすんだ、と慌てて隣の雪乃の表情を伺うと、しらっとした目で葵の顔を見ている。

赤面して否定する葵だが、和輝はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべている。

「嘘つくなって、お前ら朝に屋上行ってるじゃねーか」

「いやっ、だから、それは・・・！」

まさか『死んだ雪乃と3人で他愛のない世間話をしてるんだ』とは

口が裂けても言えないので、とにかく否定するしかない。

「とにかく、犬神とは何でもないから！それに」

「それに？」

葵は、ちらりと右隣にいる幽霊を盗み見る。

『俺は、雪乃が好きなんだから』

とても口に出しては言えないようなセリフが脳裏をよぎり、葵は耳まで真っ赤になった。

どうやらそれを勘違いしたらしく、和輝はそのまま続ける。

「いや、いいと思うよ？俺は。犬神って小っちゃいし、眼鏡だし」

葵ちゃん、この人マニアだよ！

2人の声も最早葵の耳には届いていない。

「・・・ほんとに、違うから」

赤い顔を隠すようにうつむきながら、ぼそぼそと言えるのはそれだけだった。

からかいがいが無くなったのか、和輝もやれやれと言った様子で肩をすくめた。

「はいはい、わあ்த்தって。ま、本当にそうなら教えてくれよ」

「このオッサンが・・・」

ぼそぼそ小声でと悪態をつく葵。

ふと『和輝が俺の靈感の事をわかっていれば』と考えるが、次の瞬

間には心の中で否定した。

(・・・やっぱ、俺には出来ない)

例え靈感の事を告白したからと言って、もしそれで和輝が自分の事を避けたら・・・と思うと、やはりためらってしまう。

いじめを受けた影響で人嫌いになり、何もかもどうでもよかった中学校入学したての葵にずっと話しかけ、今ではここまで仲が良かったのだ。

きっと和輝がいなくなったら、また誰とも話さずに、静かに生活を送る日々が続くだろう。それだけはごめんだった。

「・・・こいつにも靈感があつたらなあ」

「葵、何か言ったか？」

「いや、何も」

自分の抱いた妄想に、葵は苦笑した。

もし和輝にも霊を見る力があつたなら、葵の事をよく理解してくれるだろう。

だが、残念な事に和輝から霊に関する話は今までに一度も聞いた事がなかった。

やっぱり、世の中って上手くいかないもんだな。

葵は心の中で呟くが、彼はこの時はまだ知る由もなかった。

自分の抱いた小さな妄想が、後に現実化する事に。



## 第八話（後書き）

和輝はロリコンではありません、念のため。  
ただ背の低い子が好みというだけです、たぶん。

## 第九話

「水城さん、ちょっといいですか」

昼食を取り終え教室に戻った葵の元に、いつになく緊迫した面持ちの可奈子がやって来た。

可奈子とは屋上では話すが、教室では1回も会話した事はなかった。なのにいきなり葵の席まで来るなんて、よほど切羽詰ってるのだろう、と葵は推察した。

時計を見ると、1時25分。5時間目まであと5分しかない。

「いいけど、もうすぐ授業だよ?」

「とりあえず、廊下に出ましょう」

あたしも行つていい?

「どうぞ。というより、話を聞いて貰わないといけなかもかもしれません」

・・・?

葵たちはざわめく教室を後にし、廊下へと出た。そのまま窓際へと移動する。

廊下の窓からは、グラウンドが一望できる。少し覗き込めば、花びらをほとんど失った桜の木もしっかりと見ることができた。

「・・・あれ?」

先ほど裏庭に向かう時に見た風景と、何ら変わりのないはずなのに、葵は違和感を感じた。

何かが足りないような気がするのである。

「それで、急に呼び出した理由ですが」

背後から可奈子の咳払いが聞こえ、慌てて振り返る葵。

「セーラー服の少女の霊について、色々考えたんですが・・・」

お、何かわかったの？

「大丈夫だとは思いますが・・・片桐さんに注意して下さい」

「えっ、和輝に？俺じゃなくて？」

思いがけぬところで親友の名が出てきたことに戸惑う葵。

セーラー服の少女につきまとわれているのは自分だと思っていたので、かなり意外だった。

「今は時間がないので詳しい説明は後でしますが、結論から言うとセーラー服の少女が和輝さんに憑依するという可能性があります」

「憑依・・・？」

それって、霊が身体の中に入ること？

可奈子は頷き、続けた。

「霊が憑依すると、見た目はその人でも人格は霊のものになってしまっんです」

「じゃあ、あのセーラー服の霊は和輝の身体を乗っ取るつもりとしてるってのか・・・？」

「・・・それはまだわかりません。でもそういう可能性もあるので、水城さんには片桐さんから目を離さずにいてもらいたいです」

いつも仲が良さそうなのでお願いしたんですが、とすまなさそうに告げる可奈子だったが、葵は力強く頷いた。

親友が霊に狙われているというのに、何もしないわけにはいかなかった。

でも・・・もし、憑依されちゃったらどうするの？

葵の顔色を伺いながら、恐る恐る雪乃は尋ねた。

すると可奈子は、これを、とブレザーのポケットからメモ用紙を取り出し、葵に差し出した。

それを受け取り広げてみる。そこには電話番号とメールアドレスが細かな字で記されていた。

「これは？」

「そこに、私の携帯の番号が書いてあります。ついでにアドレスも書いておきましたので・・・何かあったら連絡を下さい」

「あ、ありがと。後で俺のも送っとくよ」

『葵と犬神って付き合ってたんだろ？』という和輝のセリフが甦り、顔が赤くなる葵。

雪乃以外の女子にアドレスを教えてもらったのなんて初めてなので、尚更だ。

赤面している葵に、雪乃はまたもしらつとした眼差しを向ける。

それから逃げるように、葵は慌てて話を逸らした。

「と、ところでさ。どうしてセーラー服の女の子は、俺じゃなくて和輝を狙ってるんだ？」

「・・・それは恐らく」

「君たち、もうチャイムは鳴つとるよ。教室に戻りなさい」

可奈子のセリフを遮ったのは、教師の滝澤だった。

定年を前に国語を教えるおじいちゃん先生で、葵たちのクラスの次

の授業の担当である。

どうやら話に熱中しすぎてチャイムに気付かなかったらしい。ほら、と教室に入るように促される。

「・・・放課後や昼休みは美術室にいますんで、何かあったら」  
「わかった」

可奈子も、それだけ言うのがやっとだったらしい。

そのまま滝澤に肩を押されるようにして、葵たちは教室に入った。

葵は窓際一番後ろにある自分の席に座り、国語の教科書とノートを2冊机の上に並べた。

1冊は国語のノートで、もう1冊は雪乃との筆談用に、新しく調達したノートだ。

筆談用ノートは1週間前くらいに買ったものだが、既にノートの半分くらいは埋まっていた。

あのセーラー服の女の子は、どうしてキンパツ君に憑依したがつてるのかな

『そりゃあ、やっぱり生身の身体が欲しいんじゃない?』

そっかあ・・・

窓の外の景色を眺めているようで、どこか遠くを見つめている雪乃は寂しそうに呟いた。

悪いこと言っちゃったかな、と思いつつも、黒板に続々と書かれてゆく文章を写すのに精一杯で返事をする暇がない。

滝澤の国語の授業は、先生が淡々と喋りながらも次々に黒板に説明を書いてゆくので、生徒達には不評だった。

抑揚をつけずに延々と喋り続ける姿は、まるでお経を唱えているようなので、一部では『坊主』というあだ名までつけられている。

（やべ、眠くなってきた・・・）

そんな『坊主』の授業はとにかく退屈で仕方が無い。

クラスを見渡すと、まだ授業が始まって15分足らずだと言つのに、舟を漕いでいる生徒が何人もいた。

中にはすでに脱落し、安らかな眠りにについている者もいる。そんな時だった。

「センサー」

永遠に続くかと思われた授業を遮って挙手してるのは、和輝である。滝澤は名簿を広げて和輝の名前を確認した。

「どうしたね、片桐くん」

「頭痛いんで、保健室行きたいんですけど」

まさか、と思い辺りを見るが、セーラー服姿の少女はいなかった。

一瞬サボりかと思ったが、確かに顔色が悪い。

滝澤も同じ事を考えたらしく、ふーむと呟きながら教室内を見回した。

「では、誰か保健室までの付き添いを・・・」

「あ・・・俺、行きます」

葵は反射的に手を挙げていた。脳裏に『和輝から目を離さずにいてもらいたい』という可奈子の言葉がよぎったのだ。

挙手してからあの少女もいないし、そこまでしなくても良かったんじゃないかとも思ったが、立候補してしまったんだから仕方が無い。それに、眠気を覚ますのには丁度良かった。

「あー・・・じゃあ、水城くんお願いします」

またも名簿を開き、今度は葵の名を確認すると、そう告げた。葵はのろのろと席を立ち、額を押さえる和輝を連れて教室を出た。

「和輝、相当具合悪そうだけど平気か？」

「大丈夫じゃないー。付き添いが可愛い女の子なら俺の頭痛も一瞬で治るってのになぁ」

「・・・もう1回教室戻ろうかな」

「ああつ、ごめんなさいー」

青い顔をしてはいるものの、冗談が言えるくらいの元気はあるようだ。

少し安心して階段を下りる。保健室は1階にあるので、何回も階段を下りなければならない。

ちょうど2階の踊り場に差し掛かった時、階段を上ってくる人物と出会った。

「あ、こんにちは」

「こんにちはー」

「はい、こんにちは」

にこにこいつも笑みを絶やさない、美術の担当をしている大友先生である。

真っ白の髪を頭の上で留めているおばあちゃん先生で、滝澤先生と同じように彼女も定年を控えているが、優しいし授業は楽しい、と生徒には評判の先生だった。

葵は担当の先生が違ったので1回も授業を受けた事がないが、見た目に今はもういない、優しかったおばあちゃんを思い出すのだった。

「・・・あら？」

すれ違う寸前で、大友はふと足を止めた。そして葵たちをじーっと見つめる。

「な、何ですか？」

不思議に思っただけだったが、大友はくすつと笑うと、

「あなた達、ずいぶん仲がいいのねえ」

とにこやかに告げた。

葵と和輝は互いに顔を見合わせた。別に、普通に並んで歩いているだけである。

特別仲がいいと思われる事は何もしていない。

「どういふことですか？」

葵の質問には答えずに、うふふ、と笑うと、大友はそのまま階段を上っていった。

その姿が見えなくなったところで、ぽつりと和輝が呟いた。

「あのおばあちゃん、とうとうボケちゃったんじゃないの？」

\*\*\*

「失礼します」

ロックをして保健室に入ると、柏木という若い保健の先生が1人パ



ソコンに向かっていた。

机の上は様々な書類やプリントで山ができていて、少しでも触ると雪崩が起きそうだ。

和輝が熱を測っている間、葵は何気なく部屋を眺めていた。

小さなテーブルが部屋の中央に置いてあり、その周りには丸イスが数個並べられている。

壁際には棚と一緒に身体測定で使う体重計などがごちゃごちゃと置いてある。

それらと並んで何故か人体模型が置いてあるのには驚いたが、聞いてみたら柏木の趣味、ということだった。少し変わった先生のだ。

それからベッドが3つ。今は休んでいる人がいないので、カーテンも開いていた。

そして、一番窓際のベッドの枕元には男性の霊がたたずんでいた。

よく見ると、清泉高校の制服を着ている。どうやらこの学校の生徒だったようだ。

（あれ、この人どこかで・・・）

ふとその学生を見たことがあるような気がして記憶を辿ってみると、昼休みに桜の木の陰からこちらを見ていた霊だという事に気付いた。さつき廊下の窓から見た時に感じた違和感は、この霊がいなかったせいらしい。

その時、室内に体温計のアラーム音が響いた。

「終わったよセンサー」

「あら、37.8度・・・風邪みたいね。しばらく休んでいきなさい」

「うつつす」

柏木に促され、和輝は立ち上がるとベッドのある方向に向かった。そのまま一番窓際のベッドに寝ようとするのを見て、思わず葵は声をかけた。

「あ、そこは・・・」

「ん？」

まさか『枕元に男の霊が立っているからベッドを替えたら？』とは言えるはずもない。

「・・・いや、何でもない。じゃあな」

きょとんとしている和輝を置いて、葵はそそくさと保健室を後にした。

\*\*\*

6時間目に授業には和輝は現れず、帰りのホームルームになった。何かあったのかな、と不安になったりもするが、その反面眠り続けているだけという可能性も考えられる。

担任の野川が何か話しているが、和輝のことが気になってロクに頭に入っていない。

やがてそれも終わり、全体で挨拶を済ませたので葵は教室を出た。結局ホームルームにも帰ってこなかった和輝を向かえに、保健室まで行こうと思ったのだ。

他のクラスもホームルームが終わったらしく、廊下は人でごった返している。

葵は人ごみをすり抜け、階段を下りて廊下を通り、保健室に入った。柏木はおらず、テーブルの上に『すぐ戻ってきます 柏木』と書かれたメモが置いてあった。

「和輝？」

ベッドを見ると、窓際の一画だけカーテンが引いてあった。  
結局、和輝は男子学生の霊が枕元に立つベッドで寝たらしい。

「和輝」

呼びかけてみるも、返事はない。

まだ寝てるのかな、と思いつつ、葵は歩み寄ってカーテンを開く。  
和輝は、背中を向けてベッドに腰掛けていた。

「なんだ、起きてるんなら返事くらい」

「なあ」

葵のセリフを遮り、和輝は口を開いた。

そして次に聞いた言葉は、およそ葵が想定してたものとは違うものだった。

「お前、殺してもいいか？」

どくん、と心臓が跳ね上がるのがわかった。

まさか、和輝は。いやしかし、保健室にはあの少女はいなかったはずだ。

葵が絶句していると、ゆらりと和輝は立ち上がり、振り向いた。

「かず・・・」

和輝の目は、赤かった。

白目が充血しているのではない、黒目の部分がまるでカラーコンタクトをしたかのように綺麗に赤くなっているのだ。

葵ちゃん、まさか・・・

「・・・みたいだな」

和輝は、薄ら笑いを浮かべて立っている。

窓から夕日が射し込み、それが逆光になって和輝の表情はよくわからなかったが、目だけが赤く爛々と光っている。

葵をじっと見つめるその姿は、獲物を狙う肉食獣そのものだった。

じりじりと葵は後ずさる。しかし距離を一定に保つかのように、1歩下がるごとに和輝は1歩前進する。

目を逸らしたら、やられる。

それは葵が本能で感じ取ったことだった。

「・・・雪乃、犬神さん呼んで来て」

わかった。でもどこに・・・

「美術室、急いで！」

つい雪乃の方に顔を向けた、その時。

葵ちゃん！

雪乃の悲鳴と葵の身体に衝撃が走るのは、同時だった。

背中と後頭部に強い痛みが走り、目から火花が散る。

飛び掛ってきた和輝に押し倒され、テーブルにその身を委ねているのだと気付くには多少時間がかかった。

「ぐっ・・・！」

先ほどまでは1mくらいの距離があつた和輝の赤い目が、今は目の前にある。近くで見るほど不気味な目だ。

葵ちゃん・・・大丈夫！？葵ちゃん！

雪乃が必死に和輝を引き剥がそうとするが、霊である雪乃はすり抜けてしまう。

葵も必死に抵抗するが、全く意味がない。これが本当に高校生の力か、と思うほどの怪力だ。

次第に、和輝の指が葵の首にかかった。ぐっ、と力を入れられ、息が出来なくなる。

「・・・いから、早く犬神さんを！」

葵はそれだけを必死に伝えようと、和輝の指を外そうとする。雪乃は少しためらった後、急いで保健室を飛び出した。

## 第九話（後書き）

もし誤字・脱字等あつたら教えてもらえると助かります。

## 第十話

雪乃は、ほとんど人気の無くなった廊下を息を切らせて走っていた。いや、雪乃の身体は宙に浮いているので、正確には『滑るように移動している』のだが、本人にとっては生前に走っているのと同じ感覚だった。

早くしないと葵ちゃんが・・・！

あのままだと葵が死んでしまう。

葵は昔から喧嘩はからつきしダメだったという事は、雪乃もよく知っていた。

事務室や下駄箱の前を抜け、雪乃は息も絶え絶えに美術室の前にたどり着いた。

電気も点いているし、中からは人の話し声もする。

可奈子がいる事を願いながら、扉についたすりガラスに頭を突っ込む。

生きている時なら間違いなく頭を強打してタンコブでも出来ていただろうが、今はするりと通り抜け美術室の中を覗く事ができた。

可奈子ちゃん！

美術室には何人かの生徒がいて、可奈子もその中に交じってキャンパスに向かっていたが、雪乃の声を聞いてハッと顔を上げた。

切迫した雪乃の表情を見て察したのか、教員用の机にいる大友先生に一礼をすると美術室を出た。

大変なの、キンパツ君なんだけど女の子で保健室に葵ちゃんが！

パニックで何を言っているかほとんどわからなかったが、それでも可奈子は理解したらしい。  
行きましよう、と短く告げると、夕日の差し込む廊下を雪乃と共に走り出した。

\*\*\*

「ぐっ・・・かず、き」

一方、葵の方も相当切羽詰っていた。

雪乃が可奈子を呼びに行ってから数十秒しか立っていないが、すでに何時間もたった気がする。

両手で思いつきり首を締め付けられているので息が出来ない上に、無理な体勢でテーブルに押し付けられてるので背骨が悲鳴をあげていた。

何とか動かせる足で蹴りを入れたり、首にかけられている指を剥がそうをするのだが、全く効いていない。

脳に酸素が供給されず、段々と意識がぼんやりしてくる。

『お前、殺してもいいか？』

そう言ったのは確か和輝だったが、絶対に和輝ではない。

（これが、憑依って事なのか・・・）

次第に目の前が暗くなってきたが、これで和輝の赤い目を見ないと思うと少し安心した。

あの憎悪に燃えるような真っ赤な目を見ていると、もう自分の知っている和輝は戻ってこない気がして怖かったのだ。

じわじわと侵食されていた視界も、完全に闇に染まる。



思考も、まるで宇宙を漂うかのようにまとまらなくなった。

（俺・・・和輝に殺されるのか・・・）

ただ感じるのは、そろそろ自分に訪れようとしている死の予感だけだ。

ぎゅっと目を閉じ、その時を待つ。

・・・しかし、葵の想像通りにはならなかった。

急に和輝の手が葵の首から離れたのだ。

予想外の動作に一瞬驚いたものの、急に酸素を吸い込んだ為激しくむせ込んでしまい、それどころではなかった。

ずるずると床に滑り落ち、テーブルもつられて派手な音を立てて倒れる。

吐きそうになりながらも和輝に目を向けると、そこには頭を抱えずくまった和輝がいた。

「やめろ、邪魔をするな・・・ダメ、この人の身体は・・・うるさい、俺は・・・」

「かずき・・・？」

ぶつぶつと訳の分からない独り言を呟く和輝の姿に異様なものを感じ、葵は金縛りにかけられたかのようにそのまま動けなくなる。

（まるで会話してるみたいな・・・）

その時だった。

葵ちゃん！

「水城さん！」

聞きなれた声がしたと同時に、雪乃と可奈子が保健室に飛び込んできた。

2人は即座に葵の元に駆け寄り、可奈子が葵を助け起こした。

葵ちゃん、大丈夫！？

「俺は平気だけど、和輝が」

3人は改めて和輝に目をやるが、やはり頭を抱え独り言を唱えているだけで、もう襲い掛かってくる気配はなかった。

「・・・除霊を始めます、下がっててください」

可奈子は、険しい目つきで和輝を見据えたまま、ポケットから長い数珠を取り出した。

それを和輝の肩にかけると小声で何やら唱え始める。

すると、独り言を唱えていただけだった和輝の様子に変化が現れた。ぴくりと眉が動き、そのうちそれは苦悶の表情に変化したのだ。

そしてこれ以上お経を聞きたくないというかのように両手で耳を塞ぐ。

「う・・・ぐっ、やめ・・・」

しかし可奈子は容赦せずに経文を唱え続ける。

和輝は必死に耳を押さえるが、さほど効果はないようだ。

何度か立ち上がりともしているようだ、体中に重りをつけられているみたいに動作がぎこちなく、腰を浮かしたところでストップした。

これ以上は身体があがらないみたいだ。

そしてそんな状態がいくらか続いた、その時だった。

「うわっ！」  
きゃあっ！

壁にヒビでも入るんじゃないかという程の衝撃が保健室に走り、和輝がどさりとその場に倒れた。

「かず・・・」

親友の元へ駆け寄ろうとした葵を、可奈子が手で制する。  
その視線の先に目を向けると、そこには既に見慣れた少女の霊が浮いていた。

・・・！

「やっぱりあのセーラー服の・・・」

間近で見たのは初めてだったが、その少女は意外と幼い顔立ちをしていた。

童顔、というのではなく、本当に小学生か中学生くらいに感じられる。

栗色の髪をツインテールにしているのも、その印象を強くさせた。

「・・・あなたは何故こんな事を？」

ああ、ダメだよ、このままじゃ

「自分のいるべき場所に還りなさい」

ダメ、早くしなきゃ！お願い、早く！

少女は可奈子の言葉を無視し、ダメだ、早くとわめいている。  
まるで先ほど葵を絞殺しようとした霊とは別人のようだった。

さっきとは全然違うね

「そうだな・・・」

「騙されないで下さい」

のん気な2人を、可奈子は一喝する。

「こつやつて隙あらば逃げ出そうとする霊は沢山いるんです。そこ  
のあなた」

何？早くしないと！

「この少年から離れる気がないのなら、無理にでも消えていただき  
ますが」

え・・・

可奈子は和輝の首から数珠を外し、それを握った。本気という事の  
アピールだろう。

自分のおかれた状況に気付いた少女は泣きそうな顔で和輝と可奈子  
の間に視線を往復させた。

しかし口をつぐんでしまい、何も言わない。

そんな状態が続き、とうとう可奈子は痺れを切らしたらしい。

「水城さん、すいませんが片桐さんをベッドに」

あ、ああ

葵はぐつたりと横たわる和輝を引きずっていくと、ベッドに寝かせ  
た。

顔は真っ青で、意識を失ってはいるが規則正しく呼吸をしてるのを  
確認する。

どうやら無事らしいと分かり、葵は安堵した

「それから雪乃さん、離れていて下さい。あなたも成仏してしま  
います」

あ・・・はい

雪乃は言われるがまま保健室の壁ギリギリまで下がった。  
それを気配で確認した可奈子は数珠を持ち、お経を唱え始める。  
するとぼんやりとだが数珠が青白く光り始めた。

「これは・・・」

お経が進むにつれ、数珠の光も強くなる。

少女は自分の手に目をやってびくりと身体を震わせた。

ゆっくりと、しかし確実に少女の身体は透明度が増していつている。

葵ちゃん、これって

「ああ・・・雪乃の時と同じだ」

少女は段々と自分の存在が消えてゆくを感じ、おろおろしている  
が何も出来ないらしい。

やだっ、あたしまだ消えたくない！

目にいっぱい涙を溜めて訴えるが、可奈子は聞く耳を持たずにお経  
を唱え続ける。

葵は、殺されかけたにも関わらずこの少女が可哀想になってきた。

（でも俺じゃあどうしようも・・・）

もうほとんど少女の姿が見えなくなり、もつうつすらとしか確認で  
きなくなった、その時だった。

「お待ちなさい」

保健室の扉が開け放たれ、ある人物が現れた。

突然の訪問者に驚き、可奈子が読経を止めたので少女はすんでのと  
ころで消えずに済んだ。

「あれ？」

「先生！」

あ、さっきの！

あまりにも予想外な人物の登場に、3人の口からは驚きのセリフが  
飛び出した。

「・・・その少女を除霊するのは、ちょっと早いんじゃないかしら」

そこには、美術教諭である大友がいつもと変わらぬ微笑を浮かべて  
立っていたのだった。

## 第十話（後書き）

元々この回に入れる予定だった話が長すぎたので、2分しました。

## 第十一話

「お、大友先生！」

何で先生がここに・・・

「うふふ、こんにちは」

大友は、まるで廊下で挨拶を交わすような口ぶりだったが、先ほどのセリフからはこの状況が完全に飲み込んでいるように思える。

・・・ということは、大友にも靈感があるのだろうか。

唐突すぎるシチュエーションに、葵はかなり狼狽した。

「えーと、あの」

「今はこの子をどうにかしないとね」

霊が見えるんですか、と続けようとしたが、その手前であっさりと遮られた。

大友は、今はベッドで眠る和輝と消えかけのセーラー服少女を交互に見やる。

「片桐さんはこの少女に憑依されたのでは？」

落ち着きを取り戻したらしい可奈子は、冷静な声で問う。

やはり大友には靈感があり、しかも可奈子の知り合いらしい。

葵は、和輝と保健室に向かう途中、大友に『仲がいいのね』と声をかけられた時の事を思い出した。

あれは和輝との事を言ったんじゃない、その隣にいた雪乃との事を言っていたのだ。

まさか大友に靈感があるとは思ってもいなかったもので、その時は何のことかさっぱりわからなかったが。



「まあ、見てなさいな」

そう言うと、大友は指を組み小声で二言三言唱えた。

すると、消えかかっていたセーラー服の少女の身体がみるみるうちに元の状態に戻った。

まるで可奈子が雪乃の身体を元通りにした呪文の強力版、といった感じだ。

その鮮やかな手順に、少女は礼を言うのも忘れぼかんと見惚れていた。

「さて、これで半分」

「半分？」

「そう、あとの半分は・・・」

大友は葵たちに背を向け、ゆっくりとした足取りで和輝のいる方向かった。

和輝は先ほどと同じように眠っているが、大友は無言でその前に立った。

「下手な芝居はもうおやめなさいな、早くその子から出ていらつしやい」

眠っている和輝に向かって穏やかな声で語りかけるが、本人は夢の中なので当然というかやはりというか、反応はない。

「出てこないっていうのなら、実力行使でいこうかしらね」

そう言って、1歩和輝に近寄った時だった。

・・・やれやれ、バレちゃったか  
「なっ!？」

和輝のよりもっと低い、聞き覚えのない声がどこから聞こえた。そして和輝の身体から煙の塊のようなものが発生し、それは宙に留まるとゆっくりと形を成した。

「こいつは・・・？」

まったく、そのガキさえ邪魔しなけりゃこいつの身体は俺のモンだったってのによ

セーラー服の少女を顎でしゃくるその霊に、葵は見覚えがあった。昼休みに桜の木の陰で、そしてさっき和輝を保健室に連れてきた時にはベッドの側にいた、男子生徒の霊である。

気のせいか、彼の周りにはどろどろとした黒いオーラがまとっているように見える。

「ど・・・どういう事ですか？」

セーラー服少女が和輝の身体に憑依したものだとはっきり思っていた可奈子は、困惑を隠すように大友に尋ねた。

「見ての通りね・・・まあ、詳細はその女の子に聞きなさい。それで、あなた」

ああ？

「念のため聞くけど、自分から成仏したい、という気はある？」  
ひやはっ、バカがあんだ。そんなヤツが人に入ったりすると思うのかってーの

へらへらと馬鹿にしたように笑う男子に、葵は眉をひそめた。

隣を見ると、雪乃も自分と同じような顔をしている。

可奈子とは言えば何か考え込むような表情をしていたが、唐突に男子生徒に問いを投げかけた。

「・・・もしかして、あなたは2年前にバイク事故で亡くなった生徒では？」

それに男子はぴくりと反応する。

・・・よく知ってるじゃねーか

「最近うちの学校で人が亡くなったのなんて、その事故くらいですから」

その事故の件は葵もよく覚えていた。

まだ1年生だった頃、当時の3年生の男子生徒が無免許でオートバイを乗り回して、カーブを曲がり切れずに崖から転落、即死したという話だ。

「何故水城さんの身体に憑依を？」

はん、そんなの決まってるじゃねーか。もつと遊びてーからだよ・・・じゃあ、葵ちゃんを殺そうとしたのは？

いやさ、俺1回人を殺つてみたくてよ

ぬけぬけと言つてのける男子学生に、思わず絶句する葵たち。

こんな輩に下手したら絞殺されていたかもしれないと思うと、恐ろしいを通り越して情けなくなった。

「さてと、そろそろいいかしら」

会話がひと段落したのを見て、大友が間に入って来た。

「部活の子たちに何も言ってこなかったから、早く戻らなきゃいけないのよ」

「ああ？何言って・・・」

「最後にもう1度だけ聞くけど、成仏する気はある？」

「何度も言わせるなよ、そんな気はさらさら」

「そう」

大友はため息をつく、男子生徒に向かってずっと手を伸ばした。その時、ブラウスの袖が引っ張られてちらりと見えた手首に、数珠のようなブレスレットが光っているのを葵は発見した。そして伸ばされた手が男子生徒に触れた瞬間。

な　　！？

次の瞬間には、もう全ては終わっていた。

あの男子生徒の霊が、跡形も無く消えていたのだ。

「これで除霊も終わった事だし、私は部活に戻りましょうかね  
犬神さん」

「あ、はい！」

「もつと修行が必要ね」

「う・・・」

意味ありげな言葉を可奈子に残すと、大友は何事もなかったかのよう  
に保健室を出て行った。

後には開いた口が塞がらない葵と雪乃、同じくぽかんとしているセーラー服の少女、何か言いたげだった可奈子、眠る和輝、そして倒れた机やイス、散乱したペンや体温計などが残された。

えっと・・・ねえ、お名前は？

雪乃は、隅でじっとしていたセーラー服の少女を覗き込んだ。  
すると少女は人懐っこそうな笑みを浮かべ、答えた。

サトミ。西野 サトミっていうの

\*\*\*

そつかあ、大変だったねサトミちゃん

ひと通り保健室の片付けを終えた葵たちは、サトミから事情を説明して貰っていた。

それによると、こういう事らしい。

病気により13才という若さで亡くなったサトミは、大学生の兄を探して彷徨っていたのだという。

そんなある日、たまたま和輝を発見するのだが、探している兄に酷似していたので、ついつい懐かしくなっ取り憑いてしまった。

そして今日、和輝が人格ごと男子学生の霊に奪われかけているのを、身体の中で必死に阻止していた。

「ごめんなさい、私が未熟なばかりに危うくサトミちゃんを・・・」

仕方ないよ。気にしないで

目を伏せた可奈子だったが、サトミは全く気にしていないようだった。

そのあどけない笑顔向けられ、可奈子もありがとう、と微笑み返す。

子犬みたいな可愛さを持った子だな、と葵は思った。

「ね、犬神さん」

「何でしょう？」

「あの男子の霊は、どうして和輝に憑依したんだ？」

「2つ考えられる事がありますね。まず1つは、体調不良。霊は弱っている人を狙ってきます」

それなら納得できる、と葵は思った。

何せ、授業中に頭痛がすると言って和輝を保健室に連れてきたのは、他ならぬ自分なのだ。

「もう1つは・・・これは私の推察でしかないのですが、片桐さんは霊に狙われやすい体質かと」

狙われやすいって、そんな体質あるの？

最もな雪乃の疑問に、可奈子はゆっくりと答え始めた。

「人が生きるのには、『身体』という器に『魂』　これはいわゆる霊体や心と同意義です　が入っていないけません。雪乃さんやサトミちゃんのように、『身体』の生体機能が保てなくなると、それはすなわち『死』であり、『魂』は、必要となった身体から離れ、今の2人ようになります」

そこで一旦切って、可奈子は雪乃とサトミの顔を見た。

「普通、生きている間は、『身体』と『魂』は同じ形の紙を2枚重ねたようにぴつたりと適合しているものなのですが、片桐さんはそれが少しばかり『ズレて』います」

そこで可奈子は一呼吸置くが、誰も何も言わなかった。

葵も含め、みんな可奈子の話を理解するのに必死なのだろう。

「詳しい理由はわかりませんが、こういった特徴を持つ人の多くは、臨死体験をした事があるらしいです」

「それなら和輝、中学の時にプールで溺れかけた事があるぞ！」

中1の夏、プールでいじめられていた葵を身体を張って助けた時に溺れ、救急車を呼ぶ騒ぎにまでなった事があった。

それがキツカケで今の和輝との関係があるようなものなので、葵はその事件をよく覚えていた。

「・・・多分それが原因ですね」

身体と魂がズレてると、何か問題でもあるの？

「心身にズレが生じているという事は、それだけ霊が憑依しやすい、という事です」

同じ形の2枚の紙がぴったり重なって糊付けされていたら剥がすのは困難ですが、ずらして貼ってあれば容易に剥がせるでしょう、と可奈子は付け加えた。

つまり、キンパツ君の魂を無理やり引き剥がして、身体を奪おうと・・・？

「そうだと思います」

葵の背筋に冷たいものが走った。

サトミが抵抗していたとはいえ、あの男子の霊の方がサトミより『強い』のは何となくわかった。

もしあのまま手遅れになっていたら　と思うとぞっとした。

「憑依されやすいというのは、取り憑かれやすいという事でもあり

ます。まあ、今回のような事態は稀ですが・・・」

それでか、と葵は納得した。

サトミに取り憑かれる以前も、和輝は子どもや女性の霊などをよく連れていたのだ。

稀ってことは、もうキンパツ君が憑依されるって事はないの？

「それは何とも言えませんが、あの男子の存在はかなり稀ですね」

可奈子は、珍しく苦笑交じりに答えた。

稀って？

「あの男子を、黒いオーラが纏っているのが見えませんでしたか？」

それなら見た、と葵が言おうとした時。

「う、うーん・・・」

どうやら和輝が目を覚ましたらしい。

葵は、急いで和輝の寝ているベッドに駆け寄った。可奈子と雪乃、サトミも後に続く。

「和輝、大丈夫か！？」

「・・・あれ、葵？ 今何時？」

これは元の和輝だ、とほつとしたら、全身の力が抜けた。

「和輝・・・良かった」

「ん、何が？」

「いや、覚えてないならいいんだ」



覚えていないのならわざわざ話す必要はないだろう、と葵は判断した。

和輝はぼーとした表情で起き上がると、辺りを見回した。

「ん・・・犬神、サン？」

「大丈夫みたいですね、良かった」

「と、その隣の女の子は？」

和輝の視線が可奈子の隣に移動する。一瞬、誰もが言葉を失った。今保健室にいる女子は、可奈子と雪乃、それにサトミだけなのだ。

・・・え？

「あれ、そっちのセーラーの子は他校？ 今度一緒に遊ばない？」

「・・・もしかしてお前、この2人が見える、のか？」

「なーに言ってるだよ、葵。こんなにハッキリ・・・って、あれ」

和輝はごしごしと目をこすった。

「・・・あれ？ 俺、まだ寝ばけてんのかなあ。2人が透けて見えるんだけど」

固まっていた葵は、ぎこちなく口を開いた。

「い、犬神さん。こんな事ってあるのか？」

「・・・少なくとも、私は初めて見ました」

葵は思わず自分の手をつねってみるが、しつかりと痛みを感じた。

こ、こんにちは

「おう、君の名前何ていうの？ 俺ね、片桐和輝っていうんだ」

目覚めた和輝は、はっきりと霊の姿を認識することが出来るようになっていたのだった。

## 第十一話（後書き）

「和輝がプールで溺れた話」は、いずれ番外編として書こうと思っています。

## 第十二話

同日の午後6時半。

いったん帰宅して私服に着替えた葵は、寝具などを詰め込んだスポーツバッグを肩にかけ、日の沈みかけた住宅街を和輝の家に向かって歩いていった。

並んで歩くのは雪乃とサトミ、そして和輝だ。

というわけで、あたしは葵ちゃんと一緒にいるんだ

大変だったね、雪乃おねーちゃんも

「ホント、俺のここに来れば良かったのにさ」

和気あいあいと話す3人だったが、葵はその輪に加わらなかった。和輝が雪乃やサトミと普通に会話する光景なんて、ほんの2時間前には想像も出来なかった。

・・・その後、可奈子と2人で靈感を持ったキツカケを和輝に説明した。もちろん葵を絞殺しようとしたという事実を伏せておいたが、和輝は、話を聞き終わると「そっか、迷惑かけてゴメンな」と謝ったが、特に驚いた様子は見せなかった。

それに対し葵が尋ねると、いつもと変わらぬ笑顔で答えたのだった。

『別に。俺の知らない世界なんて、もつといっぱいあるだろうしさ』

・・・器が大きいなあ、とその時葵は心底感心した。

霊は普通の人には見えないのだと知った幼き日の葵は、その事実を受け入れるのに1週間は余裕でかったものだ。

そして今、どうして葵たちが和輝の家に向かっているか。それは帰り際の可奈子のひと言だった。

『水城さん、明日は土曜で学校もお休みですし、片桐さんと一緒にいてあげて下さいね』

困惑しつつ理由を聞くと、『今日は大変ですよ、片桐さん』と言っただけで明確な回答は得られなかったが、やはり気になる葵は和輝の家に1泊する事にしたのだ。

「っていうかさ、別に雪乃とサトミちゃんは来なくてもよかったんじゃないあ・・・」

なーに言ってるの、あたしは葵ちゃんにとり憑いてるんだから、一緒についてくの

サトミだって和輝おにーちゃんにとり憑いてんだもん

ねー、と声を揃える2人。完全に仲良くなったみたいだ。

以前、1人っ子である雪乃が『妹が欲しい』と言っていたのを思い出す。

仲良さそうに歩く2人は、本当に姉妹のように見えた。

ちょうど会社員の帰宅ラッシュ時なのか、人通りの多い駅前を抜けると『ソレアード』という2階建ての白いアパートの前に着いた。

ここが和輝おにーちゃんの家？

「おう、1人暮らしにしては立派だろ」

え、キンパツ君1人暮らしなの！？

そうだよ、と和輝は答えた。

彼の父親がオーストラリアに転勤になった時、和輝だけが日本に残った形になったのだと葵は聞いていた。

階段を上がり、和輝はポケットから出した鍵で201と書かれた扉を開けた。

わー、キンパツ君の部屋だあ

お邪魔しまーす

「いらっしやい。って言っても俺しかいないけど」

ははは、と和輝は笑い、葵を部屋に招き入れた。雪乃とサトミもその後に続き部屋に入る。

部屋と言っても、玄関のすぐ隣にある台所と浴室・洗面所が続くドア、そして奥に8畳くらい空間が1つといったシンプルな造りだ。部屋には、パイプベッドと折りたたみができるプラスチックのテーブル、それに本棚やクローゼットの他には目立った家具は見当たらないが、小物などが適度に置かれているので、殺風景というよりも整頓されている、と言った感じだ。

「相変わらず男らしくない部屋だな」

「1人暮らし長いと、家事が得意になるんだよ」

「じゃ、夕飯は腕にヨリをかけて作ってもらおうかな」

「インスタントのカレーでいいか？」

そんな冗談(?)をかましつつも、実際にテーブルに並べられた野菜炒めやチャーハンは、冷蔵庫の中にあつた残り物で作ったとは考えられないくらいの出来だった。

わーっ、キンパツ君料理上手いね。これなら一生独身でも安心だね！

雪乃は誉めているつもりなので、余計なひと言が和輝の心にぐさりと突き刺さったのなんて知る由もない。

いいな、和輝おにーちゃんのお料理。サトミも食べたいなあ  
「やっぱり、その身体じゃ食べれないの？」

うん・・・

指をくわえて料理を見つめるサトミ。  
どうにかできないものかと考えをめぐらせる葵の頭に、ある物がよぎった。

「和輝、お茶碗2つあるか。それと箸」

「あるけど・・・」

葵は受け取った茶碗にチャーハンを盛り付け、そのてっぺんに箸を突き刺した。

よくお葬式などで見られる、『枕飯』というやつだ。

葵はそれらを少女2人の前に並べた。

「こうすれば食べられるかな、なんて思ったんだけどさ」

葵ちゃん・・・

葵おにーちゃん・・・、ありがとう

実際に食べることはできないが、葵の気遣いにサトミはにっこりと笑ってみせた。

・・・やっぱ葵ちゃんは優しいなあ

「え、何か言った？」

ううん、何でもない。それよりホラ、早く食べないと冷めちゃうよ

「お、おう」

きょとんとしていた葵だったが、それ以上は何も言わずに出された料理に箸を伸ばした。

「そつえばさ」

ほとんど食事も終わりになった時、葵は口を開いた。  
全員はテレビのバラエティー番組から、葵に意識を向ける。

「サトミちゃんはどうしてお兄さんを探してたの？」

あ、それあたしも気になってた

「え、そうなんか？」

和輝には概要しか説明していなかったので、サトミが和輝に憑かれた理由を説明した。

サトミが保健室で話していた、『大学生の兄を探していて、たまたま似ていた和輝に惹かれた』という理由を。

「そうだったのか・・・。で、どうして兄貴を探してたんだ？」

・・・サトミね、ちっちゃい頃からお兄ちゃんのこと大好きだったんだ。サトミ、泣き虫だったけどお兄ちゃんはいつも慰めてくれてたし、すごい優しくかったの

楽しそうに喋るサトミの顔に、影がよぎった。

サトミが10才のとき、お母さんとお父さんが離婚しちゃって・

・お父さん、お兄ちゃんを連れて家を出て行っちゃったの

「・・・」

メールのやり取りしたり・・・たまに会ったりしてたけど、サトミが病気になってそれも出来なくなつて

でもお兄さんはお見舞いに来てくれたんでしょ？

雪乃の問いに、サトミは首を横に振った。



サトミ、最期までお兄ちゃんに会えなかったから・・・死んじや  
ってからも1年くらい探したけど、見つからないの・・・

うつむいたサトミは、ぎゅっとスカートのすそを握り締める。雪乃  
は黙ってサトミの頭をなでた。

（だからあの時の視線、あんなに強かったのか・・・）

葵は初めてこの少女を見た時のことを思い出していた。

木々の向こうからこちらを見つめる射るような鋭い視線は、初めか  
ら葵ではなく和輝に向けられていたのだ。

そしてその視線にこめられていたものは、決して憎悪や怨念の感情  
ではなく、兄に対する懐旧の念だったのだろう。

沈んだ雰囲気の室内に、バラエティー番組の騒がしい音声だけが響  
いている。

和輝はテレビのスイッチを切ると、重く垂れ込めた空気を破るかの  
ように大声を出した。

「サトミ！ お前の兄貴の家、わかるか？」

うつん、サトミが死んじやった後にお兄ちゃんの家に行ってみた  
んだけど、引越しちゃったみたいで・・・あ、でもお兄ちゃん  
の行ってる大学ならわかるよ

「何て名前だ？」

確か『和光科学大学』だったと思う

「よっしゃあ！」

随分と気合の入っている和輝。

サトミや雪乃はあつけにとられているが、付き合いの長い葵は、ど  
んなことを考えているかが大体分わかった。

「サトミちゃんのお兄さんを探すんだろ」

え！？

「さすが葵、ご名答」

どうやら葵の考えは当たっていたらしい。和輝はにやりと笑った。

なるほどー。キンパツ君、名案だねえ

「だろだろ、惚れ直した？」

「和輝、お前っ・・・」

「冗談だよー、じょ・う・だ・ん」

葵は顔を真っ赤にして和輝の肩を揺さぶるが、和輝はにやにや顔でからかうのをやめない。雪乃はといえば、そんな2人をまるで自分の子供に向けるような目で見ていた。  
その時。

・・・ホント！？

急に大きな声を出したサトミに驚き、男2人は動きを止めた。  
サトミを見ると、これ以上はない、ってくらいの嬉しそうな顔をしている。

ホントにお兄ちゃんを探してくれるの！？

高校生3人はお互いに顔を見合わせ、それからサトミの方に向き直ると同じタイミングで頷いた。

「これも何かの縁だしね」

そそ、それにちよっとおもしろそうだし

「子供は大人の世話になるもんよ？」

3人とも言っことは違ったが、サトミの為に何かしてあげたい、という想いは一緒だった。

ただ同情している、というわけではない。この人懐っこい少女を見ていると、何だか本当に自分の妹のような気がしてくるのだ。

セーラー服の少女は、涙ぐんだ声で礼を言っと、ぐすぐすと泣きはじめた。

雪乃はそんなサトミの頭をよしよしと撫でる。

「よし、じゃあ明日は休みだし、さっそく明日探しに行こうぜ」

「・・・それはいいけど和輝、お前和光科学大学の場所わかるのか？」

葵のツツコミにぴしりと固まる和輝。やはり全くわかっていなかったらしい。

「サトミちゃん、その場所ってわかる？」

うーん、そこまでは聞いてなかったなあ

「仕方ない。明日俺の家に寄ってネットで調べてから行くか」

「くそー、俺もパソコン欲しい」

「ま、俺ん家のだって家族兼用だけだな・・・ん？」

葵はポケットで振動する携帯に気付いた。着信画面を見たが知らない番号。誰だろうと思いつつも、葵は通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『こんばんは、犬神です』

「あ、犬神さん！」

葵は、加奈子から貰ったアドレスと番号を登録し忘れていた事を今

になって思い出した。

「お、犬神サンなの？」

『あ・・・片桐さんも一緒なんですね』

和輝の声が聞こえたらしい。ほっとしたような加奈子の声が電話の向こうから聞こえてきた。

「和輝に代わるうか？」

『あ、大丈夫です。片桐さんの様子が気になったので』

「和輝なら何ともないし、大丈夫だよ。・・・あ、そうだ」

葵は、サトミの話をおおまかに話した。

もしかしたら大学の場所を知っているかもしれないと思ったのだ。

『何でしたら、調べましょうか？』

「え、いいの!？」

『はい、後でかけ直しますね』

「それならさ!・・・明日、犬神さんも一緒に行かない？」

言ってから、葵はあれっと思った。自分でもどうして可奈子を誘ったのか、わからなかったのだ。強いて言うなら『なんとなく』だ。

『え、ご一緒していいんですか？』

「もちろん! 時間とか決めたら、また連絡するけどいい？」

ありがとうございますという礼を受け、葵は電話を切った。ふと見ると、和輝が目をぱちぱちと瞬かせている。

「葵も1人前に女の子誘えるようになったんだなあ・・・」

「いやさホラ、大学の場所調べてくれるっていうし、なんか霊関係で色々お世話になってるし・・・」

必死に言い訳しながら横目で雪乃を見るが、雪乃は楽しそうにサトミとお喋りをしているだけでこっちに何の関心も持っていないようだったので、ほっとした。

（ん？ でもそれって、裏を返せば意識されてないってコトなんじゃ・・・）

気付いてはならなかったことに気付いてしまい、内心でがっくりと肩を落とす葵であった。

\*\*\*

深夜2時過ぎ。

普段の『お泊り会』なら絶対に起きて酒盛りでもしている時間帯だが、今回はサトミの兄を探すという仕事があるので、葵たちは早々に休んでいた。

サトミや雪乃も、ふわふわと室内を漂いながら眠っている。

丑三つ時、それは江戸時代の不定時法という時刻の表し方を使ったもので、2時～2時30分のことを指す。

そして同時に、この世の者でないモノの動きが活発になる時間帯と言われている。

普段は霊が見えない人でも、この頃になるとふとした拍子に見たり感じたりするという事がある。

しかもその王道パターンとして、大概はほとんどの人間に恐怖をもたらす容姿をしている場合が多い。そしてこの男も例外ではなかった。

「ぎゃあああああああ!!」

夜のしじまを破ったのは、隣近所にまで聞こえるんじゃないだろうか、というくらいの大絶叫だった。

何ごとかと飛び起きた葵は、テーブルに肩を強打してしまった。

そうだ、今日はベッドじゃなくて布団で寝てたんだった。じんじんと痛む肩を押さえつつ辺りを見回す。

すると、ベッドに寝ている和輝が上半身を起こしているのが黒いシルエツトになって浮かび上がった。

葵は電灯のヒモを探し当て、部屋を明るくした。

「おい、今の和輝か!?!」

返事はない。まるで何キロも走った後のように、ただ荒い呼吸を繰り返すだけだ。顔も真っ青で、どうやら悪夢を見たなんてレベルではなさそうだ。葵は台所でコップに水を注ぎ、それを和輝に渡した。

「・・・今」

「え?」

葵が持ってきた水を飲んで落ち着いたので、和輝は唐突に口を開いた。

「金縛りっていうの? それになって・・・それで、だんだん葵が寝てる方から何か近付いて来て、それが髪の毛振り乱した貞子みたいな女で・・・そ、それが俺の上に」

「あー、なるほど。っていうか俺の方からってもの凄くイヤだな」

「なるほどってお前、こんな怖い目に合ったのにそれだけかよ」

「うーん、だつてねえ」

葵は過去にもつと過激な体験をした事は何度もあった。首を絞められたり、足を持って引きずられたにも関わらず、気がついたら元の場所だったり。

なので正直、和輝の見た女なんてのはまだまだ序の口だな、と思っ  
てしまう。

「俺はこんな見たの初めてで・・・うぎゃあ!!」

またもや絶叫しながら、葵の背後を指差す和輝。

今度は何だと思いつつも振り返ると、そこには黒い長髪をばさばさに振り乱した、赤い服を着た女がカーテンの隙間からじっとりこちらを見つめていた。

「こここいつだよ!さっきの貞子・・・」

「大丈夫だよ、このくらいなら大した事は出来ないから」

「そうなのか・・・」

それは17年間霊を見続けて生きてきた葵の勘だった。

しかし、さすがに長い間霊を見続けると、大抵気配や見た目などで「ヤバイ」か否かがわかってしまうのだ。

言うなれば『霊のソムリエ』である。ただし葵自身はその事を好ましく思っていないが。

「・・・寝れるか?」

返事は聞かなくてもわかっていたが、一応聞いてみる。和輝は、葵の予想通り首を横に振った。

いつも陽気で態度の大きい和輝も、さっきの事件が相当ショックだったのか、ベッドの隅の方で身を小さくしている。

（そりゃ、今まで靈感なかったのにいきなりあんなの見たんだもん  
な・・・）

そこまで考えて、葵は気がついた。

（そうか、犬神さんが今日は和輝と一緒にいてくれって言ったのは、  
この事を予想してたからなのか！）

人前に姿を現す霊というのは、単に人を怖がらせる目的か、大抵何か伝えたいことがある場合がほとんどだ。中には雪乃のような『例外』もいるが。

人に恐怖を与える霊にとっては相手の恐怖や不安などは格好のエサだし、何かを訴えたくて出てきた霊だって可奈子のような能力もないのに下手に同情したら、逆に取り憑かれたりする可能性だってあるのだ。

この事は、心霊番組や葵の長年の経験で培ってきた知識だ。

さっきだって和輝はかろうじて平気だったものの、葵がいなかったらさらにパニックに陥り、あの女に『乗られた』くらいじゃ済まなかったかもしれないのだ。

常に先を読む可奈子に、葵は脱帽の思いだった。

「んー」

葵はテレビをつけた。

ブラウン管は深夜番組ならではのやたらハイテンションな番組を映し出した。

しんと静まり返った冷たい室内に軽快な音声が響き、部屋の雰囲気はいっきに明るくなった。窓を見ると、もう女の霊は消えていた。

「ホラ和輝、もう消えたから大丈夫だぞ」



なだめるように和輝の肩をぽんぽんと叩くと、和輝は恐る恐る窓の方を見た。

しかしもう女はいないとわかって途端に力が抜けたのか、ごろりとベッドに仰向けになった。

2人とも無言だが、葵はその時ある事を考えていた。

何かキツカケがあればいいのにね。

いつだったか雪乃が言っていた言葉だ。

きつと、今がその『キツカケ』なんだと思う。

霊を見る力を入れた今の和輝なら、俺の話も理解してもらえないかもしれない。

（なーんて、都合よく行くわけないよな・・・）

葵はあまりにも楽天的な考えに内心で苦笑した。

「・・・あのさ」

しばらく沈黙状態を破り、和輝は唐突に口を開いた。

「やつぱり葵は前からこういうの見てたのか？」

「え？ あ、うん」

葵は、いきなり核心を突く質問がきたので、つい本当の事を答えてしまった。

それに対し和輝はそうか、と短く言っただけで後の会話は続かない。

（・・・怒った、のかな）

和輝の視線はテレビに向けられているが、どこか遠くを見ているような眼差しだった。

その表情からは、感情を伺う事ができない。

でも、これは靈感の事を黙っていたのを謝るにはいい機会だ。もうこんな隠し事で後ろめたい気持ちにはなりたくなかった。

「あの・・・さ」

そこまで言いかけて、言葉が途切れた。やはりどこかで恐れる自分がいるのだろうか。

ずっと靈感の事を隠してたのを咎められるかもしれない。

その事で嫌われてしまつかも、という可能性もある。だが、

キンパツ君はそんなことしなと思うけどなあ。

という雪乃のセリフが脳裏によぎる。それは今の葵の背中を押すのに十分な言葉だった。

「ごめんなっ！」

葵は顔の前で手を合わせた。

「その・・・俺、ずっと霊とか見えるの和輝に黙ってて・・・中学の時みたくなるのが、怖くて・・・だから、とにかくごめん！」

いつきに早口でまくしたてると、葵はぎゅっと目を瞑った。

何か言われる、と思っただけでじっとその時を待つ。だが、和輝は何も言わなかった。

完全に怒らせちゃったかな、と思いつつもおそろおそろ目を開ける。

「・・・・・・・・」

和輝は無言で葵のことをじっと見つめていた。

「ごめん、怒るのも当然だよな・・・和輝が取り憑かれたのだって、俺がちゃんと見てたら」

「このだアホめが」  
「いつ！」

ゴツ、と鈍い音が響いた。言葉を遮られたと思ったら、思いっきりげんこつで頭を殴られたのだ。

葵はあまりの痛さに涙目になりながら後頭部を押さえ、呻いた。

「お前、付き合い長いんだから俺がこんなコトじゃ怒ったりしないのわかるだろ」

予想外の言葉に驚き顔をあげる。

和輝はカバンの中から煙草の箱を取り出すと、1本抜き取って口にくわえた。そして先端に火を点ける。

葵はその一連の動作を無言で見届けると、恐る恐る口を開いた。

「じゃあ、怒って・・・ないのか？」

「ったりめーだろ、このバカが。第一、お前が何となくそういうの、見えてるっていうの気付いてたしな」

「えっ、嘘だあ！」

嘘じゃねーよ、と言いながら、和輝はドクロの形を模した灰皿に灰を落とした。

「中学の頃、クラスの奴らがそういう話してるのを何となく聞いてたし、お前たまに何も無い場所見つめてるだろ」

ありゃー分かるって、と笑う和輝だったが、葵はといえば凄まじいほどの脱力感に見舞われていた。

・・・今までの自分は何だったんだろう。散々悩んで考えて、要らない心配までして、やっとこの機会に嫌われるのを覚悟で話したというのに・・・。

「ま、でも葵から言って来てくれて嬉しいよ」

「・・・和輝も霊が見えるようになったから、いい機会になって」

「そうだな、霊ってどんな風なのかこの目で見れたし。さすがにさっきの貞子には参ったけど」

「和輝、ビビリすぎ」

「うるせ」

葵と和輝はお互いに顔を見合わせ、どちらからともつかず、自然に笑いだしたその時。

あれ、まだ起きてたの？

玄関の辺りからひよっこりと顔を出したのは、雪乃とサトミだった。葵はその時、初めて今まで雪乃とサトミがいなかった事に気付いた。

サトミたち、夜のお散歩行ってたんだー

2人とも、さっきは寝てたのに何かあったの？

その質問に、葵と和輝は顔を見合わせ、そして声を揃えた。

「いや、何にも」

## 第十二話（後書き）

更新が遅くなってすいません。  
あまりにも話が長くなって自分でも驚きました。

### 第十三話

翌日の午前10時半。

葵たち4人は、清泉高校の最寄り駅である柏木駅前の時計台にて可奈子の到着を待っていた。

5mくらいあるこの時計台は随分前に建てられたもので、待ち合わせをするにはもってこいの場所だった。

あ、あれ可奈子ちゃんじゃない？

雪乃が指差した先には、信号を渡って駅に向かってくる1人の少女の姿があった。

「え、あれ犬神さん？」

そつだよ！ 加奈子ちゃん！

雪乃が手を振ると少女もそれに気付いたらしく、多少方向転換をすると小走りで時計台の前に来た。

葵は加奈子の制服姿しか見た事がないから遠くからだとわからなかったが、息を切らすその少女は、確かに加奈子だった。

加奈子は黒いシャツの上にベージュのジャケットを羽織ってチエツクのスカートをはいており、肩からはショルダーバッグを下げている。

制服のようにも見える私服姿だったが、背も低く、幼い顔立ちをした可奈子にとっても似合っている。

「あの、どうかしました？」

可奈子に声をかけられ、葵ははっと我に返った。つい可奈子の私服

姿に見入ってしまったらしい。

葵は今までクラスの女子と遊びに行ったりといった経験は皆無なので、何だか新鮮に感じられるのだ。

「あ、いや。なんでもない」

何だか急に可奈子が眩しくなって、葵は顔をそむけた。

「そうですか……。あ、サトミちゃんのお兄さんの大学の場所ですが、何と柏木駅から電車1本で行けるんです」

「そ、そんなに近いの!？」

昨晚、大学はどれだけ遠いのかと危惧していただけに、電車1本で行ける距離だなんてかなり意外だった。

「良かったな、サトミ」

うん!

よし、それじゃあ行こっか!

そして5人は意気揚々と改札を通り抜けた。

駅のホームにて待っていると、しばらくして電車が滑り込んできた。5人はそれに乗り込む。中にはおじいさんやおばあさん、それに子連れの夫婦だけで土曜日だというのにほとんど乗客はいなかった。ほんとへんぴな場所だなあ、と葵は実感する。

ボックス席が空いていたので、一行はそこに腰を下ろした。4人分のスペースしかないので、サトミは雪乃の膝の上に座る。

可奈子おねーちゃん、常原駅までどれくらい?

「20分もあれば着くと思いますよ」

そっか



サトミはふわりと雪乃の元を離れ、車窓にぺたりと手をついた。窓の外をじっと見つめる視線の先には、きつと兄の姿があるのだろう。それは彼女の顔に浮かぶ満面の笑みが語っていた。そして何気なくサトミの視線の先を追って次々に流れる景色の中に目をやった時。

泣かないで。

がばつと窓に張り付く。額をガラスにぶつけて鈍い音がしたが、そんな事気にならなかった。一瞬だったが、葵がそこに見たのは

(・・・幼稚園?)

驚いた4人に声をかけられ、それに返事をしたものの、葵は完全に上の空だった。

間違いない。幼稚園を見た時、確かに頭の中に声が響いた。同時に何か・・・大切な何かを思い出しそうになったのだが、喉に引っかかったみたいに上手く思い出す事ができない。

(でも、さっきの声って・・・)

幼稚園を見た時に『泣かないで』と脳によぎった声。葵はその声に心当たりがあった。

今までに2回見た、あの公園のような場所での子ども2人のやりとりの夢。

男の子が泣きじゃくる女の子をなだめてる夢。さっきの声の主は、その男の子だ。

葵はその男の子の声を聞いたことがない。夢の中では、何故か男の子の声だけ全く聞こえてこなかったのだ。

しかし葵にはさっきの声はあの男の子のものだという妙な確信があった。

何故かと聞かれたら勘としか答えようがないが、葵は確かにそう感じた。

しかしそうすると、あれはただの夢何なのだろうか。

忘れていた大切な何かと、あの夢の男の子は関係があるのだろうか。そうになると、あの子ども達の正体は？あの風景は何処なのか？そして忘れている『大切な何か』とは、何なのか。

疑問は尽きず、葵はそれからしばらく考えていたのだが、結局答えは出ず、気がつくとも車内放送が常原駅に到着した事を告げていたのだった。

駅の改札を出ると、途端に喧騒が葵たちを飲み込んだ。

周辺にはそびえ立つ駅ビルが並び、ここから見える空の面積はとても狭い。

柏木駅と比べると、人の多さも建物の数も天と地、象と蟻ほどの差がある。

しかしかつてはこの駅も質素な造りで駅前には商店街が広がる、至って庶民的な駅だったのだが、数年前に駅と商店街の全面改装が始まり、今となつては数年前の面影は全く残っていない。

「えーと、北口を右に進み・・・こつちですね」

大学までの簡易地図を手にした加奈子を先頭に、一行はサトミの兄のいる地へと向かう。

道は大して複雑な訳ではなく、何回か信号を渡るとすぐに『和光科学大学』と彫られた立派な門が現れた。

これがお兄ちゃんのいる大学・・・

門から続く真っ直ぐな並木道。その向こうにある開けたスペース。そこには小さく噴水やベンチが見える。建物自体は見えないが、高校とはかなり雰囲気が違う。今までオープンキャンパス等で大学を見に来た事なかった葵にとってはかなり驚きだった。別に大学を初めて見るわけではなかったが、身近にこんなに環境の良い大学があるとは知らなかったのだ。

「でも人が全然いねえな」

和輝にそう言われ辺りを見回すと、確かに警備員のおじさんが門の脇に立っている以外に人の姿はなかった。ふと嫌な予感がして葵は携帯を見る。

4 / 2 1 (日)      1 1 : 2 1

「・・・」

それにつられた4人も、葵の持つ携帯を覗き込む。あ、と4人の声が見事に重なった。

・・・日曜って、大学休みじゃん

雪乃の言う通り。5人は浮かれすぎて、今日が日曜なのをすっかり忘れていたのである。

\*\*\*

うつゝ・・・

「ご、ごめんねサトミちゃん」

「すみません、ちゃんと私が確認していれば・・・」

「いや、犬神さんのせいじゃないって」

「そうそう、俺らもどうかしてたわ」

こんなオチがあるなんて考えてなかったなあ、と和輝は続けた。

一応警備員のおじさんに聞いてみたが、予想通り大学は休み。

このまま真っ直ぐ帰るのもシヤクだったので、葵たちは駅前のファーストフード店にて少し早めの昼食をとりつつ、これからについて話し合っているところだった。

サトミちゃん、お兄さんの住所とかはわからないんだよね？

雪乃の問いに、サトミはこくりと頷いた。

この少女が病気で入院している間にサトミの兄はどこかに引越してしまったのだというのは以前聞いていた。

「電話帳の苗字から住所調べてるってのはどうだ？」

「引越してしまったならお兄さんがこの付近に住んでいると断定は出来ませんよ」

「じゃあ近所の人に聞いてみるとか？」

「赤の他人の私たちに引越し先まで教えてくれるかどうか」

「・・・俺明日学校サボって朝から張り込もうかな」

「それは最後の手段ですね」

立て続けに出した案をやんわりと加奈子に否定され肩を落とす和輝。本人にとっては3つともかなり名案だったらしい。

うーん・・・

雪乃が頭を抱えて唸るがその後が続かない。和輝と加奈子も良い案が見つからないのか、それぞれ黙々とハンバーガーなどに手をつけている。

葵もお茶を飲みながら案をめぐらすが、これぞという打開策が思い付かない。

だが、今日このまま家に帰るというのだけはどうしてもしたくない。彼女をぬか喜びさせてしまった上に落ち込ませたまま帰りたくはない、と葵は思った。

ちらりとサトミに目をやると、窓から道行く人々をじっと見つめていた。

3階の高さから沢山の人を見下ろすというのは、まるでコンクリートの上を這う大量の蟻を見ている気分になってくる。

下手すれば気持ち悪くなりそうな光景をじっと見つめるサトミは、まるでこの雑踏の中から自分の兄を探し出そうとしているみたいに見えた。

（この人ごみの中からお兄さんを見つけられる確立なんて・・・）

サトミちゃんには可哀想だけど、無いに等しいだろうなあ。そう思った時だった。

お兄ちゃんっ！

サトミがいきなり叫んだかと思うとガラス張りの壁をすり抜け、道路へと飛び降りたのだ。

サトミちゃん！？

「サトミー！」

葵は慌ててガラスに張り付いて

サトミを目で追った。（当然ながら）無事だった彼女は、雑踏の中へと姿を消してしまった。

「後を追わないと！」

葵のそのひと言で予想外な行動に啞然としていた雪乃たちも我に返り、食べ残しもそのままに急いで店を飛び出す。

葵以外は何が起こったのか全く理解できていないようだったが、葵には僅かに心当たりがあった。

脳裏によぎる、先ほどのサトミが窓の外をじっと見ている光景。まさかこの人ごみの中でお兄さんを見つけたというのだろうか。しかし例え見間違いであったとしても、それしか考えられない。それを3人に伝えると、全員かなり驚いていた。

じゃあ早く探さないと！

「待ってください」

適当な方向に進もうとした雪乃を、可奈子が引きとめる。

「闇雲に探しても余計分からなくなるだけですよ」

でも・・・

「大丈夫です。ちょっと待っててくださいね」

意味ありげに笑うと、可奈子はすっと目を閉じた。

「ええ、そうです・・・え？　そうですか・・・はい、わかりました」

まるで目には見えない『誰か』と会話しているようだが、霊との会

話なら相手が見えるはずなのに葵には誰と会話をしているかは分からない。雪乃と和輝にも見えないらしく、首を傾げつつも黙って見守っている。

姿の見えない相手と会話をする姿は何とも言えず不気味だということを、この時初めて葵は知った。

自分が幼い頃、周りからの目が異様だったのもこれで納得できる。

「・・・ありがとうございます」

『誰か』に礼を言うと可奈子は目を開けた。もう会話は終わっただしい。につこりと笑みを浮かべているところから、どうやらサトミの居場所がわかったようだ。

「こっちです」

言うが早いか駆け出す可奈子。3人は慌ててそれに続く。葵は走りながらさつき気になった事を可奈子に尋ねて見た。

「犬神さん、さつき誰と話してたの？」

「あら。水城さんには見えませんでしたか」

それは意外だという顔をされたが、意外なのはこっちである。

「私の守護霊さまですよ」

「しゅご・・・れい？俺には見えなかったけど」

守護霊。人間に必ず1体は憑いているもので、様々な災いや不幸、そしてその人自身が墮落しないように見守ってくれる、いわば『いい霊』である。・・・とテレビで言っていた記憶がある。しかし霊ならば葵に見えないはずはない。

「靈感にもレベルがありますから・・・この話は今度ゆつくり話すとして、こっちですよ！」

急に角を曲がられ、それについていけなくて真っ直ぐ進みかける葵。和輝もかなり息を切らせ、ついていくのに必死そうだが、雪乃はすすと空中を移動できるのでその点幽霊は楽そうだ。

可奈子ちゃん。さつきから適当に走ってるように見えるけど、ホントにサトミちゃんに近づいてる？

「大丈夫ですよ、ちゃんと近づいてます・・・そろそろだと思いますが」

葵たちが今いる場所は華やかな雰囲気、表通りとは一転して、あまり人影が見られない寂しい雰囲気の道路だ。

どうやら常原駅とその前のビル街は『張子の虎』だったようだ。

道路脇に立つ、あちこち亀裂の入った低いビルや地味なパチンコ店などが、駅や表通りの虚栄的な華やかさを一層引き立てていた。

そしてその錆びれた裏通りの一角から、聞きなれた少女の悲鳴に近い泣き声が聞こえてきたのは次の瞬間の事だった。

ねえ、お兄ちゃんってば！　ねえ、サトミだよ！

声のする方に行ってみると、1人の青年の周りを、セーラー服の少女がつきまとっている光景が目に入った。間違いない、サトミだ。・

・・ということは、あの青年がサトミの兄なんだろう。葵は駆け寄ろうとしたが、足を止めた。様子がおかしい。こちらに背を向けて歩いてゆく青年は、少女の存在にまるで気付いていないようなのだ。

何度も呼びかけても、何も聞こえていないかのように無反応な青年。



そうか。

葵は常に靈感があるから実感はなかったが、サトミは死んでいる。霊なのだ。

普通の人間に霊は見えない。大事な人の近くにいても、必死に叫んでも、その声は絶対に届く事はないのだ。

（だとしたら・・・）

だとしたら、自分はなんて残酷な事をしてしまったのだろうか。こっちから会いにいつても相手が気付きもしないのなら、それはそれはもしかしたら、自分が死んだ時よりもよっぽど辛くて悲しいんじゃないか。

ねえ、お兄ちゃんてば！ どうして振り向いてくれないの、どうして・・・

4人だけに聞こえる悲痛な叫びが裏通りに木霊する。

葵はいたたまれない気持ちになり、青年と少女から目を背けた。

「・・・俺、とんでもないコトしちゃった」

ぽつりと和輝が呟いた。

「あんなコト・・・軽く言うんじゃないかった。それがこんなコトになるなんて、俺」

その顔は青くなっており、心なしか震えているようにも見える。だが、和輝だけのせいではない・・・葵だって、軽く考えていたか

もしれない。

妹みたいで放っておけない、ちょっとした人助けだと。その結果がこれだ。

自分に対する嫌悪感で潰されそうになり、葵はジャケットの裾をきつくきつく握り締める。

葵ちゃん・・・

「大丈夫ですよ」

はつとして顔をあげると、可奈子が葵を覗き込んでいる。

その顔にはまるで泣きじゃくる子どもをあやすような、深く暖かい笑みが満ちていた。

「・・・こういう時の為に私がいるんですよ。それに片桐さん、あなたが最初にお兄さんに会わせてあげたいと提案したからこそ、私たちは今ここにいるんです」

「でも　！」

「大丈夫。雪乃さん、サトミちゃんを呼んできて貰えますか？」

え・・・あ、うん

それから少しして、人目もはばからず大声で泣きじゃくるサトミを連れて雪乃は戻って来た。

道の真ん中に座り込んでいたのだという。

お兄ちゃん・・・うつ、サトミに全然・・・えぐっ

「サトミちゃん。今からあなたに魔法をかけてあげる」

可奈子はふんわりとサトミの頭を撫でる。その手首に、どこかで見たとような数珠のブレスレットが光っているのを葵は見た。サトミは泣きじゃくるのをやめ、ゆっくりと顔を上げた。

・・・なにをするの？

「私の身体を貸してあげる。それでお兄さんとも話が出来るはず」

「い、犬神サン。『身体を貸す』ってどういう・・・？」

「文字通りですよ。サトミちゃん、ちよっと待っててね」

サトミの頭をぽん、と叩くと、可奈子はショルダーバッグからいつもの長い数珠を取り出した。

葵の脳裏にいつも数珠を持ち歩いているんだろうか、という素朴な疑問が浮かぶが、何をするかの方が気になるので黙っている。

可奈子は数珠を指にかけると、よく通る声で祝詞を暗唱し始めた。

一重積んでは父のため 二重積んでは母のため  
三重積んではふるさとの 兄弟我身と回向して  
昼は独りで遊べども 日も入りあいのその頃は  
地獄の鬼が現れて やれ汝らは何をする

(・・・また、だ)

可奈子の声が空気を震わす度に、 少しずつ空気が張り詰めている感じがする。

しかも今回は、雪乃を復活させた時や男子学生の霊を成仏させようとした時なんかよりも比べ物にならない位、肩に押し掛かってくる空気が重い。圧力に押し潰されそうである。

そして道路には葵たちの他には誰も見当たらないのに、背後からざわざわと大勢の人間のざわめきが聞こえてくる。これは霊だ。そう考えると、気分が悪くなってきた。

今、自分の周りに何十、下手したら何百もの霊がいるかと思うと耐

えられないのだ。

だがそんな葵などお構いなしに、祝詞の言葉は空間に刻まれてゆく。

いまだ歩まぬみどりごを　錫杖じやくぢゆうの柄えに取りつかせ  
忍辱慈悲の御肌へに　いだきかかえ　なでさすり  
哀れみたまうぞ有難き

眩暈までしてきて、立っているのが辛くなってきたその時。

唐突に空間は開放され、空気が軽くなった。

もうざわめきも気配も全く感じない。しかし可奈子を見ると、ぐつたりとその場にしゃがみこんでいるではないか。

葵は慌ててかけよって、可奈子を抱き起こそうとする。

「犬神さん！　だいじょう　」

「葵おにいちゃん！」

一瞬硬直する葵。

今確かに自分の事をお兄ちゃんと呼んだのは可奈子だが、その呼び方はサトミのものだ。

「すつごーい！　サトミ、可奈子おねーちゃんの身体で喋ってるよ  
！」

「・・・身体を貸してあげるって自分にサトミちゃんを乗り移らせるってことか」

頭では理解しているものの、普段の可奈子とのあまりのギャップについていけずに未だ硬直したままの葵に代わって和輝が呟いた。何者なんだろうなあの人、とも続けるが、その答えは葵も知りたいく

らいだ。

サトミちゃん、これでお兄さんともちゃんと話ができるよ

雪乃の言葉に、可奈子　いや、サトミの表情がパツと明るくなる。  
まだ兄が消えてから3分も経っていない。探せばすぐ見つかるだろう。

「・・・よしサトミ、急いで追いかけるぞ！」  
「うん！」

サトミは立ち上がって膝をばたばたはたくと、急いで駆け出した。  
今度こそ自分の兄と会って話をするために。

### 第十三話（後書き）

可奈子が唱えている言葉ですが、これは『賽の河原の地藏和讃』という歌からとったものです。

## 第十四話（前書き）

更新が遅れてしまいすみません。

## 第十四話

さすがに水平移動できる幽霊の時よりも移動するスピードは遅かったが、それでもサトミの足取りはかるやかだった。本当に兄と再会できるという喜びのためだろう。

「あつ、お兄ちゃんだ!」

前方に、灰色のジャケットを着た男性の後ろ姿が見えた。葵は先ほどちらりと見ただけだが、サトミの兄に間違いないだろう。

青年はゆつくりとしたペースで歩いているため、すぐに追いつく事が出来た。

「お兄ちゃん・・・慎治お兄ちゃん!」

名前を呼ばれたのに反応し、サトミの兄・慎治は振り返った。眼鏡をかけた理知的な顔立ちだが、きょとんとした表情を浮かべている。

「えと、あの・・・?」

「お兄ちゃん!」

「へっ?」

明らかに動揺を隠せていない兄に、ぎゅっと抱き付くサトミ。加奈子は元々身長が低いので、その光景はまさに『兄妹』に見えた。

「あの、人違いじゃ・・・?」

しかしこちらから見たら心暖まる感動の再会シーンも、兄の方からしてみたら見ず知らずの女の子にいきなり抱き付かれているのだから



ら、パニックに陥るのも無理はなかった。

「サトミだよ！ お兄ちゃん元気だった？ ずっと会えなかったから心配だったよ」

「な、何を言って」

「お父さん元気？ それからお母さんも」

「や、やめ」

言いたい事が積みもり積もっていたのか、サトミは興奮してまくしたてる。

「今はこの加奈子おねーちゃん・・・あ、この身体の人なんだけど・・・の中に入れてもらってるんだ。幽霊のままだと、お兄ちゃんサトミに気付かな」

「やめてくれ！」

突然の大声に、サトミはびくりと肩を震わせる。

「・・・君が誰かは知らないが、妹の名を語ってそんな悪ふざけはやめてくれ。妹は死んだんだ」

慎治は目を伏せ、それだけを淡々と告げると妹と名乗る少女に背を向けて歩き出した。一方サトミは、ただその場でうつむいているだけだ。

・・・こうなるであろう事は、葵も予想していた。いきなり知らない少女に「自分はおあなたの妹です」なんて言われれば、しかもその妹が亡くなっているならば、普通は、そのまますんなり受け入れるなんて事にはならない。たとえそれが事実であろうとも。

（でも、こんなのはあんまりだ！）

いてもたってもいられなくなった葵が1歩を踏み出そうとした瞬間、

「12月2日が、何の日か覚えてる？」

サトミの一言に、その場に入ろうとしていた葵や雪乃・・・そして慎治は動きを止めた。

少女は、もううつむいてはいなかった。

もう、諦めない。そんな想いのこもった強い眼差しで、しっかりと兄を見据えている。

葵は以前、この眼を見た事があった　そうだ、あれはサトミが和輝を見つめていたのと同じ視線だ。

サトミは、立ち止まったままの兄の背に向け、その口をゆっくりと開いた。

「・・・一昨年のその日、お兄ちゃんはサトミにおっきなウサギのぬいぐるみをくれた。

サトミが前から欲しいって言ってたやつで・・・初めてお店で見た時に、冗談のつもりで『欲しい』って言ったら、お兄ちゃん本気にしちゃって。誕生日にくれた時は、ほんとにびっくりした」

「ど、どうしてその事を・・・」

慎治は振り返り尋ねる。その顔には、驚きの表情が浮かんでいた。だがサトミはその問いには答えない。

「お兄ちゃんはそのウサギの他にも、ケーキ屋さんで小さなケーキを買ってくれた。・・・とっても嬉しかったし、楽しかった」

サトミはそこで言葉を区切った。少しの間無言になる。1つ道路をはさんだけなのに、人や店でのざわめきがとても遠くの出来事の

ように感じる。

誰も何も言わなかったが、葵は隣で貧乏ゆすりをする和輝に気がついた。

それに、内容だけならほのぼのとしているが、葵には何故かこの間が嫌なものに感じられた。

サトミは葵たちに目をやり、それから視線を慎治に戻すと、小さくため息をついて、続けた。

「その年が明けて、初もうでに行った時だった。サトミ、急にフラツとして倒れちゃったの。救急車で運ばれて・・・病院での検査で・・・白血病なのがわかったの」

「・・・もう、いいよ」

その時、ずっと黙りこくっていた慎治が初めて口を開いた。だがサトミには聞こえなかったらしい。

「それからは、抗がん剤のお薬とか大変だった。毎日ずっと苦しくて、それでも良くならなくて」

「もういいって！」

言うが早いか、慎治はサトミの元に駆け寄ると、そのか細い身体が折れそうなくらい強く、思いっきり抱きしめた。

「・・・もう、わかったよ。サトミ・・・なんだよな？」

サトミの頬を、一筋の水が伝った。

それから彼女は恐る恐る手を伸ばし、兄の広い背にまわす。

先ほどのように拒否されないことを確かめると、慎治のジャケットを強く握り締めた。

「慎治お兄ちゃん・・・!」

震える唇で最愛の兄の名を呟く。

何度も何度も確認するように、愛しおしむようにその名を呼ぶうち、それはいつしか低い嗚咽になって彼女の喉から漏れた。

「本当にごめん。お見舞いにも行けなくて・・・母さんから連絡を貰って病院に行った時は、もうサトミは昏睡状態になってて・・・」  
「・・・うつん、それはもういいの。それより・・・サトミ、お兄ちゃんにずっと言いたかったコトが・・・」

一生懸命何かを言おうとするのだが、嗚咽に邪魔されて上手く言葉にできないサトミ。

慎治はゆっくりと妹の背をさすり、頭を撫で、焦らす事もなくその続きを待った。

しばらくすると少しは落ち着いたので、手の甲で目をこすり、ゆっくりとかすれた声を発した。

「あたしが死んだ日・・・何日か、覚えてる?」

意外外の質問だったのか、目を丸くする慎治。しかし一瞬のち、さも当然の事のように答えた。

「忘れるわけないだろ、4月23日だ」

「えへへ、覚えててくれたんだ。・・・じゃあその3日後は何の日?」

さっきとは打って変わって、こちらは少し時間がかかった。

うー、だとかむー、だとか、まるで難しい数式を解いている時のような唸り声を発している。そしてしばらくしてようやく出した答え

は、

「・・・みどりの日？」

惜しい！

外野であるはずの雪乃からツッコミが飛ぶ。ちなみにみどりの日は4月29日だ。

「あれ、4月26日って文化の日じゃなかったっけ」

「馬鹿、それは11月3日だよ」

本当に日本国民なのかを疑いたくなるような和輝の発言に迅速かつ的確なツッコミを入れつつ、葵も少し考えてみた。しかし4月26日という日付に心当たりはない。

あ

「何、なんか思い付いた？」

チエルノブイリ原発事故の日だ

「いや、絶対関係ないだろ」

しかもなんでそんな事知ってるんだ、という更なるツッコミを心の中にしまい込み、葵は視線を兄妹2人に戻した。

そこにはくすくすと笑うサトミと、照れたように頭を掻く慎治。結局その日が何なのかわからなかったらしい。

「・・・ほんと、お兄ちゃんていつつもそうだね。自分のことよりも、サトミとか、お父さんやお母さんのコトを優先してさ」

「・・・」

「そんなコトあるよ。だってお兄ちゃん、お父さんとお母さんの離婚が決まった時も、ずっと泣いてるサトミのコト慰めてくれてたじ

やない」

「・・・・・・・・」

「離婚しちゃってからも、よく一緒に遊んでくれたしさ」

「・・・・・・・・そんな、事」

「だからサトミ、今でもずっとお兄ちゃんのコト好きだよ。そんな優しいお兄ちゃんが」

「そんな事、言わないでくれ」

謳うようなサトミの言葉を遮ったのは、さっきの照れた表情とは一変して沈痛な面持ちの慎治だった。

「お兄ちゃん？」

「・・・・俺は、優しいどころか、兄として失格だ」

「どうして？ サトミのコト嫌いだったの？」

「違う、そうじゃない。・・・・サトミがいなくなってから、ずっと考えてたんだ」

慎治は、そこで一旦区切ると、深く息を吸った。心なしか、全身がわなわなと震えているように見える。

「俺が。・・・・俺がもっと早く、サトミの病気に気付けていれば、サトミももしかしたら助かったんじゃないかって」

「それは、」

「俺は、サトミが生まれた時からずっと、サトミを見てきた。共働きだった両親のかわりに、俺がしっかりしなきゃ・・・・って。両親が離婚してからも、しょっちゅう電話したり、会ったりもしてた。一緒にいる時間が一番長かったのは俺なのに。それなのに、俺はサトミの異変に気づけなかったんだ。・・・・だから、優しいだなんて言わないでくれ。俺には、そんな権利はないんだ」

沈黙する2人。サトミは肩を僅かに震わせていて、せつかく止まった涙がまた流れているように見えた。

決して感情を表に出す事もなく、淡々とそれは語られていった。しかし、だからこそ、後悔と、自分に対する激しい怒りを葵はそこに垣間見た気がした。そして同時に、妹に対する深い愛情も。

「ごめん、サトミ。本当に……ごめん」

謝罪の言葉に、サトミは何回か鼻をすすった後、涙交じりの声で、小さく呟いた。

「……あのねお兄ちゃん。サトミ、別にお兄ちゃんの事恨んだりなんてしてないよ」

「サトミ……」

「確かに、サトミは病気になって、13年しか生きられなかったかもしれない。でもね、後悔はしてないの。……だって、お兄ちゃんと一緒にすごしてきた時間だけで、もう一生ぶんの楽しさを味わえた気がするから」

サトミは涙でぐしゃぐしゃになった顔をあげる。両頬には、大粒の涙が幾筋もつたっていた。さっきからずっと泣き通しかったから、目も頬も、耳だって真っ赤だ。

しかし彼女は笑っていた。これ以上ないというくらいの、満面の笑みで。それは、本当に自分の人生に満足した者にしか出来ないような、会心の笑みだった。そして彼女の言葉に嘘偽りがない事は、その笑顔を見れば一目瞭然だった。

「だからお兄ちゃん、自分が悪いだなんて……思わないで」

「サトミ……」

慎治は、サトミのか細い身体に縋り付く。その肩が震えているように見えたのは、決して葵の気のせいではないはずだ。

兄妹の感動的な情景に、自分の目頭が熱くなるのを感じる。しかし、和輝と、それに何と言っても雪乃の前で涙を見せるわけにはいかない。ゆっくりと息を吐きつつ視線を2人から逸らす。

その時、自分の隣でも誰かの肩が震えているのに気付く。てっきり雪乃かと思いきや、それは目にうつすらと涙を溜めた和輝だった。

「和輝、お前・・・泣いてんのか？」

心底驚いたように自分を見つめる葵と雪乃に気付き、和輝は慌てたように目をこすった。

「そ、そんなわけないだろっ」

「・・・・・・・・」

しかし否定する声はかすれ、震えている。

葵はそれ以上の言及を止めた。

一方の雪乃はいえば、きょんとした顔で和輝に見入っていた。そういえば、雪乃は滅多に泣かない性格だったんだという事を思い出す。

意外な事に気をとられたのが良かったのか、いつの間にか涙は止まっていた。

（それにしても、泣いている和輝なんて初めて見たな）

後でからかってやろう、と内心でほくそ笑みつつ視線を兄妹に戻した葵は、ふと違和感を感じた。



(・・・?)

じっと目を凝らす。

慎治に抱きすくめられているサトミ。彼女が慎治の背に回した腕が、心なしか光って・・・ん？　光って？

「なんか・・・サトミちゃん、光ってない？」

え・・・わわっ！　ど、どうしたのサトミちゃん！？

それは葵の気のせいではなかった。

ほんのりとだが、サトミの身体全体が、淡い光で包まれているのだ。

「サトミがどうしたって？」

復活した和輝が建物の陰から顔を出す。

「うおっ、あいつどうしたんだ！？」

やはり和輝にも見えているようだ。

しかも、段々とその光は強くなっていく。しかし、慎治は気付かない様子でサトミを抱きしめたまま身じろぎ一つしない。いや、それは気付いていないというよりは、見ていないと言った方が正しいかもしれないかった。

ねえ、あれってまさか・・・

「うん、多分」

なんとなくだが、葵には確信があった。

「な、何だよ？」

一人わかっていない和輝に、雪乃が告げる。

多分・・・成仏だと思う

サトミは、自分の身体がほんのりと発光しているのに気付いていた。そして同時に、これが幽霊としての自分でいられる最期の時なのだと本能で感じ取っていた。

（そっか。サトミ、成仏・・・しちゃうんだ）

慎治のジャケットを握り締めた手に、力を込める。

自分が死んでからどれくらいの間、慎治を求めて彷徨った事だろう。そして何度途方に暮れて、何度諦めかけた事だろう。その何度目の時に、和輝を見かけたのだ。

一目見て、お兄ちゃんに似ているな、と思った。見た目とか顔つきとかは全く似ていないが、その人の持つている暖かさというか・・・こっ、強いて言うなら『タマシイの色』とでも言っべきものが似ていた気がしたから。

そして、つい兄の面影を求め、和輝の側にいたところ、あの男子学生の霊が現れて・・・とにかく、後は大変だった。

（あとちょっとで、可奈子おねーちゃんにお被いされちゃうトコだったしね）

ふふっ、と自然に笑みが漏れる。

それに気付いたのか、慎治が顔を上げた。涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、不思議そうにこちらを見ている。思わず、サトミは吹きだした。

「お兄ちゃん、すごい顔」

「サトミだつて、人の事言えないぞ」

そう言うと、慎治はポケットからハンカチを取り出して、サトミの涙をそっと拭った。

優しい兄。いつもサトミの事を優先してくれていた兄。

そんな慎治ともうすぐお別れなのかと思うと　　やっぱり、寂しかった。

出来る事なら、これからずっと慎治の側にいたい。

しかし、先ほどよりも強くなった光が、もう残された時間は僅かな事を物語っていた。

（・・・そうだね、和輝おにーちゃんたちのおかげで、サトミは慎治お兄ちゃんに会えたんだし・・・お兄ちゃんに会えないで成仏しないよりも、ぜんぜん良かったんだよね）

サトミは、兄のジャケットに顔を埋め、肺いっぱい空気を吸い込んだ。懐かしい、兄の匂いが鼻腔に広がる。それは、まだ家族全員、1つ屋根の下で暮らしていた頃の家の匂いと同じなのだった。ふう、とサトミは吸い込んだ空気を吐き出した。

（サトミがこのまま成仏しても、生まれ変わっても・・・この匂いを覚えておこう。お兄ちゃんの事を、みんなで暮らしてた時の良い思い出を忘れないように）

「・・・サトミ？」

うつすらと目を開けると、そこには心配そうにサトミを覗きこむ慎治がいた。

「ごめんねお兄ちゃん。・・・そろそろ、お別れみたい」

「そんな！ 折角こつやつてまた会えたのに・・・」

「この身体、サトミがお世話になった人から借りてるだけだから・・・」

発光が強くなる。目を開けているのも辛いくらいだ。

「でも」

「お兄ちゃん」

もう本当に時間がなかった。

サトミは、自分の動作がぎこちなくなるのを感じた。魂と身体の結びつきが薄れ始めているのだ。

あと少しで、自分はこの世界から消えてしまうだろう。あるいは、幽体としての自分はまだいくらかこの世に留まるかもしれないが、少なくとも可奈子の身体から弾き出されてしまうのは時間の問題だった。だから、最期に何か・・・

「ねえお兄ちゃん、さっきの話の続きだけどね」

「さっきの話？」

「うん、サトミが死んだ日のこと。・・・サトミね、ずっとお兄ちゃんに言いたかった事があったの」

サトミは、自分の身体がすつと軽くなっていくのを感じた。生身の身体と幽体との分離が始まっているのだ。

・・・お願いだから、あとちょっとだけ待って。

「お兄ちゃん、毎年サトミ誕生日をお祝いしてくれたでしょ。・・・だから、サトミもお兄ちゃんの誕生日をお祝いしたかったの」

「誕生日           あ」

鈍感な慎治も、ようやく4月26日という日付の意味を思い出したようだった。       すなわち、自分の誕生日を。

ふふっ、とサトミが微笑む。しかし、その微笑みは表情に出る事はない。もはや、サトミの意識はほとんど対外へと拡散していた。それでも最後の力を振り絞り、それを告げる。

「だからね、お兄ちゃん       誕生日、おめでとう」

そして、サトミの意識は完全に可奈子の体から弾き出された。

葵は、目を刺すような強烈な光が一瞬にして消えうせたのを感じた。瞑っていた目を少しずつ開けると、確かに光は消えていた。しかし

「サトミちゃん！       ・・・いや、あれは犬神さん？」

そこにいたのは、意識を失った可奈子と、驚いたように可奈子を抱きとめている慎治だけだった。

サトミちゃんは！？

「・・・わからない」

「まさか、本当に成仏しちゃったのか！？」

辺りを見回すも、サトミの幽体らしき人影は見当たらない。

「っていうか、可奈子ちゃん！」

「あ、おい！」

雪乃は建物の陰を飛び出したかと思うと、一目散に可奈子と慎治の元まで飛んでいく。

葵と和輝は、お互いに顔を見合わせると、雪乃の後を追った。

「サトミ・・・サトミっ!？」

「ちよつとすいません」

サトミの、いや、可奈子の身体をがくがくと揺さ振る慎治を手で制し、葵は可奈子をそつと地面に横たえた。可奈子の肩を支える手から、服ごしに温もりが伝わってくる。

何を考えてるんだ、俺は。

内心で自分を叱咤する。

雪乃が可奈子の名を2、3度呼ぶと、可奈子が小さく呻いた。

「犬神さん、大丈夫か!？」

「う・・・」

額に手をやりながら、可奈子は上半身を起こした。そしてゆっくりと辺りを見回す。

良かった、大した事はないみたいだ。

「・・・サトミちゃん、成仏したんですね」

やっぱり、あの光は成仏の合図だったんだ・・・

「おい、サトミ・・・サトミはどこにいったんだ!？」

それまで呆然としていた慎治が、可奈子の肩にすがりついた。葵たちは事情をわかっていても、慎治からすれば訳のわからない事だらけなのだから、混乱するのも無理はなかった。

「サトミちゃんは」

慎治をなだめつつ、可奈子は言った。

「成仏しました」

それを聞いた慎治の表情が、悲愴から落胆の色に変わる。そして可奈子の肩を掴んでいた手を離すと、地面に膝をついた。

「もう、会えないのか」

「・・・はい」

「・・・これだけの」

「え？」

「これだけの時間しか会えないんだったら・・・いつその事、会わない方が良かったのかもな」

自嘲的に笑う慎治に、葵はむしように腹が立った。だが、何か言つてやろうと口を開くよりも速く、和輝の腕が伸びていた。

「てめエ！」

がつ、と慎治の襟首を掴んで、強引に立ち上がらせる。

「サトミが、今までどんな思いでお前の事捜してたか知ってんのか！ 何日も何日もお前だけをただ捜して、それでも見つからなくて

！ 拳句の果てには、除霊されそうになって・・・それでもこうやって、お前に会いに来たんだぞ！？」

自分より身長の高い慎治に掴みかかったまま、和輝は怒鳴る。

「それなのに　それなのに会わなかった方が良かったなんて、何ふざけた事言ってるんだよ！」

静寂が訪れる。

葵も雪乃も可奈子も、慎治でさえも何も言わなかった。・・・いや、言えなかったの方が正しいだろうか。

葵は、こんなにも烈火の如く怒った和輝を見るのは初めてだった。初めて葵と会った時でさえ、ここまでではなかった気がする。

和輝は、舌打ちをすると、それでも無表情のままの慎治を放した。そしてそのまま、駅の方角へと歩き出す。

あ、キンパツくん！？

雪乃と可奈子が、慌てて和輝の後を追う。葵もそれに続こうとした時、慎治の座り込んだコンクリートに、黒い染みがはたりと出来るのを葵は見た。その染みは2つ、3つと増えていく。

空は雲ひとつない快晴。

慎治は俯いており、その表情はわからなかったが、その染みを作り出したのは慎治に他ならなかった。

\*\*\*

揺れる電車内では、葵たちはそれぞれがシートに腰掛けていた。昼下がりの中途半端な時間帯とあって車内にはほとんど人がいない為、雪乃もちやっかり葵の隣に腰掛けている。



「・・・・・・・・」

誰も、ひと言も発しようとしな。何とも言えない気まずさが、この場に漂っていた。

電車が柏木駅に着くまでは、あと15分弱といったところだ。それまでの間、この居心地の悪い空間にいるのは、葵にとって正直キツいものがあった。

何か話題はないものかと、必死に考えを巡らせてみる。

（『サトミちゃん、成仏できたみたいで良かったね』・・・うつん、後味が悪すぎるしなあ）

（『あのお兄さん、ちゃんと家に帰れたかなあ』・・・駄目だ、子供じゃあるまいし）

結局、葵もあの場に慎治を残して和輝たちの後を追ったのだった。

（『それにしても、最初は和輝とあのお兄さんで喧嘩するんじゃないかと思っただよ』・・・って、だああ！ 自分から地雷踏んでどーすんだよ俺！）

心の中で、虚しく自分自身にツツコミを入れる葵。天然の入った雪乃と非常識な和輝との間で過ごすうちに培われたツツコミ魂は、内心にまで作用するらしい。

いい加減自分の会話下手さと話題の少なさに嫌気が差した時だった。

「あ~~~~、くそっ」

そう言っ自分の髪をわしゃわしゃとかき乱す和輝。これは、困った時の和輝の癖だという事を葵は知っている。

そして和輝はみんなの方を向くと、申し訳なさそうに手を合わせる。

「みんな、すまん！　なんか俺一人で勝手にキレて、雰囲気悪くしちゃって……でもさ、あんな事言うなんて、いくらサトミの兄貴でも許せなくて……だから……はあ」

ますます場の空気が悪くなったのを感じたのだろうか、最初は勢いの良かった和輝も、じよじよに声が小さくなり、最後にはがっくりと肩を落としてしまった。

あの場面で慎治に掴みかかるという行動に出たのを、彼は彼なりに後悔しているのだろう。

中学の頃から変わらないよなあ、と葵は思う。喧嘩っ早いが見た目と違って人情に熱い性格なのだ、和輝は。

（あの事、教えてやるかな。そうすれば少しは元気になるだろうし）

あの事、というのは、葵が慎治の元から去る間際に耳にした言葉だった。

ありがとう。

確かに、慎治はそう言ったのだ。葵たちに向かって。

「……私は」

葵が何か言うよりも早く、可奈子が口を開いた。

「片桐さんが言った事は、間違っていないと思いますよ」

きっぱりと断言し、ふっ、と微笑む。その時、葵は心臓が高く鳴ったのを感じた。

そうそう。・・・それに、あのお兄さんも本心では分かってたと思うよ。ね、葵ちゃん？

「・・・」

葵ちゃん？

「え？ あ、うん。そうだな」

「みんな・・・サンキューな」

気まずい雰囲気も解消され、3人は何かを楽しそうに話し始める。しかしその内容は葵の耳には全く入っていなかった。

葵は、自分の左胸を、服の上から手で押さえてみる。

・・・別に、いつもと変わらない。

（気のせい、だよな・・・？）

自分自身に問うてみるも、もちろん答えが返ってくるはずもない。しばらくして、慎治の言葉を和輝に伝えるのを忘れている事に気付いたのだった。

## 第十五話

こつ……これが可奈子ちゃんのお家！？

「ええ。さ、どうぞ」

開いた口が塞がらない葵、和輝、雪乃の3人だったが、可奈子は気にも留めない様子で、車が2台並行して通れそうな幅の門を通った。3人も慌ててそれに続く。

綺麗に掃除された石畳が続き、その周りには、枯れ葉1枚すら落ちていない砂利が平坦に敷き詰められていた。右を見れば丁寧に手入れされた植木が並んでおり、左を見れば池の中を鯉が優雅に泳いでいる。そこは立派すぎるくらい日本の庭園だった。

そして石畳の先にあるのは、庭に見劣りしないほど豪壮な構えの日本家屋だった。平屋建てだが、高さが無いぶん横の広さがかなりある。屋根に看板でもかければ、旅館として使えるんじゃないだろうか、と葵は思った。

「どうぞ入ってください。何もありませんが」

可奈子は玄関の引き戸を開け、雰囲気圧倒されておっかなびっくりの3人を通した。

……これで何も無いのなら、うちはどうなるんだろう。

靴を脱ぎながら、ぼんやりと考える。

そもそも、何故葵たちが可奈子の家を訪れる事となったのか。話は、約1時間前にさかのぼる。

\*\*\*

「葵……俺、マジもう無理だわ」

不気味な薄ら笑いを浮かべた和輝がそう言ってきたのは、サトミが成仏してから1週間後の土曜日だった。普段なら土曜日は学校は休みののだが、この日は進路指導があり、帰りのホームルームが終わってすぐに和輝がふらふらと葵の席にやってきたのだ。

「……霊関係か？」

「よくわかるな……、さすが俺の親友」

よくわかるもなにも、和輝の顔を見れば一目瞭然だった。ただでさえ野生児のような健康的な身体をしている和輝が、風邪や体調不良でここまでなるはずがない。葵は1週間前に比べ見る影もなくなつた和輝を眺めた。

目の下の濃いクマ、げっそりと痩せこけた頬。ただでさえヤンキーのような外見をしているのに、これでは麻薬中毒者のようだ。

「で、今度は何を見たんだよ？」

「……それがさア、あれから毎日夜になると、家にいっぱい出るんだよなア……」

へへへ、と力なく笑う和輝。あれから、というのは、和輝が靈感を身につけた日の事だろう。

「音楽聞いてたらいきなり電源切れるし、部屋の電気を消せば金縛りに合つて子どもやら鎧武者やら……おかげでこの1週間、マトモに寝れなくてさ。ハハハ……」

キンパツ君、相当参ってるみたいだね

そりゃそうだろう、と葵は納得する。

葵は靈感は先天的なものだったから適応も早かったが、和輝の場

合は後天的だし、霊に関してはまったく免疫がない状態である。

靈感を得た当初こそ、『可愛い女の子の霊とか部屋に出てくれりゃいいのに！』などと都合のいい事を言っていたが、今ではこの通り憔悴しきつた見るも無残な姿だ。

「お前の教えてくれた結界も、犬神サンに貰った御札も効果ねえし……もう無理だ、俺には耐えられん」

和輝はガツクリと肩を落とした。

葵の教えた除霊法というのは、部屋の四隅に塩を盛るだけという素人でも出来る簡単な結界の事である。和輝に靈感が身に付いた当初、家にいる時だけでも安らぎたいという和輝に教えてやったのだが、どうやら効果はなかったようだ。

それどころか、あの可奈子に貰った御札まで効かないというのだから、和輝の霊媒体質は相当なものなのだろう。

ん、靈感が消せればいいんだけど。ね、葵ちゃん

その言葉に、和輝の肩がぴくりと反応した。

「いくらなんでもそれは無理じゃないか？ そんな事が出来る人なんて聞いた事ないし」

うーん、やっぱり無理かあ。いい案だと思ったんだけど……  
「それだア！」

突如和輝が大声をあげ、人差し指をビシリと雪乃につきつけた。当の雪乃は訳が分からず、大きな目をぱちぱちと瞬かせている。

「靈感を消せばいいんだ、そうすりゃこの苦悩の日々と永遠にオサラバできる！」

「だからそんな事出来る人なんて、今までに聞いた事ないって。…それにお前、靈感消したら雪乃の姿も見えなくなるんだぞ？」

うわあ俺ってアタマいい、と大はしゃぎする和輝に水を差すのも気が引けたが、葵はいつも通り冷静にツツコミを入れた。

すると、予想通り和輝の動きがぴたりと硬直し、そのままへなへなと机に倒れ伏せる。

「それはダメだあ、雪乃ちゃんと会話できなくなったら、毎日が灰色になっちまう」

じゃ、今は何色？

「モチロン薔薇色だよ」

「阿呆か」

やつれる程ひつ迫る状態になってもなお能天気というか女好きな和輝の後頭部に、葵は手刀を喰らわせた。一応体調を労わって、威力は普段より軽めにしておく。

「んな事ばつか言ってる、そのうち死ぬぞ？」

「それは困る。俺の将来も薔薇色だからな」

葵が無言で手刀を構えたところで、それまで思案顔だった雪乃が口を開いた。

まずは、可奈子ちゃんに相談してみたら？

「……なるほど」

可奈子がこれまでに見せてきた不思議な術により、雪乃と和輝の中では『霊の事なら可奈子』という図式ができているようだった。

確かに、同じく霊感を持つ葵としても、霊を成仏させたり、口寄

せをしたりなどという芸当は到底出来ない。

何度か可奈子にどうやったのかを尋ねてみた事もあったが、全て曖昧に流されてしまったし、自分で考えたところでその仕組みがわかるはずもない。結局のところ、何もわからずじまいというのが現状だった。

「んじゃちよっくら犬神さんに……あれ」

和輝は教室内をぐるっと見回した。葵もそれにならうが、教室では5、6人の生徒がそれぞれ放課後のおしゃべりに興じたり、暇そうに携帯をいじるだけで、そこに可奈子の姿はなかった。

「いないな」

もう帰っちゃったのかな？

「……葵、犬神サンに電話かけてみてくれ」

諦めるかとも思ったが、和輝はそれでも引き下がらなかった。

葵は軽く嘆息すると、携帯を取り出して可奈子の携帯に電話をかけた。数秒の呼び出し音の後、通話モードに切り替わる。

『水城さん、どうかしましたか？』

『えっとさ。今、どこにいる？』

『今ですか？ 学校の美術室ですけど』

「美術室？」

その時、和輝が通話中の携帯電話を葵から奪い取った。

「あ、おい！」

「もっしもし、犬神サン？ そ、オレ。ちよっと今からソッチ行くからさ、待っててね。うん、うん。じゃね。」



さっきまでの麻薬中毒者のような状態とは180度変わって、和輝はいつもの軽薄そうな調子で電話を切った。これで万事解決したと思っているに違いない。電話の向こうで、いつも以上のテンションの高さに戸惑ってる可奈子が容易に想像できた。まったく現金な男である。

葵たちは、和輝に引っぱり張られるようにして美術室へ向かった。階段をぐるぐると下り続け、1階の美術室に到着する。

開け放してあった扉から室内を覗き込むと、そこには、1人椅子に腰掛けてスケッチブックに何かを描き込んでいる可奈子の姿があった。彼女の前に置かれた机には石膏で出来た女性の胸像が置かれており、彼女はどうかやらそれをスケッチしているようだ。

可奈子ちゃん

雪乃が呼びかけると、可奈子はこちらに気付いたらしく、3人を美術室へと招き入れた。中には可奈子以外誰もいない。

「犬神サン！ 靈感消す方法ってないの！？ 出来れば雪乃ちゃんの姿は見えたまま」

「え？ 靈感を、雪乃さん以外？」

開口一番に発せられる唐突な質問に目を丸くする可奈子だったが、和輝が経緯を説明すると顎に手をあてて考え込んだ。

しかし、

「うーん、私ではちょっと難しいですね」

「そ、そんなぁ……」

返って来た答えに、和輝はがっくりと肩を落とす。

さすがに可奈子ちゃんでも無理かあ

「ええ……ですが、祖母に聞いてみれば何とかなるかもしれません」  
可奈子ちゃんの……おばあちゃん？

「はい、私よりすごいですよ。色々と」

にやりと不敵な笑みを浮かべる可奈子。

そして可奈子は今から自分の家に来るように提案し、話がとんとん拍子に進んだというわけだ。

\*\*\*

玄関を上がると、廊下の向こうから小柄な女性がぱたと音をたててやってきた。

「お帰りなさい、可奈子さん……ってあら、お客様ですか？ 珍しい」

長い髪を後ろでまとめ、地味な色の和服にフリルのついた白いエプロンをつけたその女性は、葵と和輝を交互に見やると、恭しく頭を下げた。どうやら雪乃の姿は見えていないようだ。

可奈子の母親かと思ったが、それにしても年が若いように感じる。見た目は22、3といったところだろうか。

「北里さん、あとで客間までお茶を持ってきてくれませんか？」

「かしこまりました」

北里と呼ばれた女性はもう一度、今度は軽く頭を下げた。可奈子が葵たちを促して廊下を進む。葵は北里さんの横を通る際、軽く会釈すると、北里さんも会釈を返してきた。さっきの可奈子とのやり

とりの様子からして、恐らくお手伝いさんか何かだろう。生のお手伝いさんを見たのなんて初めてだ。

長い廊下を渡って通されたのは客間のようだった。8畳くらいの広さで、中央には木製の低いテーブルが置かれており、その周りには座布団が4枚敷かれている。葵たちは座布団の上に腰を下ろした。

さっきの人ってお手伝いさん？

「ええ。北里さんといって、私が生まれる前からこの家で働いて貰ってるんですよ」

「う、生まれる前からというと……」

「ええ、もう20年近くだったかと」

「……………」

その時、失礼します、という声と共に北里さんがふすまを開けて入って来た。畳の上に置かれたお盆にはお茶と和菓子が乗せられている。葵たちが客間に着いてから5分もしていないのに、物凄く手際が良い。

北里さんがテーブルの上にそれらを並べる間中、葵はつい彼女の横顔をしげしげと観察してしまう。

黒目がちの大きな瞳、小動物を彷彿とさせるふっくらとした頬、きめの細かい白い肌は、どう見ても20代のそれだ。

それなのにどんなに無理をしても35歳は超えているということになる。

葵の脳裏を自分の母親の姿がよぎり、世の中の理不尽さを改めて噛み締める。

……葵ちゃん、今「世の中って不思議だな」とか思ってるでしょ

葵の思考回路なんて、雪乃にはお見通しのようだ。

「いや、その、それはだな、そんな事決して、」

「北里さん、おばあさまはいらっしゃいますか？」

葵と雪乃の会話に苦笑しつつ、可奈子は北里に尋ねた。

一方、雪乃の姿が見えていない北里は不思議そうに首を傾げてから、可奈子の問いに答える。

「先ほどお帰りになりましたよ。現在はお部屋にいらっしゃるか  
と思います」

「そうですか、ありがとうございます」

まだきよとした顔　そうすると、もっと童顔に見える  
をしながら、北里さんは一礼して出て行った。うーん、完璧すぎる  
ほど完璧な女中さんだ。

学生鞆を置いた可奈子は、まずおばあさまに事情を説明してきま  
す、と言いついて客間を出て行った。

残された3人は出されたお茶菓子などに手をつけながら、犬神家  
と庶民の財政の違いについての話題で盛り上がった。このような話  
題が出るのも庶民である所以なのだろう。

和菓子は甘く、緑茶は熱く渋かったが、セットにするとそれらが  
絶妙にマッチしていて上品な味に納まっているので、甘いものが苦  
手な葵でも美味しくいただく事ができた。

普段、和菓子とは馴染みのない葵でも、これが高級なものという  
事くらいはわかる。三度犬神家と自宅の差を思い知り、「大丈夫で  
したよ」と帰ってきた可奈子に対し、やるせなさを感じてしまう葵  
であった。

「……ところでさ」

誰よりも早く茶菓を完食した和輝は、おもむろに口を開いた。全

員の視線が和輝に集まる。

「犬神サンのおばーさんって、そんなにスゴいヒトなの？」

あ、それあたしも気になってた！

雪乃がテーブルから身を乗り出す。確かにそれは葵も気になっていた事だった。

全員の期待と興味のこもった眼差しが可奈子に集中する。しかし可奈子は、

「会えばわかりますよ」

とにこやかに返すだけだった。

それからしばらくは他愛のない話が続き、出された湯呑み茶碗が空に頃になりかけた頃、可奈子がすくと立ち上がった。幼さの残る顔立ちに、彼女にしては珍しく、悪戯を企てる子供のような表情を浮かべ、一言。

「それじゃあ、行きましようか」

客間を出た4人は、可奈子の祖母のいる部屋へと向かう。

木目の浮いた廊下を歩きながら、葵はこれからお目見えする可奈子の祖母がどのような人物なのか、想像を巡らせていた。

客間で聞いたところによると、生まれつき高かった可奈子の霊力を見込み、霊に関する様々な術 主にお祓いの仕方やお札の扱い方 を教え込んだのが可奈子の祖母だという。

私なんかよりもずっとすごいですよ、と言った可奈子の顔はどこか得意げであり、それだけで可奈子が祖母を随分と慕っているというのが伝わってきた。

葵からすれば、成仏仕掛けた雪乃を現世に留めたり、口寄せを簡単にやってのける可奈子ですら自分とは格の違う存在だと思っていたのに、更にその上がいるとは驚きを通り越して啞然である。

……きっと、そういうオーラが全身から滲み出てるような威厳のある人なんだろうなあ。

葵の脳内では、勝手に『恐そうな人』というイメージが出来上がっていた。

「ここです」

気がつけば廊下は突き当たりであり、葵たちの眼前には何の変哲もない襖が立ち塞がっていた。

それにしても、家の廊下にしては長い距離を歩いた気がする。やはりこの家の広さは見た目と違うようだ。

「おばあさま、入りますよ」

可奈子が襖の向こうに声をかける。

心なしか、襖からは威圧感が漂ってきている気がして、葵は唾を飲み込んだ。横を見ると、雪乃は緊張の面持ちをしており、和輝はそわそわと身だしなみを整えていた。

「どうぞ」

そう返事したのは、意外にも穏やかな声音であった。

実は、そんなに恐い人じゃないのかもしれない。

少しだけ安堵感を感じると同時に、しかし葵はその声に妙な引っかかりを覚えた。

だが、その違和感の正体は何なのか確認する間もなく襖は開かれ、そして、葵は思わず「え？」と呟いた。

悠然と微笑むその人は、決して葵が想像していたような厳格な人物ではなかった。

むしろその逆で、目元に刻まれた深い皺も、真っ白の髪も、口元に浮かぶ自然な笑みも、その全てが流れる小川のような穏やかな雰囲気を出している。

ただ、それらの特徴は、全て葵たちが見た事のある特徴であつたが。

「いらつしゃい」

穏やかな声音で、その人物が3人を迎える。

それでようやく止まっていた時が動き出し、葵は当然の疑問を無意識のうちに呟いていた。

「なんで、先生がここに……………」

葵たちの目の前にいる人物こそ、清泉高校美術科教師・大友タエその人であつた。

## 第十六話

「そう……あの後、そんな事になっていたの」

靈感が身に付いた経緯と、そのせいでその後の生活に支障が出ている事、そして靈感を制御出来ないかというひと通りの話を聞き終えたタエは、頬に手を添えて溜め息をついた。

タエの横に座っているのは可奈子で、客間と同じようなテーブルを挟んで対面しているのは葵、和輝、雪乃。

和輝の説明はあまりわかりやすいとは言えず、葵が所々足りない部分を補っていく形になっていたので、説明をし終えるのにたっぷり30分もかかってしまった。

「その力だつて、私がその日のうちに気付いていれば、そんな辛い思いをする事もなかったのに……本当にごめんなさいね」

「そんなことないス。あの時先生に助けて貰わなかったら、俺、今ここにいないと思うし……それだけで本当、感謝してます」

深々と頭を下げるタエに、和輝はひたすら恐縮している。大人に對して頭を下げる和輝なんて、そうそう見れるものではないので、何だか変な感じがした。

だが、和輝の言っている事は間違っていないと葵は思う。

あの時 和輝が保健室で、清泉高校の生徒だった男の靈に取り憑かれた時。

タエが現れなければ、和輝を守ろうとしていたサトミは濡れ衣を着せられたまま除靈され、気を失ったフリをして和輝の身体に潜んでいた男の靈は誰にも気付かれないうまま、和輝の身体を乗っ取っていたかもしれないのだ。

そのぞつとしない結末を考えると、葵からの感謝も尽きない。



「ありがとう。それと、あそこにいたセーラー服の女の子の事も、お礼を言っておきますね」

葵と和輝は、顔を見合わせた。

「あなた達、あの子を成仏させてくれたみたいで、本当にありがとう。詳しい話は可奈子から聞きました。霊の望みを叶えて成仏させてあげるのは、とても難しい事なのよ。しかも、見ず知らずの子でしょう？ 普通は、そこまでしてあげる理由はないもの」

そう言って、タエは目を細めた。

葵としては、このままではサトミがあまりにも哀れだと思って取った行動なので、改めてお礼を、しかも第三者から言われると、酷くこそばゆい感じがした。それは隣の和輝も同じようで、微妙に居心地が悪そうな顔をしている。雪乃は照れているのか、はにかんだような表情をしていた。

「それで、靈感のお話なんだけれど」

唐突に本題に戻り、それまで和やかだった雰囲気、僅かに緊張味を帯びたものへと変化した。

「靈感の制御は可能だし、もう霊を視ないように力を封印する事もできます」

「え、じゃあ」

「でも」

喜色しかけた和輝を、タエは申し訳なさそうに制した。

「やっぱり、その松下さんだけを視えるようにするのは難しいわね」

.....  
「そんな……どうにかならないんスか？」

無言のまま俯く雪乃を一瞥する和輝の目に、憂慮が込められているのを葵は見た。

「力を制御すれば、自分の意思で松下さんだけを視る事もできると思うわ。でも、それには長期間の訓練が必要だし、何より余計な心配を抱え込む事になると思うの」

「片桐さんの体質の事ですね」

タエの言葉を引き取ったのは可奈子だった。

キンパツ君の            って、あれ？    保健室で話してたやつ  
「そうです」

中1の時の臨死体験が原因で、和輝は霊に取り憑かれやすくなっている。

男子生徒の霊を抜った後、保健室で可奈子から聞いた話だ。そのせいで、和輝は男子生徒の霊に憑依されそうになった、と。そう言えば、あの時和輝はまだ気を失っていたのだった。

完全に状況についていけない和輝にそれを説明すると、和輝は心底驚いたような表情をした。知らず知らずのうちに、自分がそのような体質になっているとは思っても寄らなかったのだろう。

「でも、なんでそういう体質だと靈感持ってたらマズいんだ？」

「霊に取り憑かれる危険が増えるからです」

「……そうなのか？」

横を見ると和輝と目が合ったので、葵は頷く。

「普通、霊ってのは『見える』奴を狙うんだ。ただでさえ和輝の場合は霊にとって魅力的な体質な訳だから、その分和輝の身体を乗っ取るうとする霊は増えると思うよ」

「そついうことです」

保健室の時は可奈子やタエが近くにいたので事なきを得たが、1人である際に霊に取り憑かれたら、和輝に憑いた霊を抜う手立ては何もない。

「じゃあその、霊に憑かれやすい体質？ それを直せばいいんじゃないか？」

なるほど、と葵は感嘆した。確かにそれなら何とかなるかもしれない。

しかしその希望の光に影を差したのは、可奈子の横で静かに話を聞いていたタエだった。

「魂と肉体の『ずれ』を直すのはもちろん出来るし、肉体を強奪しようとする霊は減ると思うわ。でもね、それを差し引いても、急に霊が視えるようになるのは危険なことなのよ」

「……………どうしてスか？」

「彷徨っている霊はね、常に救いを求めているのよ。この世を恨んで死んでいった霊も、自分が死んだ事に気づいていない霊も、根本的には死んでもなおこの世に捕らわれている苦しみから解放して欲しいと思っっているわ。……………あなたは、その声に耐えられる？ 彼らに対して何もしてあげられないのに、魂の救済を求める彼らの声を聞き続ける事に」

喋り方は先ほどと何ら変わらないのに、質量だけが倍になったかのようなタエの声が、しんとした部屋に響いた。

雨戸1枚を隔てて聞こえてくる雀たちの鳴き声が、どこか遠い世界の出来事のように感じられる。

ここに一週間でそれなりに覚えがあるのか、和輝は拳を固く握り締めて俯いている。だが、それは紛れもない現実であった。葵と和輝、無力な者にとっては、特に。

「……でも、靈感の制御は出来んだよね？」

「出来ない事はありません。ですが、最低でも数年間は修行が必要になりますし、その間は寺院などに籠らないといけませんよ」

「だったら、卒業してから」

「その間に何かあつたら、意味がありませんよ」

もっともな意見に返す言葉が見つからないのか、和輝は俯く。

そんな和輝を直視できなくなり、葵は逸らした。

和輝にとってベストの選択を薦めてくれている2人に意見までして、彼が靈感にこだわる理由。

幽霊になってからの雪乃にとって、会話のできる友人は生前の何倍もの価値を持つ。そしてここで靈感を消す事は、雪乃の姿を視認出来なくなるという事。

和輝は自分の身よりも、雪乃を案じているのだ。

和輝自身はそんな事一言も言わないが、和輝が情に厚い奴だと知っている葵には手に取るようにわかる。

だからこそ、本来自分が言うべき言葉を全て可奈子に言わせてしまった罪悪感に駆られながらも、葵は、2人の応酬に口を挟む事が出来なかった。

和輝の身が心配なのと同じくらい、雪乃にこれ以上の辛苦を味あわせたくない。

場に下りた気まずい沈黙。永遠に続くかと思われたそれは、しかし明るい声音で遮られた。

なら話は早いよキンパツ君、靈感消してもらおう！

全員の視線が、雪乃に集中する。

「雪乃……」

それが一番安全で確実な方法なんですよね？

雪乃の問いかけに、タエはゆっくりと頷く。

ならホラ、やってもらうしかないって！

「でも、それじゃ雪乃ちゃんが……」

あたし？

雪乃は一瞬だけきよとした後、すぐに春暖のような笑みを浮かべた。

あたしは大丈夫だよ。それよりもキンパツ君がまた取り憑かれたら怖いし……あたしの事は気にしないでいいよ。ホラ、何だったら葵ちゃんを介してお話できるし

あわあわと胸の前で手を振る雪乃。

だが、それでも腑に落ちないといった表情をしている和輝に、雪乃はそれまでと全く同じ口調で告げた。

それに、葵ちゃんに憑いた時から覚悟はできてるしね

思いも寄らない突然の告白に、葵ははっと顔を上げる。

だから、あたしは大丈夫

そう断言して屈託なく笑う幼馴染みの笑顔が、一瞬だけ酷く寂しいものに見えたのは葵の見間違いだろうか。

和輝は迷ったように自分の指を弄んだりしていたが、やがて決心したように短く息を吐いた。

「わかったよ。雪乃ちゃんがそう言うなら、俺はそれでいい」

ホント!?

「和輝……」

「ま、その分、葵にはバリバリ働いてもらっけどな。通訳者としてよろしくね葵ちゃん

「さいですか」

可奈子だっているだろうに、晴れて雪乃専門通訳機に任命された葵の脳裏に、更に右肩下がりを続けるであろう成績の事がよぎる。

（でも、まあ）

雪乃と和輝、2人が納得して丸く収まるというのならそれでいいし、その為に自分出来る事があれば、協力は惜しまないつもりだった。

それに、葵にとって成績など今更気になる程度の問題ではない。受験生としてどうかという気もするが、それはこの際丸めて見えない位置にでも置いておこう。

今思えば、葵はいつも雪乃に助けられてばかりいた気がする。学校の宿題を忘れた時も、いじめられている葵を庇ってくれた時も。

その雪乃が、こんな事になったからとはいえ自分の傍にいたいと思ってくれた。

不純物のない宝石のような想いが、ただ嬉しい。

だから、自分としてはその想いに応えてやりたかった。

\*\*\*

挨拶してタエの部屋を出た葵たちは、最初に通された客間に戻ってきていた。

テーブルの上には、新しく北里さんが淹れてくれたお茶とお菓子が置いてある。

とは言っても、この場に和輝の姿はない。

彼は今、タエに靈感を消して……というか、封印してもらっている最中だ。

どうやって封印するのかタエに聞いてみると、皺の刻まれた顔に茶目っ気のある笑みを浮かべて「それは企業秘密なの」との返答だった。この辺り、血の繋がりというものを意識せずにはいられない儀式　そうタエが呼んでいた　自体はそんなに難しいものではないらしく、30分もすれば完了するらしい。なのでそれまでの時間潰しだった。

「にしても、驚いたよ。まさか犬神さんのお祖母さんが、大友先生だったなんて」

「すいません、別に隠していた訳ではないんですが……」

お茶を冷ます葵と対角線上に座る可奈子は、苦笑を交えつつそう言った。ちなみに、さっきまで葵の正面を陣取っていた雪乃は、今は部屋の中をふわふわと漂っている。

保健室での一件を思い返してみると、確かに可奈子とタエは互い見知った感じではあった。今になってみれば納得出来るのだが、

まさか血縁関係だとは。

それに、可奈子ちゃんとは苗字も違うしね

「大友姓は、祖母の結婚前の苗字なんですよ。当時から教師をしていた祖母は、わざわざ定着している名前を変える事もないだろうという思っで、学校では大友姓を名乗り続けたそうですよ」

……って事は、大友先生ってずっとあたしたちの学校に勤めてるの！？

「そうなりますね」

大まかに考えても、三十年以上はこの学校にいるという事だ。まだ経験した事のない長い年月に、葵は密かに尊敬を覚える。

それにしても、現代とは違い女性の地位がまだ確立していなかった時代に、よく結婚後も婚前の姓を名乗ったり、そのまま働き続ける事が許されたものだ。やはり、土地ならではの権力のようなものが存在していたのだろうか。

……ねえねえ、ところでさ。この絵ってもしかして可奈子ちゃんが描いたの？

見ると、さっきまであちこちを浮遊していた雪乃が壁の一点の前で静止していた。

言われるまでまったく意識していなかったが、そこには額に納められた一枚の風景画が掛けられていた。

「ええ……そうです」

「え、これを犬神さんが？」

もっと近くで絵を見るために、立ち上がり雪乃の隣に並ぶ。



「え……………これを、犬神さんが？」

発した言葉が先ほどと全く同じ台詞だという事に、葵は気づかなかった。それくらい啞然としていて、気づく余裕がなかった。

砂場にブランコ。それからキリンを模した滑り台。

水彩で描かれていたのは、どこにでもありそうな公園と、3人の人物だった。

砂場では城の建造の最中なのだろう、幼い女の子と男の子がシャベルを片手に土をいじっている。よほど熱中しているのか、2人は頭から足の先まで土で汚れているが、泥にまみれたその表情だけはきらきらと輝いていた。

そして砂場からそう遠くないベンチに腰掛ける女性は、恐らく子どもたちの母親なのだろう。真っ黒になった2人を叱ろうともせず、慈しむような視線を2人に送っている。

ベンチの前にはシートが広げられていて、そこにはバスケットが置いてある。きっと、近所の公園に散歩がてらピクニックに来たのだろう。

ただ、どこにでもありそうな公園と親子の姿を描いただけの絵なのに、心の琴線に触れる暖かさが、そこには描かれていた。ふんわりとした水彩画なのに、一瞬絵だという事を忘れてしまうようなりアルさがそこにはあった。

ふと右下に目をやると、小さくK・Iとのイニシャルが添えられていた。なるほど、雪乃はこれを発見して可奈子に尋ねたんだろう。

「……………この絵、私が2年生の時に描いたんです」

葵を現実に戻したのは、すぐ近くから聞こえた可奈子の声だった。可奈子はいつの間にか葵の隣、肩が触れそうな距離に移動して、一緒に絵を眺めていた。今までにないその近さに、葵の心臓がはねた。身長差がある為、葵の表情が可奈子に見えなかったのは救

いだ。

「県の大会で最優秀賞をとったんですよ」

お、可奈子ちゃんが自慢？ 珍しい

「趣味を誉められると人間得意になるものですよ」

そういえば可奈子ちゃんて美術部だったよね。あたし、他にも可奈子ちゃんの描いた絵見たい！

「でも、家にははスケッチブックくらいしかありませんよ」  
いいからいいから！

「うーん……あんまり期待しないで下さいね」

可奈子が出て行くと、その場に残されたのは葵と雪乃だけとなった。

可奈子ちゃんてスゴイねー、これぞ才能、って感じ

「そうだな」

あたしもこんな綺麗な絵が描けたらなー。あたし、美術ってどうも苦手なんだよね

「そうなんだ」

うん、色の使い方がどうも……

「雪乃」

あの時点で話は完結しているが、葵としては聞いておかずにはいられなかった。

話を遮られ、きょとんとしている雪乃。表情も声音も、普段と変わらないように見えるが、しかし。

「本当にあれでよかったのか？」

え？ あれって、何が？

「和輝の靈感のこと。覚悟出来てるって言ってたけど、でも」

しょうがないよ。葵ちゃんも、キンパツ君がまたあんなコトになつたらやでしょ？

「それはそう、だけど……」

和輝じゃなくて、雪乃自身はどうなんだ？ 覚悟が出来てるって。

しかしその問いかけは、口に出そうとした瞬間に襖の音に遮られた。

「お待たせしました。とりあえず最近のから3冊ほど持って来ましたよ」

半身ほどもある黒塗りのスケッチブックを抱えた可奈子が、襖に手をかけた状態で立っていた。

「え。あ、あのー……もしかして、お邪魔でしたか？」

2人の視線を真っ向から受け止めた可奈子が、恐る恐る尋ねる。

うつん、全然！ 大した話じゃなかったし

「そ、そうですか？」

それより、早く見せて見せて

文字通り滑るように移動しテーブルの一角に座った雪乃に倣い、可奈子も畳の上に腰を下ろす。

「雪乃」

ほら、そんなトコにつつ立ってないで葵ちゃんもおいでよ

何だか釈然としなかったが、暗にこの話題は終わりだと言われて

いるような気がして、葵もそれ以上は追求せずに指示に従った。雪乃と可奈子が向かい同士に座っていたので、どちらの隣に座るか逡巡し、結局雪乃の隣に落ち着く。

「ほとんど鉛筆画だし、上手いとは言えないものばかりですが……」

そう前置きして差し出される分厚いスケッチブック3冊。どれも角が削れていたり傷ついていたりして、相当使い込まれていたであろう事が読み取れる。

葵はそれを受け取り、若干緊張しながら紐を解き、表紙を開く。

おおっ！

「うわ……すげ」

1ページ目には、美味そうに熟した林檎が『あった』。白と黒の2色でありながらも瑞々しさを感じさせ、なおかつ、絵ではなく、本当の林檎を見ているかのように立体的なのだ。

単純なモデルながら、葵の目は林檎の上を何往復もさせられた。しかし決して飽きることはなく、雪乃が次のページをめくるように指示するまで魅入られたかのように見つめ続けていた。

2ページ目は静物ではなく、動物 1匹の猫が寝ている絵だった。猫の他には何も描かれていないが、細い目を更に細めた満足そうな表情や光の加減から、食事後に日向で昼寝でもしているのだろう。

それから葵と雪乃は無言で、時には息を呑み、感嘆の声を上げながら絵画鑑賞に没頭した。1冊目のスケッチブックには鉛筆画の静物や生き物の写生が多かったが、たまに風景画や彩色画などが収められていた。

可奈子の絵を一言で表すのだとしたら、『物語』が適切だろう。

1枚の絵から色や味、その時の状況など、様々な情報が読み取れるのだ。それは言葉を使わない本を読んでいるようなものだ。葵は美術に關してはからきしだが、時には緻密に、時には雰囲気重視して描かれている可奈子の物語に次第に引き込まれていくのを感じた。やがて時計の長針が半周をした頃、葵は1冊目のスケッチブックの最後のページをめくり終えた。ほう、と息をついて葵と雪乃は余韻に浸る。

「あの……どうでしたか？」

2人が何も言わないのを不安に思ったのか、可奈子が切り出す。

「ごめん、なんか……すぎてコメントができない

「うん。すごい才能だと思う」

本当はもっと気の利いた事が言いたかった葵だが、雪乃の言うとおり胸が一杯で、その感想の9割すら言葉にできないという情けない体たらくだった。しかし、それだけでも満足なのか可奈子は安心したように嘆息した。

「そうですか……良かったあ。お二人とも何も言わないから、そんなに酷かったのかと思っちゃいましたよ」

そんなことを言うやつは、きっとピカソとかルノワールに違いない。

ちょうどその時、廊下に通じる襖が再び開かれた。そこに立っているのは、混じりけのない金髪と銀髪という漫画のような組み合わせ  
和輝とタエだ。

「ただいま、って何見てんだ葵」

「あら、可奈子が描いた絵を人に見せるなんて珍しいわね」

「いえ、そんな事は……」

「犬神サンが描いた絵？ マジ？ 俺にも見して」

即座にテーブルに着こうとする和輝だが、その口からひき潰された蛙のような声が漏れた。タエが和輝の襟首を掴んで阻止したのだ。

「こらこら、せっかちなのもいいけど、その前に確認しなきゃいけないことがあるでしょう？」

老人とは思えぬ力技を繰り出しておきながら相好を崩さないタエに、和輝は咳き込みながら謝る。

「失敗はしてないと思うけれど、念のためにテストをするわね。さて和輝君、この部屋のどこに雪乃ちゃんがいるでしょう？」

要するに、靈感が本当に消えているかどうかのテスト、という事だった。今雪乃がいるのは葵の隣、テーブルの前。和輝は悟りの境地に達した僧侶のような静謐な眼差しに、校内で密に行われている賭けトランプ以来の真剣さを湛えていた。

まさか、まだあたしの姿が視える、ってコトはないよね？

葵は、和輝にはわからないようにほんの少しだけ顎を下げた。しかし実際のところ、どちらの意味で頷いたのかは自分にもわからなかった。

そして獲物を探す鷹のように巡らせていた和輝の視線がある一点に定められ、射抜くような眼光は鋭さを増す。そして右手がゆつくりと持ち上げられ

「そこだ！」

葵の、雪乃の、可奈子の、タエの、8つの瞳が一樹の指した一点に集中する。

そこにいたのは

猿の置物だった。

「ああ良かった、失敗はしてないみたいね」

「あと2メートル南の方角だったら合ってたんですけどね」

葵ちゃん……………あたし、猿？ 猿なの？

「たまたまだと思うけど、何なら怨念でも飛ばすといいよ」

「え、俺心の目で見ただけ。違うの？ 絶対開眼したと思ったんだけど。ていうか葵、さらりと恐ろしいこと言っな」

一瞬とは言え期待した自分が、何かとんでもない大損をしたような気にさせられる。その自信がどこから湧いて出てくるのか、一回精密検査した方がいいだろう。

「それはともかく、これでもう和輝は霊に取り憑かれる心配はなくなっただんですか？」

「そうね、霊を引き寄せる魂と肉体の歪みも取り除いておいたし…

…これでもう和輝君は普通の人と何ら変わらないと言えるわね」

「良かったな、和輝」

「うん、スルーはともかくありがとう葵。あと、大友先生もホント、ありがとうございます」

「いいのよ、元はといえば私の確認不足が原因でもあったしね」

再び頭を下げる和輝の真横に、雪乃はふわりと移動した。和輝の目と鼻の先で手を振ったり、『おいキンパツ君、ほんとにみえないのー？ ねーねーねー、あーいーうー』などとしきりに呼びかけていたが、和輝は一向に気づく気配を見せなかった。雪乃の奇行に

堪えきれなくなつた3人が笑いを漏らす、和輝だけは理解できないというように目を瞬かせている。どうやら、和輝の靈感はタエによつて完璧に封印されたようだ。

「あの、何がおかしいんスか？」

「いいえ、気にしないで。あなたの力が消えたことを再確認してるだけだから」

「？ はあ」

「それよりも、もし良かったら可奈子の絵を見てやってくれないかしら。この子、美術部の部員にすら見せるのを嫌がるのよ」

可奈子は僅かに顔を赤らめたが、拒否はしなかったので、結局タエと和輝を交えた5人で残りのスケッチブックを鑑賞する事となった。

そのどれも、描かれていたのは1冊目に負けず劣らずの絵ばかりで、1枚1枚が丁寧に描き込まれていた。葵と雪乃は先ほどと同じくほぼ無言で見入つたが、意外にも和輝は可奈子と絵の話で盛り上がった。そういえば以前、和輝がデザイナー志望だと言つていたのを思い出す。これまた見た目に似合わず、なかなか和輝の絵は上手いのだつた。

タエはほとんど会話には参加しなかったが、時たま思い出したかのように可奈子の子供の頃の話をするのだつた。その度に止められていたが、当然というか幼少時代の可奈子の情報は3人に流出した。それによると、可奈子は物心ついた時から絵を描くのが好きで、本格的な絵の手ほどきしたのはタエなのだそう。靈感にしろ絵にしろ性格にしろ、やはり可奈子はタエの血を色濃く受け継いでいるらしい。

そして話の花が咲き、気がつけば辺りはもうすっかり暗くなっている時間帯となつていた。



「あら、もうこんな時間。ごめんなさいね、遅くまで……」  
「あ、いえ。それじゃあ僕たちはそろそろお邪魔します」

葵は席を立つて、学生カバンを取ろうと手を伸ばした。そこで改めて今日が土曜日で、学校があったのだと気づく。今日の犬神家での出来事は色々な方向にインパクトがあつて、学校の存在が葵の中で希釈されていた。

「それじゃあ、お邪魔しました」  
すつごく楽しかったです

「大友先生、あと犬神サンも、今日は本当にありがとうございました」

玄関まで見送りに来てくれたタエと可奈子に対し、各々が別れの挨拶をする。

相変わらずデフォルトの笑顔なタエに対し、可奈子はむすっとしたような半眼だった。

まあ、気持ちはわかる。誰だつてクラスメートの前で子供の頃の自分の様子や失敗を語られるのはいいい氣がしないだろう。

……それにしても、犬神さんていつも冷静なイメージがあつたけど、やっぱり子供の頃は違ったんだなあ。

葵の脳裏に、聞いた話で自分的大ヒットだった『可奈子5歳時・クレヨン化粧事件』がよぎる。ああ、顔の筋肉が緩みそうだ。

「いいえ、また来てちょうだいね」

「……………その時はおばあさまがいない時にして下さい」

「ほほほ、この子はもう。雪乃ちゃん、次は可奈子の子供の時のアルバムを見せるわ。今と全然変わんないのよ」

「おばあさま、怒りますよ?」

なんてやり取りをしている2人に見送られ、葵たちは犬神家を後にした。

5月といえども、日が沈んでしまったら冷える。葵が学ランの詰襟をしっかりと押さえつつ人気の無くなった住宅街を歩いていると、隣を歩く和輝がぼつりと漏らした。

「なあ、今も雪乃ちゃんているのか？」

「え？」

思わず和輝の横顔に目をやる葵だが、和輝はこちらを見ようとせず、ただ正面を向いているだけだった。

「……いるよ。俺の隣に」

そう言うつと、和輝は「そっか」と軽く嘆息した。

「何だかさ、わかってはいたけど……ホントに心配すら感じないのな。短い間だったけど、普通に話してたコの姿が急に見えなくなる、つてのは……なんか、寂しーよな」

キンパツ君……

「ま、ここ1週間はすっげえ楽しかったけどな。俺はサトミの兄貴みたくこの事を後悔する気はねえし」

冗談めかして笑う和輝に葵も合わせるが、上手く笑えていたかどうかはわからなかった。

それから何となく、3人は無言で星のない空の下を歩き続ける。家から漏れるテレビの音、団欒の声、夕食の匂い。それらがいつもよりはつきり感じられる。

和輝が取り憑かれてから今日までの1週間ちょっと、色々な事がありすぎてあっという間だった。

サトミを成仏させたこと、葵と雪乃、可奈子というグループに和輝が加わったこと、昼食を4人で食べたこと。そして何より一番なのが、和輝に対する後ろめたさが消えたこと。

その上、いつか話すことはあっても絶対に理解してはもらえないだろうと考えていた、霊を視る上での苦悩と苦労を語り合える日が来るとは思ってもいなかった。

男子生徒の霊。和輝の体質。サトミ。タエ。可奈子。

……何だか、本当に偶然なのかと疑ってしまうような巡り合わせだ。

そしてその巡り合わせに一番救われたのは、他でもない自分だった。

「じゃあな葵、また月曜に。雪乃ちゃんも、また」

「え……」

気がつくと、いつの間にか分かれ道に差し掛かっていた。通りを真っ直ぐ進めば葵の家、右に伸びる小道を行けば和輝のアパートがある。

葵の返事を待たずに道を曲がる和輝。切れ掛かって明滅を繰り返す街灯がその背を照らし、学生服の陰影を照らし出していた。

「あ、あのさ！」

葵は無意識のうちに、その背を呼び止めていた。すると和輝はぴたりと停止し、肩越しに振り返る。

しかし声をかけた本人の方はというと、何を言つか考えていなかった。で内心では焦っていた。

しかし呼び止めたからには何かを言わなくてはならず、長時間無言でいることもできず

咄嗟に口から出たのは、

「俺、頑張るから！」

「え？」

「その、雪乃の通訳。だから……ぜんぜん普通に、喋れるように頑張るから、だから……その、何ていうか………」

途中から何が言いたいのかわからなくなってしどろもどろになり、ついには尻すぼみになって言葉は消えた。

ああ、何で俺はこういう時にハッキリと言葉に出来ないんだろう。いくら現国の成績が悪いつていても、これじゃあ酷すぎるんじゃないか？

しかし、しばらく珍しいものでも見たような顔で葵のことを凝視していた和輝だったが、ふいに小さく微笑んだ。

「おう、期待してるわ」

そして片手を挙げてひらひらと振ると、再び背を向けて歩き出す。彼の姿が見えなくなるまで、葵は和輝を見送った。

……帰ろつか、葵ちゃん

「そうだな」

そして葵と雪乃は並んで、すっかり暗くなった帰路を進む。周囲には人影はなかったので、葵は人目を気にせず雪乃と会話をすることができた。

最後のキンパツ君、キザだったね

「片手だったもんね。しかも振り返らずに」

でも、サマになってたね。葵ちゃんとは違って

「……………」

一言も反論できないのが、同じ男として非常に哀しい。しかし、自然と葵は笑みをこぼしていた。

「また成績下がるなー、授業も全然聞いてないし」

大丈夫だよ、いざとなったらあたしが誰かのをカンニングしてあげるから

「…………その行為は人としての道德心に著しく欠ける気が…………」

他愛のない話をしながら、非凡な才能を持った平凡な少年とその幼馴染の少女は並んで歩く。

靈感のある葵と幽霊の雪乃、そして一般人の和輝。1週間前と同じ状態に戻ったが、全てが同じという訳ではないのだった。

## 第十七話

5月も残り僅かとなる頃。道路に残っていた桜の花びらは先日の雨で全て流され、街からはついに春の名残が消えた。その代わりに豊かに生い茂った木々の葉は、まだ足りないと言わんばかりに重そうな枝を伸ばし、日の光を貪欲に受け止めている。

今年に入ってから最高気温を大幅に更新しただけあって、駅前では多くの人々が薄着で歩いていた。中には、一足早く半袖で駆け回る子供の姿も見える。

しかし、日差しは強いものの、気候自体はカラリとしていて過ごしやすく、思わずどこかに出かけたくなるような気分させられるような1日だ。

そして、その快晴の中をどんよりとした負のオーラを纏って歩く少年の姿があった。

葵ちゃん、元気出して。中間テストは補習がある訳じゃないし

「……それにしたってあの点数は……」

葵の脳裏に、思い出したくも無い数字の羅列が蘇る。48、55、

24……

「あああああ！」

葵ちゃん！？ ちょっと落ち着いて！

道端で頭を抱え身悶えを始めた葵を、通行人は奇異の目を向けながら避けて歩いていく。しかし当の本人はそれに気づかない。というか、気づく余裕などなかった。

先週1週間をまるまる使って行われた中間テスト。その結果が、今日になって一斉に返ってきたのだ。

ほぼ雪乃との筆談に費やしていて授業の内容を何も覚えていなかった葵は、テスト1週間前になって謝り倒しながら可奈子にノートのコピーを取らせてもらった。しかし1カ月半分の内容をたった1週間で取り戻せるはずがなく。

結果、どの教科でも17年間生きてきた中でダントツトップの点数を叩き出した。勿論最下位という意味でのトップだが。

「……やっぱり、バカの一夜漬けなんかじゃタ力が知れてるよなあ。まともに勉強し始めたのがテスト一週間前な時点でまず終わってるし」

商店街のショーウィンドウに映った自分の顔を見ると、遠くからでもはつきりとわかるほどのクマが浮かんでいた。連日徹夜までしてこんなクマをこしらえた意味が果たしてあったのか、と考えると、何だか果てしなく自己嫌悪に陥りそうなのでやめておく。

「期末はちゃんと勉強しておかないとなあ。本当に全教科補習とかになったら洒落にならない」

むう……ごめんね葵ちゃん。あたしとおしゃべりしてたばかりに

雪乃は、この2週間で何十回と聞いた台詞を再び繰り返した。おしゃべり、というのは授業中の筆談のことだ。

「それはもういいって何っ回も言ったろ。好きでやってたんだし、もっと早くから勉強しとけば良かっただけの話だし」

ありがと。でも、あたしならカンニングし放題だったのに

「……あのなあ、俺はそんなセコいことまでして点欲しくないっての」

偉いねえ、さすが葵ちゃん

「ま、まあな」

口では偉そうなことを言うものの、情けなさど焦りに追い詰められていた1週間前の葵が誘惑に負けそうになったのもまた事実だ。

しかし結局人としての一線を踏み止まれたのは、ただ単に彼にそんな度胸がなかったからである。

「今更悔やんでも仕方ないし、期末でどうにかするよ。その代わりに、これからはちよつと筆談は減らすぞ」

はい。あたしのせいで葵ちゃんが暑中補習受けるのもやだし、ここは我慢するよ

「よしよし、偉いぞ雪乃」

わーい、誉められたー

「……なんだか犬みたいだな、お前」

浮いているせいで葵より若干高い位置にある雪乃の頭を撫でる振りをすると、彼女はくると宙返りをして喜びを表現する。きつと尻尾があつたら千切れんばかりに振りしきっているに違いない。

こうして雪乃と軽口を叩き合っていると、地上に帰還する潜水艦のように沈んでいた気分が浮上してくる。

駅前を通過した葵たちは、夏の気配を含み始めたのどかな住宅街を、家に向かって歩く。平日の昼間ということもあり、買い物帰りの主婦以外にすれ違う人はほとんどいない。葵がいつも帰宅する頃には、帰路につく会社員や学生をよく見かけるので、何だか変な感じだ。

清泉高校では、テスト返却日には授業を行わないので昼には下校になってしまふ。普段とは違う人気のない住宅街を歩いていると、今更ながら長かった苦行を乗り越えたんだという実感が湧いてくる。それと同時に、なんだか胸が躍り始めるのを感じる。日常の中の非日常、台風で休校になった時の、あの開放感とわくわく感に似た感



覚。空も快晴で、雲1つない。こんな日は、インドア派の葵もここに出かけたくなくてくる。

「……雪乃、どっか行こうぜ。せっかく半ドンで終わったんだし」  
ホント！？ 行く行く！

遊びに誘っただけで期待に目を輝かせる雪乃に、やはり犬のイメージが重なる。……そうだなあ、どっちかというと雪乃は小型犬かな。犬にはそれほど詳しくないけど。

ぼんやりとそんな戯言を考えていると、うん？ と雪乃が小首を傾げた。それにより、葵は自分がずっと雪乃の顔を見つめていた事に気づき、慌てて話題を振る。

「な、なんでもない。それより、どっか行きたい場所ある？ あんまり遠い場所は困るけど」

立ち止まってそう尋ねると、雪乃は んー と考え込んだが、やがてぽんつと手を打った。

すいぞくかん！

\*\*\*

同日の午後1時10分。

幼馴染のリクエスト通り、葵は水族館の前に立っていた。正確には、色褪せた文字で『瀬尾マリンパーク』と書かれ、塗装のはがれかけたマンボウやらタコやらがあしらわれた、ヒビの入ったピンク色のアーチの前、である。

葵の住む柏木市の2つ隣の瀬尾市にあるこの水族館までは、電車で僅か4駅。町から少し外れた郊外にぽつんと建っている。観光客

よりも地域住民にスポットを当てた小さな水族館で、県内にある小学校の生徒ならほとんどが一度は遠足で来た記憶を持つ。葵もその例に漏れず、小学校2年生の時に訪れた覚えがあるが、それ以来だ。あの頃から綺麗とは言いがたかったが、10年ぶりに見た外装は予想以上にくたびれて見えた。

「うつわー……よく潰れてなかったな、ここ」

何言ってんの葵ちゃん。ほら、早く早く

雪乃は妙な感心をしている葵を置いて、さつさとアーチをくぐってしまふ。葵も慌ててそれに続いた。

アーチから15メートルほど進むと、見覚えのある白い建物が佇んでいた。しかし葵の記憶にあるよりも、表面に刻まれたヒビが増えているように感じられる。

時間の流れを感じながらチケット売り場へ行くと、中で暇そうにしていたおばさんが物珍しそうに葵に目をやった。

「あなた、高校生？」

「ええ、まあ」

「学校はどうしたの？」

「今日はテスト返却日だったんで、昼下校なんです」

お節介そうな人だったのもつと詮索されるかと思ったが、おばさんは葵の返答に納得したらしく、それ以上は何も聞かずに『学生は千円ね』と事務的に告げた。家に帰らずに学生服のままで来たのが功を奏したようだ。

家に帰ると、お母さんにテスト見せなきゃいけないもんね

……どうしてこう、この幼馴染は毎度毎度痛いところを突くん

ろうか。

耳元で雪乃が笑うが、こっちはおばさんがいるので反論もままならない。内心を見透かされて決まりが悪くなりながら、葵は財布から千円札を抜いて台に置いた。

普段貰える小遣いのことを考えると千円というのは決して軽い出費ではないが、どうせ買うのは漫画やCDばかりなのだからたまには構わないだろう。

……それに、雪乃が来たいって言ったんだし。

そう考えると何だかむしろに気恥ずかしくなって、葵は差し出されたチケットをひったくるようにして受け取り、奇異の目を向けるおばさんを後にしてゲートの中へ急いだ。

最低限にまで照明の落とされた薄暗い廊下を進むと、唐突に視界が開けた。

うわあ、魚だよ葵ちゃん！ 早く見よう！

薄暗い館内は、ぼんやりとだが明るかった。扇状のホールの曲線部分一面が水槽になっており、中では地味な色の魚やエイ、大人しい種類のサメなどといった手堅い面々が退屈そうに泳ぎ回っている。しかし海面からの光を受けて室内を海中のようなコバルトブルーに染め上げている様は、なかなか幻想的であった。

葵ははしゃぐ雪乃をよそに、わざとゆっくり歩いて水槽の前までやって来る。

「うつすらと記憶に残ってはいるけど、本当に何にも変わってないんだな」

うんうん、ここに来たの小学校の遠足以来だけど、あの時と一緒にだもん……うわあ、可愛いなあ。エイが笑ってるよ

「遠足の時にもいたよな、そう言う奴」  
どうせあたしの思考回路は小学生ですよ

すねたように頬を膨らませる雪乃は、何だか本当に小学生に戻ったみたいだった。

平日の昼間効果なのか普段からこの調子なのかは定かではないが、ホールには葵たち以外の客の姿はなかったので、周りの目を気にすることなく雪乃と会話することができた。

ふと、葵は眼前の水槽に手をついた。掌からひんやりとした感触が伝わってくる。

空調管理されて適温で、なおかつ深い青に染まったホールの中、アクアリウムを見ている自分。

たまに聞こえる水の音。優雅に泳ぐ魚たち。それらを見ていると、水槽と自分とを隔てているものなど何も無いように感じられる。

……葵ちゃん、何してるの？

急に黙り込んだ葵を見て、雪乃が声をかけた。

「……こうしてると、自分も魚になって海の中で泳いでる感じがするんだ」

えええ？ 葵ちゃん、どうしちゃったの。いきなりそんな詩的なコトを。明日はハリケーン？

雪乃が目丸くして本気で驚いている様子に微妙なショックと気恥ずかしさを覚える。確かにキャラに似合わず、というのは認めるが、そこまで言わなくてもいいんじゃないだろうか。

「ホ、ホントだって！ 雪乃もやってみるよ。ほら

」

本気にしない雪乃に対する歯痒さと、結構恥ずかしいことを平気で言ってしまった自分への照れと、

この感覚を味あわせたいという思いにかられ、葵は傍らに立っていた雪乃の腕に、手を　そう、今までと同じように　伸ばした。

！

しかし次の瞬間、葵の手は空を切っていた。何が起こったのかわからない葵が雪乃に目をやると、彼女は自らの腕を抱くような形で、一步後ずさっていた。その顔は硬く強張っており、能面のように無表情だった。

「……あ。ご、ごめん」

まただ。

葵は、やり場がなくなり居たたまれなくなった右手を下ろす。すると雪乃は一瞬の間に、無表情からはっと双眸を見開き、そして何事もなかったかのようないつもの笑顔に戻った。

行こ、葵ちゃん。確か次は熱帯魚の水槽だよ

「あ、ああ……」

心には決定的な違和感が澱のように沈殿していたが、葵は雪乃の言葉通りに水槽の前を離れた。

すると、最早定位置となった葵の右斜め後ろに、雪乃も納まる。

カクレクマノミって可愛いよね。いるかなあ

「……どうだろうな」

雪乃が普段より一歩分遠い位置にいることに気づいたが、葵はそれについて言及はしなかった。

\*\*\*

雪乃ご所望のクマノミ、王者の風格漂うサメやどこまでもマイペースなウミガメなど、どの水槽も一通り見終えた葵たちは、最初に見た扇形の水槽のあるホールまで戻ってきていた。少し離れた壁際に休憩用のベンチが備え付けられており、そこで足を休める為だ。

まったく、最近の若いもんは体力なさすぎだよ。まだクラゲ見たかったのに

呆れたように腕を組んで浮遊する雪乃に対し、葵は疲れ切った様子で硬いベンチにへたり込んでいた。

「……あの、雪乃さん。誰かさんに3時間もあちこちに引つ張られなければ、ここまでならないとは思うんですが」

誰かって誰だろうね？ あー、もっと見たかったなあ

今の雪乃には何を言っても無駄だと悟った葵は、口を閉ざして体力の回復に努めた。

興奮状態になった雪乃は周りが目に入らなくなるという事は長年の付き合いからわかりきっているし、矢継ぎ早に放たれる感想も適当に流しておけばいいとは思うのだが、それが出来ずに毎回丁寧に返答をしてしまうのが葵だ。

おまけに、こっちは時間の都合で昼食を取っていない。健全な男子高校生たる葵は、朝食の僅かなエネルギーだけで夕方までフル起動できるほど高性能ではなかった。

他に客でもいれば、会話を中断せざるを得ないのだが、相変わら

ず自分たち以外の人影は皆無だった。あまりの閑古鳥の鳴きっぷりに、この水族館の経営状態が本気で心配になってくるほどだ。もつとも、だからこそこうして疲れきるまで雪乃と水槽を回れたのだから、正直なところ嬉しかったりもする。

「俺、ここでちょっと休んでるから回ってきなよ」

先ほどから『もっと見たい』を繰り返している雪乃にそう提案する。すると雪乃は ホントっ？ と顔を輝かせると、今戻ってきたばかりの道を飛んでいった。当分帰ってこない気がするが、それはそれでいいだろう。

1人、暇になった葵は、何の気もなしにそれまで手に持っていたチケットを眺め、そしてチケットのデザインが10年前とまったく変わっていない事に気づいた。

「へえ……懐かしいな」

子供の頃の記憶なんてあやふやなもので、水族館自体の印象は薄いの、このチケットに関してだけはしっかりと記憶に残っていた。長方形の梨のような形をしたどこにでもありそうな入場券。中央に『瀬尾マリnpark』のロゴがあり、その周りに海の生き物のシルエットが散らしてある、という至ってシンプルかつありふれたデザイン。1度見たら忘れてしまいそうなそれだったが、葵の記憶と完全に一致した。

というのも、小学校2年の遠足でここに来た際に、このチケットが原因で雪乃と喧嘩をしたのだ。

葵は、ロゴの右下にいる生き物のシルエットを指でなぞる。

他のシルエットはイルカやカニなど、見れば一発でわかる影だったのに対し、この右下の生物だけは意見が分かれたのだ。

しかし喧嘩をした直後でも、雪乃は自分の傍を離れないでいてく

れた。

当時、身体が弱く学校を休みがちだったのと靈感の事で、クラスから浮いた存在になっていた葵にとって、心を許せた友達は何だっただけだった。

優しい彼女の事だから、そこで葵が1人ぼっちにならないように気を遣ったのだろう。改めて考えると喧嘩直後の小学校2年生の行動とは思えない。

思い返せば学校では雪乃の以外の誰かと一緒にいた記憶はないし、水族館の遠足も、雪乃がいてくれなければ、1人で惨めな思いをしていたに違いなかった。

なんか俺、雪乃に助けられたばっかだなあ。

他にも、朝起こしてもらったりノートを見せて貰ったりなどといった日常の些細な出来事についても、面倒をかけてばかりだ。そして葵の脳裏に、ある光景がよぎる。純白のシート、群生のようなチューブ、そしてそれらの中央に横たわる幼馴染。そして、あんな事になった後でもまだ、自分は雪乃に世話をかけている。

では……………自分の方は、雪乃の為に何かをしてあげられているのだろうか。

日常の些事ならばいくつかは思いついたが、そんなのは葵でなくとも可能だ。しかし、葵にしかできない事となると

あーおいちゃんっ

「うわあっ！」

唐突に背後からかけられた明るい声に不意をつかれ、葵の思考は中断された。

ベンチから腰を浮かしかけた状態で振り返ると、目を丸くした雪乃がいた。



あたし、そんなに驚かせちゃった？

「あ……い、いや、ごめん。ちよつと考え事しててさ」

ふうん？ と小首を傾げた雪乃だったが、深くは追求してこないのはありがたかった。

「それより、もうクラゲはいいのか？」

うん。今日のところは満足したよ

「……そっか」

あれだけ見て『今日のところは』なのか。

そう思った葵だったが、何となく口にする気にはなれず、そのままにしておいた。

すると、雪乃がずっと隣に腰掛け、葵の手元を覗き込んできた。

何見てるの？

視線の先に握られていたのは、先ほどからなんとなく手にしていた水族館のチケットだ。それに気づいた雪乃は喜色を露にした。どうやら雪乃も、このチケットについて覚えていたらしい。その事が塞いでいた葵の心を少し楽にした。

チケットのデザイン、変わってないんだね

「やつぱ覚えてんのか」

そりゃもう。この右下のやつでしょ

雪乃は得意げにシルエットの1つを指差した。

それを機にしばし無言になる。しかし、お互いに何を考えているかは容易に想像できた。

「……お前、今これが何に見えるか考えてんだろ」

そついう葵ちゃんだって

「……俺としては、こいつはどう見てもウツボにしか見えないんだが」

何言つてんの葵ちゃん。こんなにわかりやすいラッコを、あんな蒲焼きと一緒にしないでよ

両者の答えは喧嘩の発端となった10年前と同じだった。常識的に考えれば両者は見間違えていい容姿の生物ではないのだが。

沈黙の中、2人の視線は交錯し 同タイミングで、噴き出した。

「俺ら、こんな事で喧嘩してたのか」

あはは、小学生だったしね。周りからしたら、変な2人組だったんだろうね。すつこいむつすりしてるのに、一緒にいるなんて

「……なるほど、集合の時に俺らを見てた先生の不思議そうな顔は、そついう理由があつたからなのか」

葵ちゃんてほんと変なことばつか覚えてるよね。子供の頃の記憶自体はあんまりないのに

「……ん。まあな」

葵の顔に僅かに影が落ちる。それは彼にとって、あまり触れられたくない内容だった。

雪乃の言う通り、葵には中学校入学くらいまでの思い出がほとんどない。

身体が弱く学校自体にあまり通えなかったのと、頻繁に風邪や肺炎を患つて高熱を出していたので、その前後の記憶が抜け落ちていくせいである。

と、周囲にはそう説明している。しかし実際はそれだけではなかった。

幼く純粹で、それ故にクラスメイトの無邪気な悪意に対して全く免疫のなかった自分。

靈感の為だけに異分子になり悪辣な仕打ちを受け続けた葵にとって、忘却こそが心を守る防衛手段だった。だから今記憶に残っているのは、風邪で入院した病院の長い長い廊下や、小5の時に葵をジヤングルジムから突き落としたいじめのリーダー格の少年の顔、そして水族館での雪乃との喧嘩といった、断片的な思い出だけである。雪乃には、記憶の欠落はいじめが原因だとは言っていないかった。告げたら、きっと彼女はそんなになるまで葵を救うことが出来なかったと自分を責めるだろうから。幼馴染にこれ以上心配はかけられない。それは、葵の昔日からの思いだった。

雪乃が葵の記憶についてを口にする時、彼の胸はほんの少しだけ痛む。自分に全幅の信頼を寄せている幼馴染への罪悪感としての痛み。

「ま、昔のことなんて覚えてたってしょうがないしな。肝心なのは今だよ、今」

……ん。そだね

葵は軽口を叩く。そうする事で、罪悪感から目を逸らす為に。

だから彼は気づかない。

相槌を打つ雪乃が、ひどく寂しげな顔をしている事に。

\*\*\*

犬神可奈子は、意気揚々と学校の廊下を歩いていた。向かうは加奈子の活動拠点とも言える美術室だ。

テスト期間前から取り掛かっていた油絵は、ようやく完成の1歩

手前に近づいていた。うまくいけば、今日中には仕上げまで終わらせることが出来るだろう。

幸い、返ってきたテストの結果も上々だった。特に選択科目の美術では、クラストップの点数を取る事もできた。多くの生徒は美術のペーパーテストなどカード付きスナック菓子のスナック程度にしか見ていないが、美大への進学を考えている可奈子にとっては、主要教科と同等以上の価値があった。

今は放課後だが、今日は午前下校なので時間としてはまだ昼前だ。4階から見える窓の外には絵の具をぶちまけたかのような真つ青な空と、連日の雨のおかげで水溜りのできた校庭、そこを帰宅する生徒たちが覗いている。水溜りには快晴とそこに浮かぶ雲が映りこんでおり、さながら地面を削ってできた鏡のようだった。

油絵に取り掛かる前に、スケッチだけでもしておこうか、と可奈子は思った。先日、葵たちに自分の描いた絵を見せてからというもの、可奈子にはもつと自分の絵を見てもらいたいという願望が生じていた。別に賞賛が欲しいのではない。ただ純粹に、描いたものを『友達』に見せるという行為が楽しかった。

タエも言っていたが、可奈子は他人に自分の絵を見せるのが嫌いだ。可奈子にとって絵は自分の心象を映し出す『鏡』だ。それを他人に見せるという事は、自分の『心』を他人に曝け出すという行為に他ならない。

いくら同じ美術部の部員であっても 普段からほとんど交流がなければ、それは他人と同定義である。

だが葵たちは違う。人との距離を置きがちな可奈子にとって、気兼ねなしに付き合える初めての『友人』だった。それまで意識したことはなかったが、絵を見られても不快でなかったので、自分はきつとこの人たちが好きなのだろうと気づいた。

雪乃は明るく自分とは正反対の性格で、お節介なくらいに人を思いやれる少女だ。

和輝は、最初見た時は絶対にお近づきになりたくないと思ったが、

話してみると気さくで、人情に厚い性格だった。

そして、葵は受身で優柔不断なところもあるが、とても優しい。

……水城さん……。

可奈子は胸の内でその名を呟いた。

雪乃の葬儀で、彼に声をかけたのが全ての始まりだった。

あの時は、死んだはずの女の子がどうして同じ学校の少年の傍に  
いるのかという興味と、少女の苦しむ姿を見て衝動的に話しかけて  
しまったが、こんなに深い付き合いになるなんて思いもしなかった。  
しかし日が経ち交流が深まるにつれて、だんだんと彼のことを考  
える回数が増えていた。恋愛感情ではない、と思う。可奈子は誰か  
を好きになったことがないので、それがどういうものかよくわから  
ない。強いて言えば、仲間意識のようなものだった。

葵と話すうちに、可奈子は彼が自分と同族なのだと悟った。彼も  
また、靈感によってわざわざ見る必要のない、人間の汚泥のような  
悪意を直視してきたのだろう。もちろん本人は口には出さないが。

だから、葵は3人の中でも特別だった。可奈子にとって、親戚以  
外で唯一自分と同じ力を持つ人だったから。

最近、やたらと彼のことを考えてしまうのもそのせいなのだろう。  
本当は今日の放課後に遊びに誘おうとも考えたのだが、部活もあ  
ったし、どこで遊べばいいかわからなかった。それに 可  
奈子は微笑する。それに、遊ぶ相手なら、自分よりも雪乃がいるだ  
ろう。

それを思うと、可奈子の胸を隙間風が吹いたかのような一陣の虚  
しさが掠めた。

死んで誰かに取り憑くというのは、相当強い執着がないとできな  
い芸当である。つまり、それだけ雪乃の葵に対する想いが強いとい  
う事だ。

あの2人ははっきりと互いの意思を確かめあった訳ではないだろ

うが、それでも幼馴染以上の好意を抱いているのはわかる。

死者と生者の恋愛。

それがいかに不毛で残酷か、可奈子は知っている。

霊能者の視点で言えば、雪乃には今の段階で成仏してもらうのが誰にとっても最善なのだ。

しかし、『友達』としての自分が、それを言うのを躊躇わせていた。

そう……別に、今すぐどうにかなる問題ではないのだ。あの2人

特に、葵の気持ちが変わらなければ、それは杞憂に終わる問題なのだ。

葵は、そんなにすぐ心変わりをするような人間ではない。それは可奈子もよく知っている。

だから、大丈夫だ。

いつの間にか、可奈子は美術室の前に到着していた。

一番乗りだったら職員室まで鍵を取りに行かなくてはならない。

ドアの曇りガラスからは中に人がいるかは判断できなかったが、試しにドアノブを回すと、鍵の抵抗に遭う事はなかった。どうやら既に誰かがいるようだ。

部活の人だったら気まずいなあ、と恐る恐る扉を開いたが、中にいる人物を視認すると、可奈子はほっとした。

教員用の机に座って何か書き物をしていたその人物は、可奈子の存在に気づくとにこりと穏やかな笑みを浮かべた。

美術部顧問にして可奈子の祖母、大友タエだった。

「こんにちは、おばあ様。今日は早いんですね」

学校ではタエのことを『おばあ様』と呼ぶことはなかったが、周りに人がいない時は別だった。家族なのに先生呼ばわりは非常に違和感があるのだ。

「ええ。今日は授業はなかったのだけれど、家にいるのも暇でしう。仕事も少し残ってたし、来てしまったのよね」

そう言つてタエは手元の分厚い冊子に目をやる。どうやら学級日誌のようだった。

可奈子は荷物を置いて、通学カバンから愛用のスケッチブックを取り出した。やはり、来る途中に廊下で見た風景をスケッチしておく事にしたのだ。

「あら、またスケッチ？ 最近のあなたは前にも増して描くようになったわね。　　まるで、誰かに見せたいみたい」

微笑のまま放たれた核心を突く一言に、可奈子は内心でたじろいだ。しかし動揺を抑え込み、祖母を意識した微笑みでかわそうとする。

「おばあ様、それは勘違いですよ」

「その割には、スケッチブックをいつも持ち歩いてるじゃない。前は美術室か家に置いていたのに」

「そ、それは……そう、もっと上手くなりたいと思つて！」

「あの子たちに見せるんですものね」

「ち、ちが……」

反論するそばから即座に切り返される。

ついに言い返せなくなつて顔に血液が集まるのを感じると、祖母がいつも以上に相好を崩した。まだまだね、と言いたげな笑いに、可奈子は敗北感を覚えた。今だかつて、タエには口で勝つた試しがない。諦めて準備を再開すると、背後から声かけられた。

「可奈子。わかつてるわね？」

それまでと違う、静かながらも鋭利な響きを孕んだ声音に、可奈子の作業の手が一瞬止まる。脳裏には、先ほどまで考えていた葵と雪乃の姿が過ぎった。

無言のままの可奈子に追い討ちをかけるかのように、夕エの言葉が背中に投げかけられる。

「今はいいかもしれないけど、このままだとそのうち限界が来るわ。それがいつ、どういう形でかはまだわからないけれど………最悪の事態にならないうちに、早めに対処しておいた方がいい事は、あなたもわかっているでしょう？」

淡々と、だが有無を言わせない絶対的な祖母の声は、霊能者としての仕事をしている時のものだった。霊能者としての祖母の言葉に、いつだって間違いはない。しかし、可奈子は返事ができなかった。

「最悪の事態になった場合、私がやるにしろ貴女がやるにしろ、それは強制的な終わりになるわ。そして、その時に一番悲しむのは恐らく、水城くんよ。そして貴女は、きつと自分を責める。」

可奈子……せつかくできた友達を消すなんて、出来ないと思ってるんでしょう。でもね、それは逆よ。友達だからこそ、これ以上状態が悪くなる前に、悪霊になる前に、成仏させてあげないと辛いでしょうけど、2人を説得するのはあなたにしかできない事なのよ」

圧倒的な夕エの言葉は、可能性としての希望を粉々に打ち砕いた。悪霊。

それは全ての魂に共通して存在する危険で、なおかつ非常に堕ちやすい邪の道。

幽霊という、魂がもつとも無防備になる状態の雪乃にも、その可



能性は勿論ある。

「…………でも」

唇をかみ締めていた可奈子が、震える声を絞り出した。

「変わらなければ、いいんですよね」

「前に言ったでしょう。この世に、永遠なんてないのよ」

口の達者な祖母と、常にそれに負かされる少女の図式。

それは、このような時にまでしっかりと、残酷に働いた。

「……………失礼します」

可奈子はスケッチブックとペンケースを手を持ったまま、夕エの顔を見ずに美術室を後にした。

つい道具を持ってきてしまったが、もうスケッチをする気は起らない。少女は、しばらく扉に背を預けて思いつめた顔をしていたが、やがて無言のまま立ち去った。

美術室には、可奈子が入ってくる前と同じく、夕エ1人が残る。

老女は、いつも浮かべている微笑をふっと消すと、深い深い溜息をつく。

「嫌われちゃったかしらね」

寂しげに呟くと、自身の左手にはめられている数珠のようなブレスレットを撫でた。可奈子の手にもはめられているそれは、雑霊から身を守る夕エの手作りだった。

「魂と接触できる、人として生きるのに必要のない力……。やっぱり、ない方がいいのかしらね」

霊能者として天才的な力を持っていたタエの血を、色濃く受け継いだ可奈子。周囲はそれを喜んでいたが、タエは時折考える事がある。

可奈子が幼いうちに、あの力は自らの手によって封印してしまうべきだったのではないだろうか。

あの子は、靈感のせいではなくてもいい苦勞をずっと背負い込んできた。そして多分、これからも。

タエは目を閉じると、再び長く息を吐き出した。

その時、可奈子が出て行ったドアの外で、女子生徒の喋る声が聞こえてきた。それと共に、再び美術室の扉が開かれる。

「あれ、大友先生。こんにちはー」

美術部の生徒が数人、めいめいの荷物を抱えて入ってきたのだった。

「……はい、こんにちは」

大友タエは挨拶を返す。

先ほどとは打って変わったような、いつもの微笑を湛えて。

## 第十八話

『ねえ、葵ちゃん』

しつとりと包み込むようなその声で、葵は我に返った。

それまで真つ暗だった視界が唐突に明度を取り戻し、それに伴い意識もはつきりしたものへと変化する。

まず最初に認識したのは、歩行者用の信号機だった。赤と青が狂ったように点滅を繰り返している。目の前の地面には均等に引かれた白線。それが交差点だと気づくと、認識できる光景は一瞬のうちには広がった。十字の交差点。店のショーウィンドウ。そこに並ぶぬいぐるみ。駅前。街路樹の桜。横断歩道の前に立つ自分。そして、歩道を挟んで正面に立っているのは、制服姿の雪乃。

そうだ、ここは

どくん、と心臓が大きく波打つ。

そこは、雪乃がトラックに撥ねられた交差点だった。

「ゆ、ゆき……」

渴き切った喉から、声にならない声を絞り出す。

それが聞こえたのか、幼なじみは目を細めてにつこりと笑った。

自分たち以外は無人で、信号機はいつまでも明滅を繰り返すという異様な状況。その中で雪野の太陽のような笑顔だけが現実味を帯びていて、葵はほっと安堵する。

『ねえ、葵ちゃん』

彼女は、再び同じ言葉を口にした。同時に、真新しい革靴を履い

た足を一步、横断歩道へと踏み出す。以前、あと1年しか履かないというのにわざわざ新品を調達したと言っていたのを思い出した。コツ、と音が鳴る。

「な、何だよ雪乃。驚かせるなよ」

内心では得体の知れない不安感を感じながらも、葵は一分だけ自分へと近づいた幼なじみを見やる。

彼女は再び、口を開いた。

「ねえ、葵ちゃん」

ぞくり、と肌があわ立つのを感じる。また一步、彼女は自分へと近づいた。違う。何かがおかしい。雪乃は相変わらず笑顔のままだ。葵は気づいた。その笑顔は、先ほどと全く変わっていないかった。

再び、今度は彼女の左足が持ち上がる。背中に汗が滲む。

ねえ、葵ちゃん。

彼女は同じ台詞を繰り返した。抑揚も速度も、録音された音声のように正確に同一だった。

瞬きすらせず葵に定められた眼と、吊り上げられた口の端。笑っているはずのそれは、今では能面のように見えて仕方がない。

葵はその場から逃げようとしたが、震える足は地面に縫い付けられたかのようにぴくりとも動かなかった。そうしている間にも、歪な不気味さを纏った雪乃は着実に自分へと近づいてくる。

嫌だ、来るな。来ないでくれ！

彼は耐えかねなくなつて耳を塞ぎ、目を瞑った。最早、あれを自分の幼馴染だとは考えていなかった。感覚を遮断する事で恐怖から逃れようとしたが故の行動だったが、葵の行動はほとんど意味をな

さなかった。瞼には壊れた人形のような雪乃の笑顔が焼きついていてるし、自分を呼ぶ亡者のような声は掌を通してはつきりと聞こえてくる。

頼むから消えてくれ、お前なんか雪乃じゃない！

『ねえ、葵ちゃん。……………だの』

ふいに、何か別の言葉が聞こえたような気がした。しかし、ノイズが混ざったように不鮮明なので内容がわからない。少しでも恐怖を紛らわせたくて、葵は言葉の続きを聞き取ろうと必死になった。

『ねえ、葵ちゃん。ど……………で、……………だの』

『ねえ、葵ちゃん。どう……………て、あ……………は、……………だの』

段々と薄れてゆくノイズ。鮮明になってゆく内容。そしてそれらが意味を成して耳朵を突いた時、葵はそれに耳を傾けてしまった行いを心の底から後悔する事となる。

『ねえ、葵ちゃん。どうして、あたしは死んだの？』

葵は背筋が凍りつくような錯覚に陥った。

それと共に、何故彼女がこの交差点に現れたかを理解する。責めているのだ、自分を。

忘れ物を取りに行っただけというちょっとした偶然で、雪乃だけが死ぬ形となった。自分があの場にいれば、雪乃を守る事が出来たかもしれないのに。あるいは、一緒に逝ってやる事も。

それを考えれば、彼女が自分を恨んでいたとしても、それは当然ではないのだろうか？

『　ねえ、葵ちゃん』

彼女は再び同じ言葉を繰り返す。しかし、一度それに続いた怨嗟の声を聞いてしまった葵には、もう別の内容にしか聞こえていなかった。

『ねえ、葵ちゃん。どうして、あなただけが生きてるの？』  
こつ、と革靴の音が響く。

『ねえ、葵ちゃん。どうして、助けてくれなかったの？』  
こつ

『ねえ、葵ちゃん。どうして、あたしは幽霊になってるの？』

こつ  
『ねえ、葵ちゃん。どうして？』  
こつ

『どうして？ どうして？ どうして？ どうして？ どうして？』  
テドウシテドウシテドウシテドウシテ  
『

靴音が、止まった。

気の狂いそうだった永劫が嘘のように、辺りには氷のような静寂だけが訪れる。

両の耳を塞ぐ手は汗ばんでおり、歯の根は合わず、がちがちと不協和音のワルツを奏でていた。

……終わった……のか？

目を瞑っているせいで鋭敏になった聴覚に頼るが、こそりとも音はしない。

しかし、足音が止まったという事は自分の目の前にいるのかもしれない。そして、のうのうと生きている自分を満面の笑みで見下ろしているのかもしれない。

じわり、と再び手が汗ばむ。

怖い。あんな雪乃なんて見たくない。出来る事ならずっと目を閉じていたい。

だが、彼女は本当にいるのだろうか。全部見間違いないのか。確かめるには、目を開けるしかない。

矛盾した2つの欲求は次第に大きくなり、葵の中でせめぎあっていた。

そして彼はついに、

(……あれがいたら、すぐに目を瞑ればいい)

耳に蓋をしていた両手をゆっくりと下ろす。無意識に力を込めていたように強張っており、腕の筋肉がぎしぎしと軋む音が聞こえたような気がした。

葵はごくり、と音を立てて、生唾と共に恐怖を飲み込んだ。

迫り来る狂気から自分を守っていてくれた瞼を、恐る恐る持ち上げ、  
徐々に明度の増す視界、そして

眼前には、何もいなかった。

……良かった。消えてる。

葵は安堵の吐息をもらすと、全身からどつと疲れが滲み出た。ぎゅっと閉じていたせいで焦点の定まりきらない目を、何度か瞬かせる。

改めて交差点を見やる。明滅していた信号機が、完全に沈黙している以外は特に変わった事はなかった。

やはり、自分の見間違い

『ねえ、葵ちゃん』

なんの前触れもなく耳元で囁かれたその声に、全身が総毛立った。

「ひ……！」

息を呑み、飛び退くように振り返る。

そこには、たった今大型車に撥ねられたかのように全身が血と傷にまみれた幼馴染が立っていた。

あらぬ方向に折れ曲がった首のせいで逆さに傾斜した顔に、心の底から楽しそうな笑みを貼り付けて。

そして彼女は吊り上げられた口を再び開き

\*\*\*



どこからか男の声が聞こえる。いや、先程までは唸り声だったそれは、今や呻き声と称しても差し支えない程に深刻化していた。

……お前は雪乃なんかじゃない、嫌だ、くるな……誰だ、唸ってるのは……助けてくれ……来るな……うるさいな……嫌だ……

混濁し、支離滅裂になる思考。

その違和感と、うめき声の主に気づいたとき、葵の両目は見開かれた。

「っ！」

そのまま飛び起きる。

瞬間、眼前に首の折れた雪乃の姿が浮かんだが、すぐに消えた。

全力疾走をした後のように息が荒く、寝巻きは尋常ではない量の汗を吸って重くなっていた。

視界に映っていたのは、見慣れた自室が暗闇に沈んだ姿だった。

当然ながらあの交差点でもないし、おぞましい姿の雪乃もない。

しばらくの間、肩で呼吸をする。

あれが夢で、うなされていた自分の声で目が覚めたのだと実感が湧いてくるにつれて安堵感が全身を満たし、

「！」

急激な吐き気に見舞われた。

布団を跳ね除け、部屋と廊下の電気をつける余裕すらなく、葵は2階の洗面台で盛大に吐いた。

口に広がる胃液の味と、腹部が痙攣する不快感に耐える。

「うつ……げぼっ……」

ひとしきり吐いて楽になるにつれて、頭の中では考える余裕が生まれる。

自分は何という夢を見たんだろう。

雪乃があんな姿になる夢なんて、彼女が事故に遭ってから初めてだった。

それに　　脳裏には、病院の真つ白なベッドに横たわる雪乃の姿が過ぎった。それに、間違っても雪乃はあんな悲惨な最期ではなかった。むしろ、葵の見た限り外傷はほとんどなかったはずだ。

その上、肉体の有無はあれど、今もなお葵は雪乃と普通に接することができる。いや、お互いに意識してしまい会話のなかった以前よりも、遥かに関係は良くなっていると言えた。

だとしたら、何故あんな夢を？

葵は、両手に溜めた水を思い切り顔に打ち付けた。汗をかき火照っていた肌が冷水に包まれる。

何度も顔を洗うと、その度に自分の中の恐怖や混乱といった感情が少しずつ剥がれ落ち、洗われてゆくのを感じた。

「ふう……………」

棚から取り出したタオルで顔を拭く。鏡を見ると、雑踏に紛れたらすぐに見失ってしまいそうな、いつも通りの自分がこちらを見返していた。少しやつれている気がするが、それは吐いたからだだろう。最悪だった気分も、多少はマシになっていた。

ぶらさがる力二型の防水時計を見ると、時刻は午前一時半を過ぎたあたりだった。起床時間まではまだまだ余裕がある。可能ならもう一眠りしようかと考え、葵は薄暗い廊下をひたひたと進む。すると途中、一匹の猫が足元にまわりついてきた。

「あれ、ミィ。起きてたのかお前」

首輪についた鈴を鳴らすのは、いつもは1階のリビングにいるはずの飼い猫のミイだった。

葵はしゃがみ込んでミイの頭を撫でる。こうして彼女と接するのにも久しぶりだった。と言うのも、猫は霊の気配に敏感なようで、雪乃に取り憑かれてからは葵の側には絶対に近寄ろうとしなかったのだ。

しかし、どうやら今は主の異変を心配して来てくれたようだった。ミイの頭に触れる掌から、生物の持つ暖かさが伝わってくる。

ああ、生き物ってこんなに暖かいんだな。

命を燃やして光る灯火の温もり。

普段は当たり前すぎて気にも留めないような事が、今はとても新鮮に感じられた。あの夢を見たからなのか、夜中にこうしてミイと戯れるという特殊な状況だからなのかはわからなかったが。

そのうち葵に飽きたのか、彼女は背を向け長い尻尾を一振りすると、とたとたと階段を下りていつてしまった。心配してくれたとはいえ、あまりにも猫らしい態度に葵は苦笑する。

立ち上がって、自分の部屋の扉が開けっ放しだった事に気づいた。同時に、幽霊にくせにしっかりと睡眠をとる変わり者の幼馴染の姿を思い出す。

ばたばたと騒音を立ててしまったが、雪乃は起きなかっただろうか。

今更ながら、部屋までの残り僅かな距離を抜き足で進む。電気は点いていなかったが、明かり窓から差し込む光のおかげで歩くのに差し支えはなかった。

内側に向かって10センチほど開いていた扉のノブを、そっと掴む。秘密の宝箱を開けるかのように、ゆっくりと扉を押し、恐る恐る中を覗き込む。

はたして、中に広がっていたのは宝石のような光景だった。

正面の窓からは、雲一つない空に巨大な満月がどつしりと鎮座しているのが見えた。周囲の星々など目に入らないような威圧感はあるが、さながら大勢の家臣を従える皇帝のようだ。

部屋全体には、何にも遮られることのなかった汚れなき月の光がしんと降り積もっている。

水族館で感じたのとはまた別の、蒼く幻想的な空間。

それは、数十年も人の侵入を許すことなくそこにあり続けた、清浄な神殿を連想させた。

そして少女は、蒼光を一身に受け、椅子に腰掛けた体勢のまま目を閉じていた。

穏やかな寝顔は、全ての苦楽を内包してもなお慈愛に満ちた聖母のごとく。

見慣れたはずの高校の制服は、神の纏う装束のごとく。

神秘的な雰囲気の中に神々しさを伴い、松下雪乃はそこにいた。

そこが神殿だというのなら、その少女は打ち捨てられた後も自分を信仰する人間をひたすら待ち続けている、哀れな女神像だ。

一瞬、葵はそれが自分の幼馴染だとわからなかった。

その姿が、彼女が普段から表面に出している若葉のような瑞々しさや春の太陽のような朗らかさとは、あまりにもかけ離れていたからだ。

ただ、綺麗だと思った。

10年以上一緒にいて、雪乃のことを『可愛い』ではなく『綺麗』だと思ったのは初めてだった。

葵は、そろそろと女神に近づいた。理由はない。信徒が神と対面した時のような、おぼつかない足取りだった。

彼女の向かいで立ち止まる。

間近で見ると、彫像のような美はより一層強調されていた。

まつ毛の一本一本が、整った鼻梁が、肩にかかる髪が、胸腹で組まれた手が、降り注ぐ月光を閉じ込め、反射し、ガラスのような雪乃の姿を青白く浮かび上がらせている。

衰廃し停滞した空間だからこそ形を保っていられるような、ひどく儚げで憂慮な美。

それは同時に、人間には            いや、どんな生物にも到達することのできない、無機的な領域でもあった。

幽玄な空間に圧倒され竦んでいた葵は、熱に浮かされたように右手を伸ばした。

自らの前に現れた神は決して幻などではないと切願し、恐れを抱きつつも確かめようとする門徒のように。

事実、今の彼の瞳は、眼前の少女の他には何も映してはいなかった。

強張っていた指先が、眠り続ける雪乃の頬に近づく。

壊れ物を扱うかのように、優しく触れようとす

すつ、

葵の指は、雪乃の頬を通り抜けた。

直後、雪乃と重なっている指先を、新雪の中に突っ込んだかのような凄まじい冷寒が襲った。

これが、雪乃？

直後、葵の脳裏を駆け抜けたのは、それまで忘れていた子供の頃の記憶だった。

\*\*\*

幼い葵は、誰もいないグラウンドの片隅でひとり泣いていた。

クラスメイトに、ランドセルを隠されたのだ。

無くなっていたのは、午前の体育の時間。

それから、授業の合間の休み時間も、昼休みも、制限された時間の中で探し回った。

しかし、見つからない。

放課後になったが、ランドセルがなければ家に帰れない。

だから葵は、楽しそうに遊んだり、下校する子供たちを横目に、必死になって探した。

そのうち、雨が降り出した。

小雨だったそれは、すぐに大粒に変わり、傘を持っていなかった葵の全身を容赦なく叩いた。

秋口だったこともあり、降りしきる雨は葵の身体から熱を奪った。そのうち、ぞくぞくと悪寒がしてきた。

病気がちだった葵は、これが熱が出る前兆だと気づいたが、それでも黙々とランドセルを探した。

意地になっていたのだと思う。

雨の降るグラウンドからは遊んでいた人影が消えた。

レインコートと長靴、そして傘を装備した子供たちに馬鹿にされ、笑われた。

段々と、泣きたい気持ちになってきた。

学校に通える日もあまりないというのに、何故自分だけがこのような目に遭わなければならないのか。

考えると悔しくて、悲しくて、葵は泣いた。

俯いて、小さな拳を握りしめ、ぽろぽろと涙を零して。

その時、見つめていた自分の影の上に、大きな影が被さった。

あおいちゃん？

振り向くと、そこには赤い傘を差し出している雪乃が心配そうな表情を浮かべていた。

葵は慌てて涙を拭う。

どうしたの、あおいちゃん。なんで泣いてるの？

その時、雪乃は葵とは別のクラスだった。

葵がいじめられている事は知っていたし、今日だって言えばすぐに手伝ってくれただろうが、葵はそれをしなかった。

自分のせいで、雪乃までいじめの標的になるのが怖かったのだ。

もしかして、また何か隠されたの？

.....。

そうなんですよ？ いいよ、あたしも探したげる。

..... いい。僕ひとりでできるから。

葵がそう返すと、雪乃は驚いたようだった。

どうして？

だって、ぼくと一緒にいたら、ゆきのちゃんまでいじめられるよ。ぼくは、そうなってほしくないから。

雪乃のためを思ってた言葉だったが、それを聞いた雪乃は、何故か赤い頬つぺたを膨らました。

もーっ。そんなこと、気にしないの！ あたしとあおいちゃんはオサナナジミなんだから、そうするのが当たり前なの！  
でも。

それに、もしあたしがいじめられたとしても、別に平気だよ。だって、あたしにはあおいちゃんがいるもん！

ゆきのちゃん。

だからほらっ、行こ！ まずは学校入って、身体拭かなきゃ。またカゼひいちゃう。

言っが早いか、雪乃は立ち尽くす葵の手をとった。  
捉まれた腕から、雪乃の体温が流れ込んでくる。

活力と生命力に満ちた温もり。

冷え切っていた葵の体に、それは特効薬のような効果をもたらした。

雪乃がそう言うんだから、大丈夫。そんな絶対的な安心感があった。

うん。ありがと、ゆきのちゃん。

幼い2人は、手を繋いで校舎へと向かう。

雪野の手は、暖かった。

確かに、暖かったのだ。

\*\*\*

「……あ」

静寂が、破れた。

「あ……あ……」

葵は、全身が瘧おじのように震えだすのを感じた。

ここは厳かな神殿でも、神秘的な教会でもなかった。

部屋を満たしていた蒼は一瞬にして色褪せ、幽玄な空気は霧散し、



部屋はただの小汚い自室へと変わった。

しかし、目の前の少女は。

葵は、雪乃と、雪乃に触れた右手に視線を行き来させた。

彼女は、瓦解した世界の中において、先程と何一つ変わらぬ超然とした美を放っていた。

幻想的な空間においては一種の神々しささえ感じたその姿も、現実へと帰還した葵の目には、酷い違和感を伴って映った。

月光を浴び、ガラスのようだった雪乃の姿を思い出す。

生き物は、身体の方こう側が透けて見えることもない。

息吹を繰り返す自身の胸に、左手を添える。

生き物は、呼吸をしない時はない。

先ほど触れたミイの温もりが甦る。

生き物は、氷のような冷たさはしていない。

当たり前だ。それが生者と死者の違いであり、絶対的な差なのだから。

頭の中で、ずれていた何かが音を立てて元あるべき場所に戻ったかのような感覚がした。

ぼたり

葵は我に返った。

胸に当てたままだった左手に、水滴が落ちていた。

「……え」

葵のしている前で、雫はぱたぱたと落ちて数を増やした。

次を感じたのは、くすぐったいようなむず痒いような、頬の違和

感。

触れてみて、驚いた。

泣いている？

気づいた途端、堪えきれないほどの嗚咽がこみ上げてきた。

駄目だ、ここで泣くな。雪乃が目覚ます。

葵はベッドに飛び込み、頭から布団を被った。

シーツは悪夢を見た時の汗で冷たく湿っていたが、そんな事は気にならなかった。

湧き上がる衝動をかみ殺し、声を抑えてむせび泣く。

「ふ、つく、うああ……めん、ごめん雪乃………」

自然と、口からは雪乃に対する謝罪の言葉が連なった。

涙と共に、自分の中で様々な感情がうねり、混ざり合い、飲み込まれていく。

葵は、あえてその奔流に逆らおうとはしなかった。

以前よりもマシな関係？ 平和な日々が、ずっと続けばいい？

馬鹿か、俺は。

自分は、何も見ていなかった。気づかないふりをして、雪乃が死んでからの2ヶ月間、目を逸らし続けていたのだ。

4月8日。桜満開の入学式のその日、幼馴染はトラックに撥ねられて死んだ。

頭では理解しているはずだった。

彼女は『死んで』いて、今自分と一緒にいるのはあくまでも『魂』なのだと。

しかし、彼女の遺体と対面し、幽霊になった雪乃と一緒に葬儀に出席してもなお、心の底では理解できていなかった。いや、理解しようとしていなかった。

そして、自分に触れようとするのを頑なに拒み続けた雪乃の態度。

彼女はこうなる事がわかっていて、だからこそ葵がその一線を越えるのを何よりも恐れていたのだ。

それを、自分は。

雪乃の気持ちにも気づいてやれず、守り続けていた境界をあつさりと乗り越え、彼女の想いを蹂躪し、踏みにじったのだ。

くそっ、この大馬鹿野郎が！ 俺は、雪乃と一緒にいる価値なんかじゃないか。

葵は内心で、考えつく限りの罵詈雑言を自分に向けて放った。

しかし、どれだけ自分を傷つけたところで、次々に流れ出る血が尽きることはない。

葵は、やり場のない怒りを込めて、シートを握り締める。

ふいに、先ほど悪夢にうなされた原因がわかった気がした。

その身に降りかかった理不尽さを問う雪乃に、その答えをしつかりと感じていたではないか。

雪乃を護れなかったこと。

最後を看取ってやれなかったこと。

一緒に逝ってやれなかったこと。

そして、

現実に目を背け続けていたこと。

生前も死後も、彼女に対して何もしてやれなかったこと。  
秘められた想いに、ずっと気づいてやれなかったこと。

それは、自分の幼馴染に対する絶望的なまでに根深い罪悪感だった。

雪乃に憑かれてから潤い、充実し始めた生活。

その裏側で、葵の心の奥底は、一滴ずつ滴る罪の意識を確実に受け止め続けていたのだ。

『あたし達、今日から高3だね、葵ちゃん』

あれから約2ヶ月。

今、ようやく実感できた。

入学式の帰りまでの彼女と、今、葵の椅子で眠る彼女は決して同じではない。

確かにあの日

松下雪乃は、『死んだ』のだ。

## 第十九話

人は、初対面の相手がどういう人物かを判断する場合、どうしても見た目による印象が大部分を占めてしまう。

例えば、見る目に鮮やかな金色に髪を染め、歩くたびに大量に身に付けられた装飾品が音をたて、常に口元に軽薄そうな笑みを浮かべている学生服の男子とくれば、大人            とりわけ教師という人種の大抵は、まずいい顔をしない。

それに加え、無断欠席・遅刻共に多数、一部の教師に対する反抗的態度が重なれば、めでたくその地位は『要観察人物』から『要注意人物』へと昇格する。

私立清泉高校は、私立校の中では比較的校則が緩いほうであるが、さすがに『風紀を乱す異分子』            たとえば片桐和輝のような

を放っておくほど寛容ではない。

とりわけ、和輝の『反抗的態度』の的になった教師からすれば、校則を盾にして痛い目に遭わせてやりたい。

しかし、それがなかなか実行に移せない理由があった。

片桐和輝は、その見た目に反して頭がいいのだ。

その実力たるや、テストでは学年順位20番台から転落した事はないほど。一学年が400人前後である事を考慮すれば、十分すぎる結果だった。

和輝としては、授業中に眠りこけていようがサボろうが、教科書と親しい女子たちのノートさえあれば、大抵の内容は理解できた。

それでもわからない部分があると、好きな教師の科目であれば本人に質問し、嫌いな教師の科目だと、友人を頼る場合が多かった。彼の交友関係は他クラスに至るまで幅広い。小テストがある日にはきちんと出席するという抜け目のなさもあった。

あとは、テスト前夜に一夜漬けをしておけば、結果はおのずとつ

いてくる。

それは片桐和輝独自の理論、学校生活を円満に送るための処世術であった。

彼の友人、例えば水城葵などに言わせれば『そんな簡単に理解できたら苦労しない』という事になるのだが……………。

5月の中ごろ、和輝たちにとっては最早恒例となった中間テストが行われた。

その少し前、和輝はたまたま身についた靈感のせいで心身を疲弊しきっていた。一時は毎夜部屋に現れる霊のせいで気が狂うかとも思ったが、可奈子の祖母であり美術講師でもある大友タエにより、和輝の生活は平穏を取り戻した。

それから、和輝は慌てて勉強に取り掛かった。

疲れと時間の無さから、今回は成績の悪化も覚悟もしたが、テスト返却の日、返ってきた答案にざっと目を通した和輝は安堵した。

1学期の中間テストということもあってか、どれも自分の中での合格ラインは越えていたのだ。

ひとまず、危機は去った。あとは7月の期末テストまで、面倒な行事は何もない。

靈感騒動と勉強漬けで溜まりに溜まった鬱憤を晴らそうと、6月一杯は狂ったように遊びまくって部屋の掃除と模様替えをして新たにサボテンでも購入しようと密かに決意していた和輝だが……………現実、いつだって計画通りにはならないのである。

\*\*\*

6月に入ってからちょうど1週間めのある日。

和輝は教室の自分の席で頬杖を付きながら、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

照りつける日差しと湿り気を帯びた大気は着実に夏のものへと移行しつつあり、室内にいる和輝にも不快指数となって伝わってくる。早くも騒音という合唱を撒き散らしている蝉の声も、それに拍車をかけていた。

……………結局、雨もまだ降ってねえしなあ。

確か、天気予報のお姉さんが異常気象のせいだ。夏が早まったとか言っていた気がする。そのせいか、花壇で咲いている紫陽花もどことなく肩身が狭そうに見えた。

夏の様相を呈し始めたのは、何も自然だけではない。視線を校庭に落とすと、そろそろと下校する生徒たちの姿が映った。

6月に入り制服が夏服へと移行したので、生徒たちは皆パリッとしたカッターシャツに身を包んでいた。日光を反射する純白が目眩しい。

彼らも、夏というそれ自体が一種のイベントであるかのような季節の到来に、誰もが心躍るような表情を見せていた。

しかし、快活そうな彼らとは対照的に、

ちくしょう……あいつら、あんなに楽しそうな顔しやがって……。

和輝は心の中で呪詛を吐きながら剣呑な空気を放っていた。

本来ならば、自分もあの中にいて、友人たちと来る夏に向けての妄想話に花を咲かせていたはずなのだ。

それを、何が悲しくて放課後の蒸し暑い中、机に向かってなければならぬのか。

和輝は校庭から目を逸らすと、机をつけて向かい合わせに座っている男子生徒を見やった。

その男子生徒は机の上に教科書や参考書を広げ、問題を解いている最中だった。よほど集中しているのか、対面の和輝に見られているとは気づいていないようだ。

何かにつけて目立つ容姿の和輝とは対極にある、良く言えば大人

しそうな、悪く言えば地味な少年。  
中学時代からの親友、水城葵だった。

「できた。和輝、採点頼む」  
「……あいよつと」

和輝はつまらなさそうな表情のまま、ノートを受け取り自分の机に広げた。男にしては比較的綺麗な字が、持ち主の性格を連想させる。

葵のペンケースから赤ペンを抜き取ると 和輝は筆箱というものを持っていない 早速、問題集の答えの冊子と照らし合わせた。しゃっしゃつと、赤ペンが紙上を走る音だけが教室に響く。

ふむ。

無言のまま採点をしていた和輝だったが、ペンが進むにつれ、眠そうに細められていた目が驚きに開かれた。

丸を付け終わったノートを葵に返す。すると、彼はノートを見るなり「おおっ」と嬉しそうに叫んだ。

「和輝、ちよつとこれスゴいと思わないか？ 満点だぜ満点！」

「そうだな。中間テストの点数とは比べ物になんねーな」

「……お前、それを言うなって。肝心なのはマイナスを踏み台にしてどう変わるかだぞ？」

「……………」

「何だよ」

「……似合わねえ」

「うるさいっ！」

普段と同じく軽口を叩きながらも、和輝は内心ではこの友人に対して感心していた。

確かに、葵の学力は中間テスト時と比べると、2週間という短期



間で飛躍的に上昇している。

この友人は、決して頭が悪いという訳ではない。しかし、正直なところ学校の勉強には『不向き』だと考えていた和輝は、純粋に驚いた。

……………しかし。

「まあ、それでも俺の足元には太陽と冥王星の距離ぐらいに遠く及ばないけどな―」

「……………くそ、わからないようでわかるのが何かすごくムカつく……………」

和輝は、そんな感心などおくびにも出さずに憎まれ口を叩いていた。

最初のうちは、口に出して賞賛していたが、すぐにやめた。

面白くないのだ。

勿論、勉強が出来るようになったからなどという子供じみた理由ではない。

水城葵は、自分に対して何か隠し事をしている。

葵が和輝に『勉強を見て欲しい』と頼み込んできたのは、中間テストが返却された翌日の事だった。

珍しく深刻そうな顔をしていたので点数を聞いてみると、確かに今すぐにでも自主勉強を始めた方がいい有様だったので、二つ返事で引き受けたのだ。

それからは、毎日のように放課後の教室に残り、葵の勉強に付き合った。

6月は遊び倒すという計画は崩れてしまったが、悪い気はしなかった。むしろ、自分の『靈感事件』の際に散々助けられた恩を少し

でも返せると、嬉しくすらあった。

そして、一緒に過ごす時間が長くなったせいか、彼の些細な変化にもすぐに気がついたのだ。

度々話を聞き逃したり、視線が泳いでいたりする。自分や可奈子という時はそれまでと変わらずに楽しげに談笑していても、授業中など1人になると、ふっと考え込むような表情をする事がある。

葵の様子がおかしいと確信したのは、彼の成績が急激な上昇を見せ始めた頃だった。和輝は毎回、問題集の1ページを『宿題』と称して課しているのだが、ある日それを10ページも終わらせてきたことがあったのだ。どうしたのかと尋ねてみても、『暇だったからの一点張り。』

その様子は、追ってくる何かから必死に逃避しているようでもあった。

考えてみれば、葵が自主的に勉強を始めた事自体がおかしかったと言える。

高校3年生という立場だけを見れば何ら不思議ではないのかもしれないが、勉強に対して無気力だった人間が、急にそこまで変わるものだろうか。

しかし、自分からは葵の態度の変化について言及しなかった。

親友とはいえあまり個人的な事に土足で踏み込みたくはないし、深刻なようならそのうち自分から言い出してくれるだろうと楽観的に捉えていたのだが

2週間経った今でも、彼はその気配を一向に見せないのだった。

……………面白くねえ。

和輝は、再び問題集に取り掛かった親友の顔を穴の開くほど見つけた。

その表情は真剣そのもので、こちらに気づく気配は微塵も無い。

それがまた、和輝の不満を倍加させる。

漠然とだが、葵の態度が豹変した原因には察しがついていた。そして何故、彼が可奈子ではなく自分にだけ勉強の面倒を頼んだのかも。

だからこそ、葵に対して苛立ちが募る。それこそ、相談できそうなのは自分か可奈子ぐらいのものなのに。

しかも、こちらが異変に気づいているとは思ってもいないのだろう、相変わらず表面上では『いつも通りの水城葵』を演じているつもりになっている。しかしそれが偽りであると既に見破っている和輝にとっては、目の前でネタのわかっている手品を演じられるような、そんな白々しさを感じる。

「……………ちなみに。今、雪乃ちゃん、いるの？」

何気なく尋ねる。

呪文のような数式を紡いでいたペン先が、動きを止めた。

「いや、勉強に集中したいから、散歩に行ってもらってる」

「ふうん。ついにお前も、本腰入れて勉強に乗り出したってコトかあ」

嘘がすぐバレる男ってのは、将来結婚とかしたら困るだろーな！。キヤバクラ通いとか浮気なんて、顔に『やりました』って札でも貼ってあるようなもんだろーな。キョンシーみたいに。

閑話休題。

親友などという陳腐な言葉を使う気はないが、それにしても……………ねえ。

こいつが腹を割るのが先か、俺が我慢の限界を超えるのが先か。本人を目の前にしながら、和輝は何食わぬ顔をして指先でペンを回し続けた。

\*\*\*

真っ白なキャンバス。その上に、可奈子は下書きも何もせず、直に赤い絵の具を塗りこんでいく。何を描くかは特に決めていなかった。傍から見ると無意味な行動だと思われるそうだが、可奈子はこの行き当たりばったりな描き方が好きだった。見た目や物理法則に捕らわれず、自分の感じたままに描けるのは気持ちがいい。

部室内には、可奈子が筆を走らせる音だけが響く。たまたま可奈子以外の部員はおらず、気兼ねなく絵に集中することが出来る環境だった。

快調に筆を走らせる。最初は微笑を浮かべてさえいたが、その表情は真剣味を帯びたものとなり、そして徐々に険しくなっていた。やがて可奈子は唐突に動きを止めると、

びしゃっ！

キャンバスに絵筆を叩き付けた。

それまで描かれていた世界とは全く別の、紅く激しい華が咲き乱れた。やがて重力に従い滴る絵の具を見て、まるで血のようだ、と思う。

……………今日はもう帰ろう。憂鬱な気分になりながら、可奈子は片付けを始めた。

このところ、集中して絵を描くことができない。描こうとしてもすぐに自分のイメージとは違うものになってしまう。

理由はわかりきっている。葵と雪乃のことだ。

先日の中間テストが返ってきてからというもの、二人の態度が変化したのだ。表面上は変わらないように見える。しかし、一箇所だけ歯車が錆びたかのような、水面下のぎこちなさを、可奈子は感じ取っていた。

何かあった、のだろう。しかしその『何か』を、自分は知らない。当然だ。二人は幼馴染で、今では片時も側を離れることもない。可

奈子が二人と一緒にいる時間など、ごく僅かな時間に過ぎない。二人の間に何かがあったとしても、自分は蚊帳の外なのだ。……………そう考えると、何故か酷い疎外感を覚えた。

それに、こと雪乃に関しては気にかかることもある。

『変わらなければいい』。先日、祖母に対して放った言葉だ。

あの話は、その後祖母との間では交わされていない。しかし、その想いは数週間経った今でも変わっていない、はずだった。

それなのに、何故か『不変のものなどない』という祖母の言葉がしこりのように引つかかったまま、消えてくれない。それどころか、最近になってその大きさを増した気さえする。

葵と雪乃。

二人の顔が脳裏にちらつく。さすがに二人を前にして何があったのかは聞けないし、最近は特に雪乃が葵にずっと引ッ付いている。

…………… だったらせめて、雪乃の方から相談してくればいいのに。そんなに自分は信用が足りないと思われているんだろうか。それとも、自分には聞かれてはいけない内容なのか……………。

ああ、やめよう。

マイナス思考なのは自分の悪い癖だ。葵や雪乃、それに和輝が陰口を叩くような低俗な人間でないことは自分が一番よく知っている。今はただちよっと、歯車に油を差し忘れたみたいになっている、ただそれだけなのだ。時が来れば、また元の自然な関係に戻るに違いない。

後片付けを終えた可奈子は自分の中の悪いものまで一緒に吐き出そうとするかのように一度大きく深呼吸すると、美術室の扉を閉めた。

そこで、扉の鍵を職員室に返さねばならないことに気づく。そんなに遅い時間でもないし、そのうち他の部員が来る可能性もあるの。でそのままにしておいても良かったのだが、生来の性分が可奈子を職員室へと向かわせた。

職員室には、夕エの姿はなかった。仕方がないので、他の教師に言付けをして、鍵を夕エの机に置いておく。

失礼しました、と会釈をして扉を閉めると、正面の窓から対面の校舎が見えた。しかし、何気なく屋上に目を向けた可奈子は、眼鏡の奥の瞳を見開いた。そこに、よく見知った人物の姿を発見したからだ。

\*\*\*

ゆつくりと、可奈子は錆の浮いた扉を押し開けた。

普段、一般生徒には縁のない屋上だが、可奈子にとっては馴染み深い場所だった。最近は葵たちと昼食を共にする場所になった、というのもあるが、元から絵を描くお気に入りの場所でもあった。

丘陵に建っているだけあって、ここの屋上からは、可奈子たちの住む柏木市の町並みが見渡せる。特に今のように夕日が綺麗に出ていると、数々の屋根や店の看板、ビルの壁面がみな茜色に染められていて、まるで世界の黎明に遭遇しているかのような印象を可奈子に与えるのだった。

屋上に隅に設置された給水塔の上から、半透明の彼女は世界を見下ろしていた。

描きたい。この風景を。キャンバスの中に留めておきたい。

芸術家としての衝動に駆られるが、可奈子はそれをどうにか抑えこむと、佇む少女に向かって声をかけた。

「そこからだと、ここと違った景色でも見えますか？」

少女の物憂げだった瞳は見開かれ、可奈子に向き直った時には、普段通りの表情に戻っていた。同時に、キャンバス内に永遠に描き

とめて置きたかった、郷愁に似た雰囲気も消え去ってしまふ。

うつん。……可奈子ちゃんも上つてみる？

「遠慮しておきます。生憎と、高いところは昔から駄目なんですよ。観覧車などという拷問器具に乗る人の気が知れません」

えー、あたしは高いトコ好きだけどなあ。ちっちゃい頃とか、松ぼっくり取ろうとして松の木に登ったり

「……何故自然に落ちるのを待とうと思わなかったんですか」

ふわり。

雪が舞うのと同じ速度で、松下雪乃は可奈子の隣へと降り立った。

寒い。

気候によるそれとは明らかに別種の怖気を感じ、可奈子は気づかれないように身震いした。

そして、横目で雪乃の身体を微かに纏う、黒色の『それ』を見やる。

やはり、以前に比べ状態は確実に悪化している。

タエが言っていた『最悪の結果』が、可奈子の脳裏を過ぎる。しかしここで本人に直接言うのは……………。

…………… 葵ちゃんに『勉強の邪魔だから』って言われて追い出されちゃった

可奈子の沈黙をどう解釈したのか、雪乃が口を開いた。しかし言われた本人は、返すべき上手い言葉が見つからない。

最近、葵ちゃんすごいんだよ。中間テストの結果が酷すぎたからって、すごい勉強してるの。教える側のキンパツ君も、驚いてた。『飲み込みが早い』って

「それは……………すごい、ですね」

ついこの間まではさ、家ですることって言ったら漫画読むかゲームやるか音楽聴くくらいだった葵ちゃんが、机に向かって勉強してるの。放課後はキンパツ君に教えてもらって、休日も、朝から晩までずーっと

「……………」

まるで、何かから逃げてるみたい

橙に染められた西風に、可奈子の黒髪が踊った。

咄嗟に髪とスカートの端を押さえた少女が次に見たものは、口元に微笑を貼り付け、紫から濃紺へと沈みゆく町並みを眺望する雪乃の姿だった。  
もちろん、その髪もスカートも、風に揺れることはない。

「…………雪乃さん、」

何があっただんですか。

聞こうと、いや、聞かなくてはならないと思いつつも、声帯が凍りついてしまったかのように、可奈子はその言葉を発することが出来なかった。

何となくではあるが、彼女の言いたいことは想像がつく。

しかし、それを聞いて、自分はどうするのだろうか。彼女の答えに、自分は何を返せるのだろうか。今までもろくに人付き合いをしてこなかった自分に、既にこの世の住人でなくなった彼女に對し、どんな慰めの言葉が通用するのだろうか。

葛藤は沈黙を生み、沈黙は決定的とも言える溝を生んだ。

……………なんてね

「え？」



雪乃は、悪戯の結果を見守る子供のような含み笑いを浮かべていた。

「ごめんね、意味深なコト言つて。特に深い意味はないんだ。みんな今年は受験だし、本腰入れて勉強しないとね

「ゆ、雪乃さん？」

「いやね、最近授業中とかにちょっかい出しすぎたかな〜って思つてさ。反省してるんだよ、一応。葵ちゃん優しいから、勉強そつちのけで相手してくれてたし。あたしも『葵ちゃん離れ』しないと、つて思つてさ。あはは、可奈子ちゃんに言つようなことじゃなかったね。ゴメンね

「い、いえ、そんなことは……」

「それじゃあたし、そろそろ行くね。もう勉強も終わった頃だろうし。……………じゃあまた、明日

戸惑う可奈子がどうにか返事をするのと同じタイミングで、雪乃は屋上の縁から飛んだ。階段から迂回せず、葵のいる教室に直行するつもりなのだろう。

日も傾き冷えてきた屋上に一人、可奈子は取り残された。

どうして。

雪乃の立っていた給水塔をぼんやりと見つめながら、可奈子は自問した。

どうしていつも、こうなんだろう。

肝心な場面で無駄に考えを巡らし、その結果、失敗したり、後悔する。

いくら人付き合いが少ないとは言え、自分の言動が相手を傷つけたことがわからないほど愚かではなかった。

雪乃は、初めてと言っても過言ではない友達なのに。

人より特別なことが出来るからからと言って、実際には何の役にも立ちはしない。

可奈子は、左手首のブレスレットを上から強く握りしめた。珠が食い込み、それは赤く丸い痕となって、白く華奢な手首に残る。自分の為を思い、祖母が作ってくれたこのお守りが、どうしようもなく重く感じられた。

## 第二十話

綺麗に整頓された自室にて、可奈子は本を読んでいた。部屋にいれば自然と筆を取っていた可奈子にとって、絵を描く以外の行為を部屋するのは久々だった。普段なら食事を抜いてでさえ描いていた絵を描く気が、全く起こらないのだ。

家に帰り、放課後の屋上で見た雪乃を思い出してスケッチブックを前にしたものの、結局スケッチブックは真っ白なまま机の上に放り出された。

たまには読書もいいかと思い、本を開いたはいいものの、目で活字を追うだけで内容は頭に入っていない。海外の推理小説だったが、途中で「こんな登場人物いたっけ？」とページを戻ることもしばしばだった。

物語の中では、密室状態のトリックと共に、マーティンを殺した犯人が探偵によって暴かれようとしている。最大の山場のはずなのに、可奈子の頭をちらつくのは幽霊となった少女のことだった。

その時、鞆の中から何かが震動するような奇妙な音が聞こえてきた。

正体は、化石と呼称されそうな携帯電話だった。モノクロ画面、ストレートな形状、カメラ機能さえ付いていない旧式の型だ。どうせ家との連絡にしか使わないから、と未だに買い換えずにいる。

粗い液晶画面を見て、可奈子は目をみはった。着信だったのだ。それも、和輝からの。

サトミの事件の際、和輝にアドレスと番号を覚えてくれとねだられ、何となく交換した。メールでのやり取りは何度かあったが、電話となると初めてだった。何かあったのだろうか。通話ボタンを押す。

『あ、もしもし？ 犬神さん？ 俺。カタギリカズキだけど』

「わかってますよ、こんばんは。また地縛霊にでも首を絞められましたか？」

『おお、よくわかりで。もっとも、首を絞めたのは地縛霊じゃなくて生身の女の子だったけどな』

2ヶ月の付き合いで、彼の人となりも自然とわかった。いつも通りの生活を送っているようだ。

『それで、本題なんだけどさあ』

「ええ」

『最近、葵の態度おかしいの気づいてる？』

一瞬、言葉に詰まった。まさか直球で来るとは思わなかった。しかも、あくまで軽いノリで。

沈黙を肯定を理解したのか、和輝は苦笑気味に続けた。

『あれだけわかりやすかったら、気づかない方がどうかしてるか』

和輝の言う通りだった。やはり彼も気づいていたのか……まあ、当然と言えば当然だろうが。

「……………水城さんですけど、雪乃さんもおかしいんですよ。ちようど、中間テストの返却以来」

『そつか。喧嘩でもしたのかねえ。犬神サン、なんか聞いてる？』

「いいえ。もしかして、片桐さんですか？」

『そーなんよー。まったく水くせーよなあ。バレバレなのに本人は気づかれてないと思ってるしさ』

和輝にも言えないような『何か』があったのかと思うと、意外だったが何故か納得できた。そうでなければ、雪乃が『あんな状態』

になる訳が……。

そこで、可奈子は閃いた。そうだ、あの二人に直接言う前に、まず和輝に相談してみたら……。

『このままの状態が続いたら、俺キレちまうよ。教室の黒板に葵が中坊の頃の恥ずかしい写真を拡大コピーして』

「片桐さん。ちょっとお話があるんですが、よろしいですか」

『……………ん、どうしたの？』

改まった雰囲気を感じ取ったのか、向こうの声から軽薄さが消えた。それを確認した可奈子は、説明を始める。現在の雪乃のこと、葵のこと、そして夕エに通告された『最悪の結末』について。

一から説明をしなければならぬ部分があったので時間がかかったが、和輝は真剣にそれを聞き、ところどころ質問をした。飲み込みが早いので非常に助かる。

段々と和輝の声のトーンは低くなり、全ての話が終わる頃には完全に無口になった。

『……………なんてこった。そんなことになったら……………』

「ええ。トラウマどころの話じゃ済まないでしょうね」

『おいおい、何言ってるんだよ犬神サン。そうならない方法を考えるのが俺らだろ？』

「……………すみません」

そうだ。自嘲と自棄に踊らされている場合ではないのだ。内心で自分を叱咤する。

同時に、さも当然と言わんばかりに、二人のために行動するのを前提としている和輝にも、改めて感服の思いを抱いた。

「やはり、まずは二人の関係がおかしくなった原因ですよね」

『そうだな。さすがに二人を前にして聞くわけにもいかなえけど、俺はもう雪乃ちゃんの姿が視えないからどうしようもなくてさ』

「雪乃さん、最近の水城さんが何か言わない限りずっと側にいようとしてますしね」

『そーなん？ そりゃあ……………ただの喧嘩、って訳じゃないだろうなあ』

和輝が溜息をつく。

『…………俺としては、葵自身からこの話を聞きたいワケよ。言わばオトコとオトコの話し合いってやつ』

声は笑っているが、携帯電話の向こうで頬をひくつかせている姿が容易に想像できた。自分に相談のないことが、よほど腹に据えかねているのだろう。

「…………それと、雪乃さんにはこの話はまだしない方がいいと思うんです」

『そうだな　本当は、こんなコソコソしたやり方したくねーけど。コトがコトだからな』

「とすると、水城さんと片桐さんが話してる間、いかに雪乃さんを引き離しておくか、ってことですよ」

『そのとおり。それも、雪乃ちゃんには気づかれないようにな。問題は、いつがいかってコトなんだよなあ。深い話になると、昼休みなんかじゃ到底足りないし……………』

問題は他にもあった。葵に取り憑いているという性質上、雪乃は葵から、一定の距離以上離れることができないのだ。その範囲にして、およそ30メートルほど。遠いようで近いこの距離は、内密の話をするにはいささか心許ない長さでもあった。

『犬神サンの力でどうにかなんねーの？ 結界で霊を閉じ込めるとか。漫画の世界でよくあるじゃん』

「出来なくもないですが、絶対に本人に気づかれますよ」

むー、と和輝が唸る。サトミの口寄せをしてからというもの、3人から何かにつけて超常的なことで頼りにされている気がする。気のせいだろうか。

二人して電話越しに知恵を絞る中、やがて和輝が大声を上げた。

『犬神さん……………俺はついに閃いちまったぜ』

\*\*\*

可奈子と和輝が謀策を巡らせている最中も、葵は勤勉という言葉体を表すかのように勉強に取り組んでいた。

それまで安っぽいポップが流れていた部屋に響くのは、問題集のページをめくる音と、ペンを走らせる音のみだ。

松下雪乃は、机に向かうその背中をぼんやりと見つめていた。

最近、葵と話す機会はめっきりと減っていた。昼食時や休み時間、それと家に帰ってから勉強に取り掛かるまでに少々、その程度だ。内容も、可奈子など第三者がいる時でないと、変にギクシャクする。そもその口数が減ったし、自分と目もあわせようとしないのだ。当然、葵も自覚しているだろうが、お互いに口にはしない。まるで喧嘩をした後のようだ。

雪乃の脳裏に、葵と共に水族館に行った日のことが過ぎる。二週間ほど前のことなのに、小学校の時の思い出を懐かしんでいるような感じがした。

葵の態度がよそよしくなったのは、水族館に行った翌日からだ。その日の夜に何があったかは、眠っていた雪乃にはわからない。し

かし、何となくではあるが、悟っていた。

だからこそ、態度の変化の原因は聞けない。聞きたくない。

それを聞いたら多分、今までの平穏な生活が終わってしまうから。

それを考えると、すでに生身でない身体がぶるりと震える気がした。

その時、こんこん、とノックの音がした。葵が返事をする、扉が開く。登場したのは、お盆を持った葵の母親、恵子だった。

「紅茶持ってきたわよ」

「んー、ありがとう」

「ちょっとは休みなさい、集中力続かなかったら意味ないのよ」

「わかってるよ。そろそろ休憩しようと思ってたところ」

恵子は小テーブルに紅茶とクッキーを置くと、部屋を出て行った。葵が勉強を始めた頃こそ息子の体調を本気で心配していた恵子だったが、今ではようやく改心したんだと納得し、今のうちに差し入れを持つてくるなど協力態勢を見せている。母親としては嬉しい限りなのだろう。

葵はようやくペンを置くと、ミニテーブルの前に座りなおした。

お疲れ様。どう、進んでる？

「まあなー。古文と漢文は得意だから」

事も無げに答え、葵は備え付けのシュガーポットから砂糖を一つ取り出し、紅茶に入れた。スプーンで掻き混ぜ、口をつける。再び置かれたカップには、半分ほどの琥珀色の液体が残っていた。

雪乃はベッドに腰掛けてその一部始終を見ていたが、目の前のカップが一つだけなのを見て、何となく泣きなくなった。

どうしてだろう。あたしが死んじやってからは「当たり前



前」だと思つてた光景なのに。

あ、葵ちゃんって文系だったんだね

暗い気持ちを振り払うかのように、雪乃は話しかける。

「うん、逆に理数はサッパリだけだな」

あたしも物理とかは苦手。でも数学は楽しいよ。確率とかは、数学っぽくないし

「ふうん……」

キンパツ君はバリバリの理数系だね。「数学なんかパズルと同じだ」って言ってたし

「あいつは何でもできるよ」

そうだよねえ、英語とかもすごいよね。この間当てられてた時、すごい発音良かったもんね！

「帰国子女だからな」

あ……そ、そうだよ

「んじゃ、俺そろそろ勉強に戻るよ。まだ時間もあるし」

いつも通りの微笑と、穏やかな口調。しかしそこには、有無を言わせない拒否の意がこめられていた。

薄暗い部屋の中、雪乃は赤子のような表情で眠る葵の顔を見つめていた。

ここ最近では見慣れてしまったが、幼馴染の寝顔は意外と幼くて、つい可愛いと思ってしまう。本人には怒るので言わないが。

もそもそと、葵が身体を丸めようと動いた。寒いのだろうか。毛布をかけてあげようとして手を伸ばし、その手は毛布に触れる直前ではたと止まった。

やだ。あたしってば。またやつちゃった……………。

最近、よくモノに触ろうとしてしまう。幽霊としての自分に、馴れたつもりだったのに。

でも、と雪乃は思った。死んだ自分に馴れるっていうのも、すごい変な状況だな。

雪乃は窓をすり抜け、夜の静寂に満ちた町へと身を躍らせた。幽霊になってからというもの、散歩が趣味の雪乃だったが、最近はおっぱが寝てから行くことにしている。幽霊である自分は、眠る必要もない。寝ようと思えば眠れるが。誰もが寝静まる丑三時は、散歩にうつてつけの時間だった。

生憎の曇り空で月は隠れていたが、暑くも寒くもない適温で、心地よかった。ふと思い立ち、水城家の屋根に上がってみる。

すごい、こんなになってたんだあ。一回上がってみたかったんだよねえ。屋根って

ごく普通の瓦葺の屋根だったが、初めて訪れる、しかも生身の身体では絶対に行けなかったであろうその場所に、テンションも上がる。雪乃はそこで膝を抱えて座り込んだ。

もっと早く来てみればよかったな。こっから満月とかが見えたら最高なんだけど。そうすれば、葵ちゃんも連れてきて、一緒にお月見とか

そこで、はたと気づく。この家の構造上、人が屋根に上がるのは無理だった。

なんかあたし、本当に幽霊であることが普通になっちゃったな……………。

先ほど、テーブルに置かれた紅茶のカップが一つだったことが甦る。

同時に、学校で、仲の良かった友達とすれ違った時のことを思い出す。当然、誰も雪乃に気づくことはなかった。

胸が苦しくなってくる。……………駄目だ、考えちゃ。

だが、理性とは裏腹に連想されるのは、嫌なシーンばかりだった。寝ている葵に毛布をかけられなかったこと。

美味しそうだった和輝の手作り炒飯を食べられなかったとき。

自分の葬式に出るという、冗談にもならない状況になったあの日。

以前、友達から聞いた都市伝説のことを思い出した。肝試しの帰りにレストランに寄ったら、コップの数を一つ余分に出されたというものだ。

今なら、その幽霊の気持ち痛いほどにわかる。嬉しかったに違いない。だってコップを運んできたウエイトレスは、自分のことをちゃんと認識してくれたのだから。

辛かった。自分の存在が人から認識されないということが、こんなにも辛いものとは思わなかった。

それでも、葵と一緒にいられるならそれで良かった。可奈子や和輝という、良い友人にも巡りあえた。それは純粹に、嬉しい。

……………でも。

膝を抱えた腕に力をこめた。

あたしが取り憑いてるのは葵ちゃんで、あたしと喋ることができないのは葵ちゃんだけなのに……………その葵ちゃんにも嫌われたら、あたしはどうすればいいんだろう？

多分、他人から見ただ今の自分は相当みじめな女だろう。

飽きられ、疎まれてるのに、べったりとひつついて、会話をすれば空回り。最近、葵が寝てからでないと散歩をしない理由もそこにあった。

不安なのだ。

自分のいないところで、葵が別の世界を持つのが、怖いのだ。いくら24時間一緒にいると言っても、葵には雪乃の関与できない別

の世界を持つている。それは家族だったり、自分の知らないクラスメイトだったりする。そのどちらも、もう雪乃には手の届かない領域にある。

自分の見ていないところで、葵が『雪乃のいない世界』を楽しんでいると感じれば感じるほど、彼の中を占める『雪乃』の範囲はどんどん狭くなっていくだろう。

それが、怖いのだ。

いつそのこと彼の前から消えてしまえば楽なのだろうが、葵に取り憑いている以上、離れ続けることはできない。では、成仏となると……………。

雪乃は膝に顔を埋めた。

嫌だ。葵ちゃんと離れるなんて、絶対に嫌だ。それだけは、何があっても。だってあたしたち、あの時……………。

頭の中で再生されるのは、自分が生涯忘れることのない、そこそ人生で一番大事な記憶だった。そしてその記憶は、雪乃が幽霊として葵に取り憑く原因となったものでもある。

……………でも、葵ちゃんは……………。

俯いているので直接見ることはできなかったが、その時雪乃は、普段の彼女からは想像もできない、深く沈痛な面持ちをしていた。

ああ、あたしって、嫌な女なのかな。

きつとそうなんだろう、と雪乃は自答する。

とにかく自分がみじめだった。

生前、友人と『こうはなりたくない』と笑っていた女性像に、そっくりそのまま当てはまっている気がした。

それでも、こうして暗い気持ちでいたら、葵は余計に、どう接していいかわからなくなるだろう。それが怖い。

だから、いつか事態が好転する日まで　そんな日が来るのかはわからないけれど　あたしは、道化を演じ続けなければならぬ

のだ。

ふふっ、と痛ましい笑みが雪乃の顔に浮かぶ。

死んでからも、こんなに怖いものがあるとは思わなかったな。

生前のあたしは、死んだらそれで終わりだと思ってた。良い事した人は天国に行つて、悪い事した人は地獄に行つて………その程度にしか考えていなかった。

葵ちゃんが視ていた霊つてのも、この世に残つてる理由は恨みとか憎しみだけなのかと思つてた。でもつて、理性を失つたみたいに、とにかくその恨みや憎しみの対象に取り憑いたり、殺そうとするのかと思つてた。

でも実際は違う。

幽霊だつて、考えたり、悩んだり、後悔したり、するのだろう。

………ちょうど、今のあたしみたいに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6728a/>

---

背後霊との付き合い方

2010年11月24日15時56分発行